

昭和四十八年三月

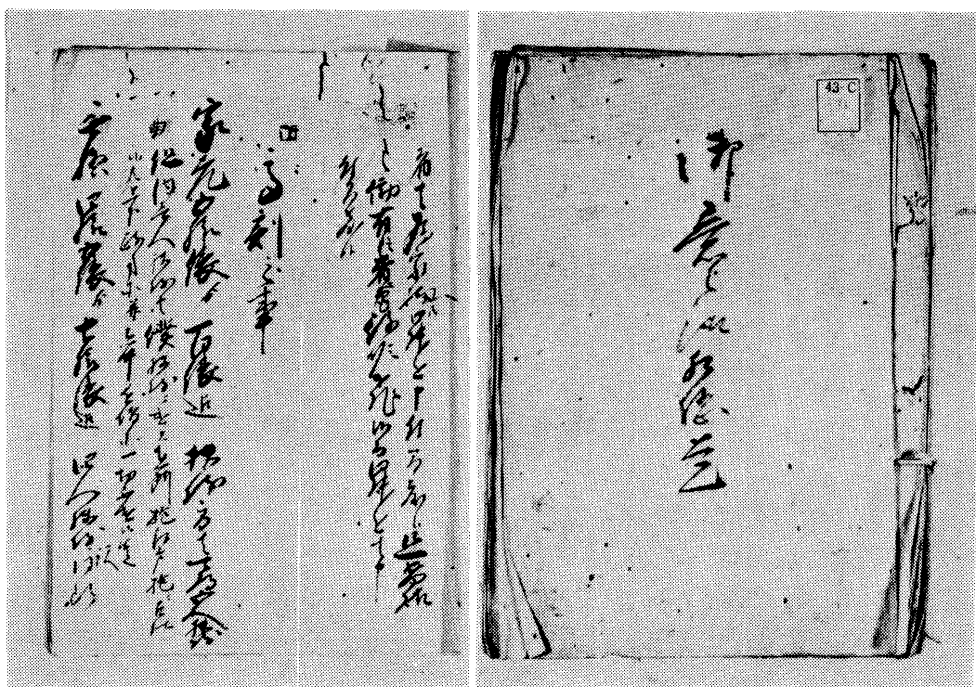
史料館所藏史料目錄

第二十一集

史料館

史料館所藏史料目錄

第二十一集



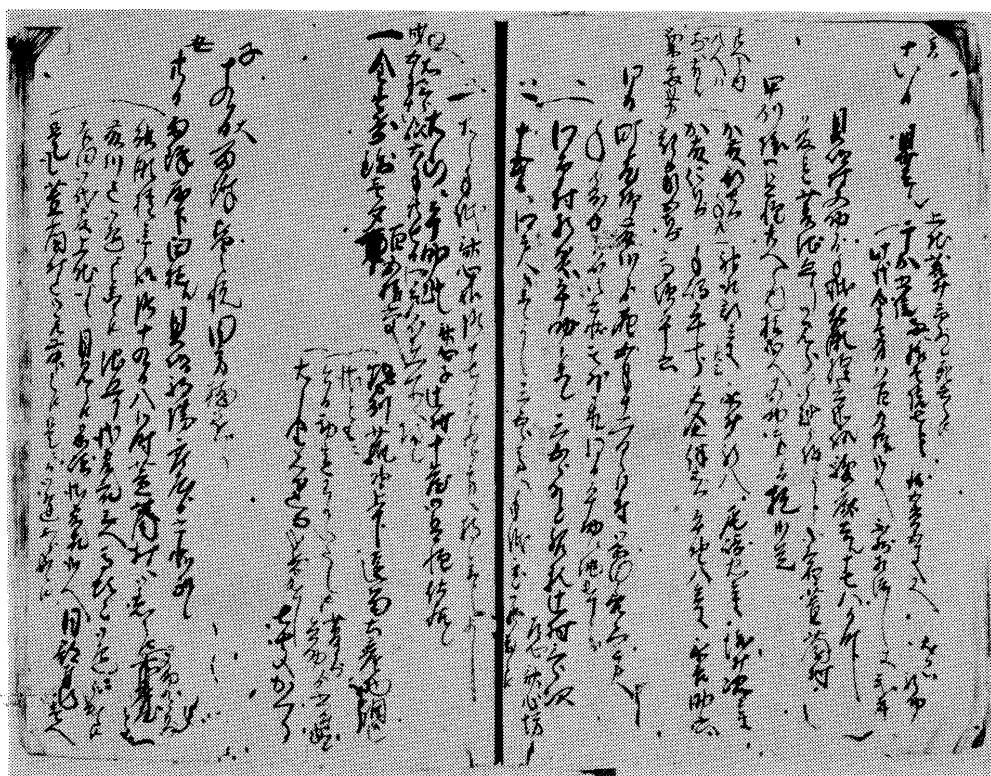
旗本家法〔部分〕

(旗本池田家文書 31)

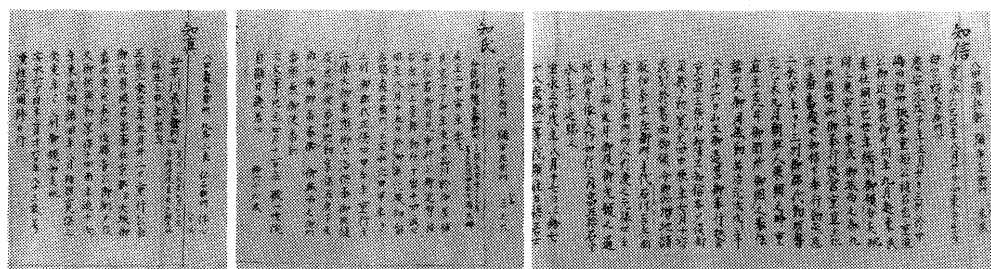


小普請金請取状 (旗本池田家文書 223)

同上 〔部分〕



宝永三年「大帳」(八田家文書 116)



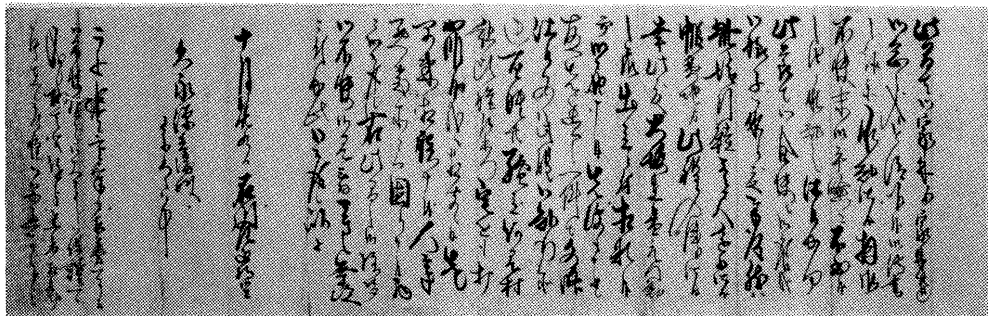
八田系図〔部分〕(八田篤子氏蔵)



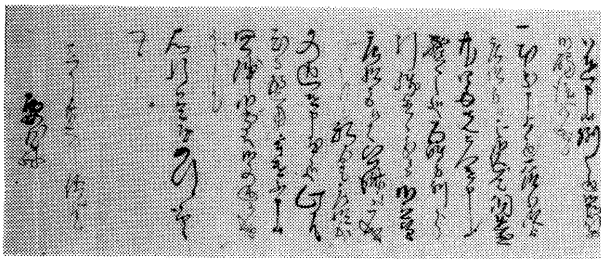
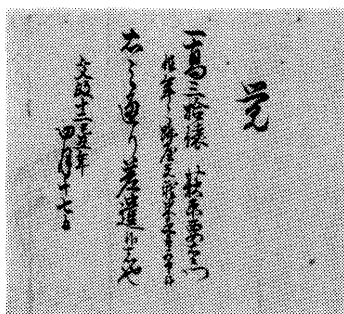
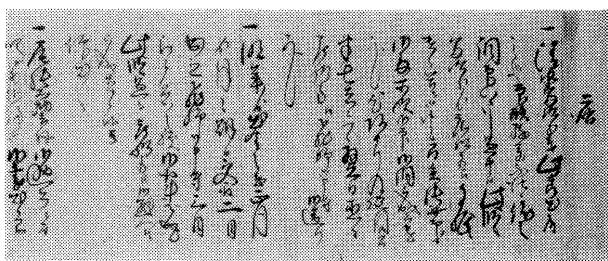
和州方役場御用書扣(和州御用場文書)



久永源兵衛勝信・源左衛門勝明・内匠信敏往返用状〔部分〕
(萩原家文書 20—1, 20—61)



勘定奉行石川左近将監書状(同上 51)



(上) 久永氏御書付
(同上 59—4)
(左上下) 萩原俊蔵書状
(同上 105—73)

凡 例

- 一 本目録は、『史料館所蔵史料目録』第二十一集として、当館所蔵にかかる旗本家および旗本知行所役人文書のうち「播磨国 屋形旗本池田家文書」、「三河国 深溝村八田家文書」(旗本板倉氏地役人)、「旗本 船越氏和州御用場文書」および「上野国 東小保方村萩原家文書」(旗本久永氏陣屋元役人)の四件を収めた。
- 一 史料は利用上の便宜を考慮して、その内容・体裁等に応じ、暫定的な大・中・小・小小の項目を立てて分類配列した。大項目は一〇ポイントゴチック活字、中項目は九ポイントゴチック活字、小項目は九ポイント活字で示している。また必要に応じて〇印で小小項目を示した。但し、内容が多岐にわたり他の項目中にも掲げることを妥当と考えたものは*印を付して重出した。項目や史料の下の↓印は、関連項目や史料を参照しやすくするために示したものである。
- 一 史料の記載欄はほぼ、(一)表題 (二)「」内容摘記 (三)作成者 (四)宛名 (五)作成年月日 (六)形態 (七)数量 (八)整理番号の順である。但し、史料「老中返札」等の「」内は、差出書状の内容を示した。いっいち「一への返書」とする煩を避けたためである。「」内年月日は記載内容期間を示す。但し、日記については、原則として記載範囲年月日にはいっいち「」を付けなかった。なお、「萩原家文書」の用状と書状に限り、収載箇条の数を「」内の末尾に付した。
- 一 表題(史料名称)は原則として原表題を採ったが、適宜改変を加えたものも多い。詳細は巻末解題を参照されたい。原表題の無いものおよび原表題を改変したものは仮りに命名して掲げ、(一)を付して前者と区別した。なお、変体・異体・略字等は、ハ・ルを除き原則として正字に改めた。
- 一 作成者または宛名は、表題から推知しうるもの、項目によって判明するものは適宜省略した。官名・所属名なども、必要に応じて付した。
- 一 写・控・案紙等の区別は、適宜、原表題のあるものはその下に八ポイント活字で、仮表題のときは(一)に表題に続けて示した。
- 一 作成年代は、年月日・干支もできるかぎり採り、簿冊等で数年にわたるものは、始年―終年を示した。(一)内は推定年代である。
- 一 史料の形態は、簿冊類では半(半紙判)、美(美濃判)、美大(美濃大判)、半半(半紙半截判)、横長半(半紙横長判)、横半半(半紙横長判半截)、横長美(美濃横長判)、横美半(美濃横長判半截)などの略称によって原書の大さの大概を示すにとどめ、一紙書附類は通をもつて数量を示し紙形の大小・寸法は省略した。継文書であることをとくに示す必要のあるときは、継一通のごとく示した。また絵図・折本類は縦横の寸法を、卷子本は縦の寸法をセンチメートル単位で示した。

- 一 数量の上部に示した板は木版物、刊は公刊活字印刷物、印はとくに公刊を目的としない活字印刷物である。
- 一 最下欄の数字は、各史料の整理番号を示す。照会・閲覧・引用の場合に利用されたい。
- 一 巻末に簡単な解題を付した。

目次

口 絵

凡 例

頁

播磨国 旗本池田家文書目録

一

目次

二

目録

三

三河国 八田家文書目録

一五

目次

一六

目録

一七

旗本 和州御用場文書目録

四三

目次

四四

目録

四五

上野国 萩原家文書目録

四九

目次

五〇

目録

五一

旗本池田家文書目録解題……………七五

八田家文書目録解題……………八六

和州御用場文書目録解題……………一〇八

萩原家文書目録解題……………一一六

屋播
磨
形国

旗
本
池
田
家
文
書
目
録

播磨国 旗本池田家文書目録目次

領 知	三頁	信 仰	八	助郷免除願	三
知行所絵図	三	寺 社	九	土地出入絵図	四
郷村高帳	三	勤 仕	九		
知行所人数帳	四	勤 役	九		
郡村仮名附帳	四	武術調練	一〇		
法 令	四	寄合組	一〇		
池田家法	四	御用状	一〇		
幕府触書	四	御役金	一一		
明治布告	五	知行所支配	一一		
池 田 家	五	知行所絵図	一一		
系譜	五	郷村高帳	一一		
同族系譜	五	知行所人数帳	一一		
相 続	六	郡村仮名附帳	一一		
縁 組	六	陣 屋	一一		
御目見・献上・拝領	七	代官達	一一		
家 禄	七	在所御用留	一二		
諸家書状	七	在役所日記	一二		
諸家宛書状	七	在所御用状	一二		
屋敷普請	七	宗門改	一二		
御道具	八	収納請払	一二		
葬 祭	八	公儀御貸附金	一三		
		酒造米	一三		

播磨国
屋形
旗本池田家文書目録

(文書記号 43C)

領知

知行所絵図

(播磨国旗本池田氏知行所絵図)

御在所御家中絵図 慶応二年

(御在所御家中屋敷絵図)

1	伊藤寛之進構	67×64	一鋪	一八五
2	安見忠次構	62×45	一鋪	一八五
3	岩城直作構	62×45	一鋪	一八五
4	岩城与構	58×30	一鋪	一八五
5	深谷嘉久見構	45×41	一鋪	一八五
6	石田慎之丞構	61×45	一鋪	一八五
7	御足輕部屋・御作事部屋	73×31	一鋪	一八五
8	西村定之助構	68×30	一鋪	一八五
9	安原友右衛門構	56×29	一鋪	一八五
10	山口文之進構	60×44	一鋪	一八五

郷村高帳

播磨国 ^{神東郡} 之内郷村高帳	池田将監	御勘	美大	一冊	102
定所宛 寛政一二年					
播磨国 ^{神西郡} 之内郷村高帳	池田中務	御勘	美	一冊	101
定所宛 天保四年五月					
播磨国 ^{神東郡} 之内郷村高帳	池田中務	御勘	美	一冊	103
定所宛 天保五年二月					
播磨国 ^{神東郡} 之内郷村高帳	池田中務	御勘	美大	一冊	105
定所宛 天保五年三月					
播磨国 ^{神東郡} 之内郷村高帳	池田鎗三郎	御勘	半	一冊	107
勘定所宛 慶応三年六月					
知行所村高書付 池田内記	天保一四年一二月		美	一冊	108
知行所村高書付 池田右京	卯一二月		美	一冊	109
何国何郡之内郷村高帳	何郡何之誰	御勘定所	美	一冊	110
何国何郡之内郷村高帳	何郡何之誰	御勘定所	半	一冊	111
何国何郡之内郷村高帳	何郡何之誰	御勘定所	半	一冊	112
何国何郡之内郷村高帳	何郡何之誰	御勘定所	半	一冊	113
何国何郡之内郷村高帳	何郡何之誰	御勘定所	半	一冊	114

知行所人数帳

播磨国 ^{神東郡} 之内知行所人数帳	池田将監	美	一冊	二六
御勘定所宛 文化元年八月				
播磨国 ^{神西郡} 之内知行所人数帳	池田采女	美大	二冊	二七
御勘定所宛 文化七年七月				
播磨国 ^{神東郡} 之内知行所人数帳	池田主殿	美	二冊	二二
御勘定所宛 文化一三年七月				
播磨国 ^{神東郡} 之内知行所人数帳	池田鎗三郎	美	一冊	二三
御勘定所宛 文政五年七月				
播磨国 ^{神西郡} 之内知行所人数帳	池田内記	半	一冊	二四
御勘定所宛 弘化三年八月				
播磨国 ^{神東郡} 之内知行所人数帳	池田内記	半	一冊	二五
御勘定所宛 安政五年八月				
郡村仮名附帳				
播磨国郡村仮名附帳	池田将監	美	一冊	九一
享和三年六月				
播磨国郡村仮名附帳	御勘定所宛	半	一冊	九三
享和三年六月				
郡村仮名附帳	小野久之進 ^{外宛}	半	一冊	九四
享和三年五月				
何国何郡仮名附帳	御勘定所宛	半	一冊	九三
何郡何之誰				

法令

池田家法

政美公御条目 (宝曆六年一〇月)	美	一冊	三〇
御意之趣相認覚 (池田政美)	半	一冊	三一
被仰渡書 ^外 安永八年五月	半	一冊	三三
御政道書 天明二年一〇月	半	一冊	三三
御政道書写 寛政三年一二月写	半	一冊	三四
幕府触書			
御触書写 九月	横半半	一通	三〇
(軍役之儀問合ニ付目付より返札) 天保一四年		一通	四一
(御触書留) 嘉永七年六月		一通	三六
(御触書留) 万延元年四月		一通	三六
(政道心得条々)			
条目 亥六月	半	一通	一六
御綸旨御教書御条目御触書数通之写 天保六年二月写	半	一冊	一四
從御所被仰出候御書付写 慶応三年一二月	半	一冊	三五

明治布告

御布告写	明治六年五月ヨリ	半	一冊	五〇
御布告写	明治六年五月一四日	半	一冊	五三
御布告写	明治六年八月二日	半	一冊	五三
(御布告写)	明治六年	半	一冊	六〇
(御布告写)	明治六年	半	一冊	五六
御布告写	明治七年一月ヨリ	半	一冊	五二
(御布告写)	明治七年	半	一冊	五四
(御布告写)	明治八―九年	半	一冊	五九

池田家

系譜

先祖書	池田鎗三郎	明治四年五月	美	一冊	一
系図写	恒利公ヨリ政濟ニ至ル		美	一冊	二
家系	輝澄七男政濟流系第廿四		美	一冊	三
系譜				一通	一六〇
系譜之写	校正池田氏系譜卷之六	文政一三年四月写	美	一冊	五
(福本池田家・屋形池田家分知書上)				一通	二六九
之助	八月五日			一通	二七〇
(福本池田家・屋形池田家分知下書)					

(士族池田鎗三郎履歷届) 飾磨県庁宛 壬申四月

系譜統録条例 池田章政編 明治一八年五月

同族系譜

池田家統集		美	七冊	九
池田家大系図		半	一冊	八
(池田家系譜)		6×13	一冊	一六三
(池田家系図下書)			九枚	一七
校正池田氏系譜卷之三		美	一冊	四
池田長幸分葉外		美	一冊	一八
池田大学処長家系			一通	二六四
源長貞家系			一通	二六三
池田備中守家系		半	一冊	六
池田修理殿家系		半	一冊	七
池田右近大夫輝興公系図抜書日写	明和四年六月二日		一通	二六五
○				
松原家先祖書		半	一冊	二六四
御奉公之品書上	松原寛之助	美	一冊	二六六
安政元年二月晦日				
御奉公之品書上	松原寛之助	美	一冊	二六三
安政六年二月晦日				
御奉公之品書上	松原寛之助	美	一冊	二六一
元治元年二月二九日				
	伊木長門外宛			

御奉公之品書上 松原曠 高木舍外宛 明治三年二月二十九日		美	一冊	三三
御奉公之品書上 松原曠 高木舍外宛		半	一冊	六五
御奉公之品書上 触頭兩人宛		半	一通	二二
石黒家系図		美	一冊	六七
学校御留方年々有之御奉公之品書上写 (慶長九年) 明治二年		美	一冊	二六
相 続				
跡目願一件手続 池田主殿 文政二年三月		半	一冊	三
父主殿跡目願一件 池田鎗三郎 文政二年三月		半	一冊	三
(池田勝之助病氣ニ付先養子願一件留書) 享保二年五月		半	一通	六七
(急智養子願一件書留) 池田隆之助 寛政三年九月		半	一冊	三五
御養女御届并御智養子御願取斗帳 文化元年四月		半	一冊	三四
(智養子ニ付親類書書上) 池田千之助 植村駿河守外宛 文化四年八月		半	二通	六
千之助様月並五節句并年始御出仕御願取斗一件 九月一八日		半	一冊	七
縁 組				
池田様御覚書 (婚礼)				三
1 (池田様と桑原様江御送り御祝儀物) 五月			一通	
2 桑原様江御持参品御目錄案			一通	
3 合盃之次第書 (婚姻届)				
1 御内慮伺 池田政樹 和田義比・中村方義宛 明治二六年五月			一通	三〇
2 結婚済御届 池田政樹 和田義比・中村方義宛 明治二六年七月一七日			一通	
3 送入籍御届 池田政樹 岡山市長新庄原信宛 明治二六年七月一九日			一通	
政樹様御妹於龜様池田虎雄様御嫁入御祝儀諸事記 明治五年一月		半	一冊	六
送藉之事 岩崎源十郎外 岡山県第一大区第一小区正副戸長宛 癸酉二月			一通	二
親類書				五
1 親類書 (池田鎗三郎)			一通	
2 親類書 (池田内記)			一通	
3 親類書 (池田千之助)			一通	
御受取証 (婚礼道具) 竹内武 池田宛 明治二五年二月一六日			一通	三三
遠類書 (池田將監) 文化元年何月			一通	六
(養女届) 松平兵庫			一通	二六
池田清藏出生記 享保四年六月七日		半	一冊	六
(縁組願) 松平尚三郎取次三浦和泉守外 二月一八日			一通	三五
(妻無御座召仕之内懐胎之婦人無御座儀届出) 松平淡路守 一〇月六日			一通	二七

(病家江相詰医師届) 松平淡路守 一〇月六日

一通 三六

御目見・献上・拝領

(病身ニ付御目見延期願) 池田勝之助 八月

一通 二六

八朔御太刀献上伺 池田鎗三郎 七月二十五日

一通 三九

亥猪御祝之節滝川安芸守殿扣我等頂戴罷出候一件帳 池田 文化一三年一〇月一二日

半 一通 六

(御鷹之雁拝領) 松平安芸守外宛

一通 三六

家 禄

(家禄ニ付伺書) 池田鎗三郎 明治四年三月

半 一通 六二

請取申禄制之事 池田鎗三郎 生野県庁宛 明治四年九月

一通 二六

(家禄渡留書) 明治七年

半 一通 五

(家禄奉還留書) 明治七年

半 一通 五

諸家書状

御大名様方書状留

半 一通 三

知行所古事文通 (嘉永六年)

1 (書状) 近藤平七 池大君宛 五月二九日

一通 一七

2 (書状) 岩城運八 御前様宛 五月二八日

一通 一

3 (書状) 深谷善十郎 上宛 五月二七日

一通 一

4 (書状) 岩城運八・伊藤覚之進

一通 一

(書状) 鈴木嘉十郎 池田鎗三郎宛 六月

一通 一九

(書状) 真之丞・左内 池田鎗三郎外宛 二月一〇日

一通 二〇

(書状) 松原右衛門 池田鎗三郎宛 正月二三日

一通 二〇

(書状) 民部 池田鎗三郎宛

一通 二〇

(書状) 貞之丞 池田鎗三郎外宛 二月一四日

一通 二四

(書状) 池田鎗三郎宛 正月二三日

一通 二〇

(書状) 稻葉源十郎 池田政樹宛 五月四日

一通 二五

(書札例写)

美 一通 二四

諸家宛書状

(年頭御祝詞) 池田政樹 河原信可外宛 一月二日

一通 二〇

(書状) 池田鎗三郎宿 二月二四日

一通 二二

(書状) 池田鎗三郎宿 二月一五日

一通 二三

(書状写)

半 一通 六

屋敷普請

御奥向御修復御注文 大工喜太郎 安政元年三月

半 一通 二三

注文仕法帳 寛政六年二月

半 一通 二三

御普請諸入用請払勘定帳 豊島一 安政三年四月一十二月

半 一通 二四

御普請金請払勘定帳 藤波勇馬 安政三年五月	半	二冊	一三三	禁裏絵所繪割	半	一冊	一五七
(御普請金請取書) 経師藤五郎 池田家御役人衆中宛外		一綴	一六五	明君備公録 全	半	一冊	一六
(新御殿御普請金請取書)			一六六	四家雑談	半	五冊	一五八
1 (新御殿御普請金請取書) 渋屋弥七 八月一六日		一綴		浄徳院様御言行録 文化一四年七月撰	美	一冊	一五
2 (新御殿御普請金請取書) 経師藤五郎 池田様御役人衆中宛外		二綴		葬 祭			
(御普請金請取書)			一六九	素心童子様御逝去御葬送御入用勘定帳 藤波勇馬 元治二年正月	半	一冊	一六
1 (御普請金請取書) 左官喜八 池田様御役人衆中宛外		一綴		(法事御振合書)		一通	一五五
2 (御普請金請取書) 瓦師清次郎 池田様御役人衆中宛外		一綴		(形見分品書)		一通	一五三
(屋敷間取図)		一枚	一七〇	重修年中行事冠婚喪祭礼式	半	一冊	一六
口上(池田鎗三郎困窮ニ付御屋敷・馬屋拝借延期願) 池田甲斐守・松平冠山・池田三之丞・池田鎗三郎		一通	一三六	明治三年二月写			
御道具				信 仰			
差上申証文之事 (吉光御腰物請取) 原武右衛門外 小川伝左衛門外宛 享保一八年四月一八日		一通	一八七	念仏縁記百万遍縁記祈禱念仏由来	半	一冊	一四四
御召物類取調帳			一三	法然上人御作	半	一冊	一四三
1 御召物類取調帳 御納戸 巳六月	横半半	一冊		おふみのうつし (明応七年)	半	一冊	一四六
2 吉作様残り御衣服類覚 三月一〇日	横半半	一冊		浄土感見物語 明和七年写	半	一冊	一四七
御書籍取調帳 御納戸扣 文化九年	半	一冊	一五	三養雑記	半	一冊	一四八
				累げだつ物語 寛政一〇年写	美	一冊	一四九
				徳本上人行状和讃 安政六年写	半	一冊	一五二
				善悪種蒔和讃 全 文政一三年	半	一冊	一五三
				日岐目鳴弦大事直伝行儀口伝	半	一冊	一五三
				日岐目鳴弦大事直伝行儀	美	一冊	一五四

p11上段とダブリ

御開運御守本尊驗証梗概	美	一冊	一五五	(摺物)	一包	一八三	
光明真言和讃	16×7	一冊	一七四	六段前哥	横半半	一冊	一七九
高王観音経	16×7	二冊	二六九	寺			
くわんおんきやう	16×5	一冊	二九〇	社			
妙法蓮華経観世音菩薩 普門品第二十五	17×7	一冊	二九一	口上覚 (福本徹心寺の差書出候届写)		一通	二九三
(祈願文)	14×7	三冊	二九二	(書状) 関山栄 和尚宛		一通	二九四
唯一神道行事	半	一冊	二五〇	由緒書 誓願寺		一通	二七七
東照宮祝詞		一通	二七五	武州松連寺略縁記		一通	二七六
十種瑞宝布留袂		一通	二九六				
なかとみのはらひ	横半半	一冊	二六六	勤 仕			
盗賊除修法 松平神社別当所		一通	二七一	勤 役			
吉田御伝神道幣切形		一通	二七三				
北辰妙見宮自供養作法		一通	二七三	火事場諸勤方記	横半半	一冊	二八三
1 北斗妙見宮自供養作法		一通		火叟番心得留 御目付介勤方	横半半	一冊	二八四
2 北辰尊降臨日供物		一通		御名代番火口番心得	横半半	一冊	二八六
3 大聖歡喜天真言		一通		火口番日記留同書上案	横半半	一冊	二八四
曾我除劍難守護		一通	二四四	火口番註進状案	横半半	一冊	二八三
安山決定秘符並御守 安養院		一通	二七五	諸註進状案	横半半	一冊	二八九
(御守札) 弘化二年		一通	二八一	諸註進状留	半	一冊	二九〇
出世大黒天 池田政樹施 文久元年九月大安日		二枚	二七七	防大名御門詰心得	横半半	一冊	二九六
御洗米		一包	二七六	(采女門番人、支配宮田貞八方江申出之条々)		一通	二四九
線亀香		一包	二八〇	甲府巡見記	半	一冊	二八〇

駿府巡見記

甲府在勤手元入用留 九月

御進発御供ニ付諸達書留 慶応元年九月

大坂御在坂中出火之節御註進并御書上扣留

御巡邏ニ付諸用留 慶応二年五月一七月

巡邏姓名取調帳 池田鎗三郎 慶応二年六月一七月

新御番大御番小十人講武所方・船場島之内昼夜巡邏之者姓名 御目付介池田鎗三郎外

船場嶋之内昼夜巡邏之者姓名

御船場迄御供建 御目付助池田扣 慶応二年八月晦日

家来人数并持越候品書付 御目付介池田鎗三郎

(御側衆酒井但馬守差添野州辺派遣方達) 池田鎗三郎宛

退役願一件帳 池田鎗三郎扣 慶応二年一二月

(足袋着用願) 池田采女 三月二一日

武術訓練

不快痛所等ニ而上覽御断申上候姓名書 講武所奉行 九月七日

廻章 (講武所訓練ニ付御役当割書付) 木原兵三郎 長田六左衛門宛 四月五日

(野試合罷出候姓名届) 御小性組松平河内守組

(野試合罷出候姓名届) 御書院番柴田越前守組 丑七月

半 一冊 八

横半半 一冊 七

半 一冊 六

横半半 一冊 五

半 一冊 四

横半半 二冊 六

横半半 一冊 六

横半半 一冊 六

横半半 一冊 六

横半半 一冊 六

半 一冊 六

半 一冊 六

半 一冊 六

半 一冊 六

半 一冊 六

半 一冊 六

半 一冊 六

半 一冊 六

半 一冊 六

半 一冊 六

半 一冊 六

半 一冊 六

(野試合罷出候姓名届) 小十人余語金八郎組 一通 三九

(野試合罷出候姓名届) 新御番須田久左衛門組 一通 二四

(鎗術上覽之達) 二月二三日 一綴 二九

寄合組

(寄合一紙証文連名相洩姓名) 寅一〇月 一通 二四

(寄合一紙証文連名相洩姓名) 寅一〇月 一通 二四

(寄合一紙証文連名相増姓名) 寅一〇月 一通 二四

(寄合一紙証文連名相増姓名) 寅一〇月 一通 二四

(寄合一紙証文連名相増姓名) 寅一〇月 一通 二四

(寄合一紙証文連名相増姓名) 寅一〇月 一通 二四

(寄合一紙証文連名相増姓名) 寅一〇月 一通 二四

御用状

(御用召状) 板倉佐渡守内津田判兵衛外 池田勝之助御用人中宛 八月四日 一通 二六

(御用召状) 板倉佐渡守外 池田震五郎宛 二月一七七日 一通 二六

(御用召状) 堀撰津守 池田采女宛 二月二六日 一通 二六

(御用召出請状) 池田采女 二月二六日 一通 二六

(御用召状) 植駿河守外 池田采女宛 四月一三日 一通 二六

(御用召状) 笹本藤左衛門外 池田采女御用人中宛 五月三日 一通 二六

(市ヶ谷御門番辞令) 岡野肥前守外 池田
将監宛 六月五日

一通 一四

(御城江出仕令状 御使先九名) 本安芸守
御使番池田内記宛 一月一四日

一通 一六

(書状 出火乗附註進案届ニ付) 寛助兵衛
池田鎗三郎外宛 八月二五日

一通 一四
P八下段とタブリ、
内容はP八のもの

(御用召状) 小相模守 池田右京宛 四月
晦日

一通 一五

(御用召状) 青山下野守外 松平尚五郎宛
一二月二六日

一通 二四

御役金

請取申小普請金之事 服部専藏外 池田主殿宛
文化一四年一月六日

一通 一六

請取申小普請金之事 都築金三郎外 池田内記
宛 嘉永二年七月五日

一通 二三

(旗本寄合役金ニ付達) 池田内記宛

一通 一六

(火事場見廻り相勤候付役金免除達) 池田采女宛

一通 二六

(西丸御普請高割上納金免除御札状) 池田右京
八月

一通 二六

知行所支配

知行所絵図 (↓「領知」)

郷村高帳 (↓「領知」)

知行所人数帳 (↓「領知」)

郡村仮名附帳 (↓「領知」)

陣屋

御陣屋内不用建物取調帳 明治四年二月

半

一冊 二〇

代官達

(村方払ニ付達) 深谷善十郎・伊藤寛之進
領分村々名主年寄宛 二月一四日

一通 一七

(追放ニ付達) 深谷善十郎・伊藤寛之進
領分村々名主年寄宛 九月晦日

一通 二五

(親孝行不孝農業精不精人柄善惡之者申出ニ付
達) 深谷善十郎・伊藤寛之進 領分村々名主年寄
宛 三月

一通 二六

(領分村々若者寄合酒ニ付取締達) 岩城運八・
伊藤寛之進 領分村々名主年寄宛 六月二七日

一通 二七

(家中石田氏中小性格安原氏中小性次席被仰
付ニ付達) 岩城運八・伊藤寛之進 領分村々
宛 丑正月

一通 二六

播磨国神西郡谷村百姓武右衛門孝行行状書
池田直次郎 寛政七年七月一日

美

一冊 一〇

在所御用留

御用書 慶応元年八月

半

一冊 一七

御用書 慶応二年二月

半

一冊 一六

廻状留 慶応二年正月一八月

半

一冊 一五

御旅中日記留帳 池田用所 慶応二年九月一
〇月

在役所日記

日記 御役所 寛政一二年七月一二月	半	一冊	六
御役所日記 文久三年正月一二月	半	一冊	六
日記 慶応元年七月一二月	半	一冊	六
日記 御役所 慶応二年正月一七月	半	一冊	六
日記 御役所 慶応二年七月一二月	半	一冊	六
日記 御役所 慶応四年正月一七月	半	一冊	六
日記 御役所 慶応四年八月一二月	半	一冊	六
日記 池田用所 明治六年一月一二月	半	一冊	六
日記 池田用場 明治七年一月一九月	半	一冊	七
日記 池田用場 明治八年四月ヨリ	半	一冊	七
日記 明治九年一月一二月	半	一冊	七
日記 七月ヨリ	半	一冊	七
(日記) (断簡)	半	一綴	七
取計記 池田 (明治四年)一二月	半	一冊	七

在所御用状

(書状) 藤波勇馬・豊嶋一 伊藤覺之進・酒井益藏宛 一二月二八日	一通	三六
(書状) 岩城与・山口文之進 伊覺之進・酒益藏・小篤之助宛 三月四日	一通	三七

(書状) 安原友衛門・岩城与・山口文之進 伊覺之進・酒益藏・小篤之助宛 三月一五日 一通 三三

(書状) 安田紋太・森岡新左衛門 伊藤覺之進・岩城運八宛 一二月一八日 一通 三三

(書状) 森岡新左衛門・能勢八平太 伊藤覺之進・岩城運八宛 三月九日 一通 三三

(書状) 藤波奎之助・豊嶋一 伊藤甚五右衛門・西村萩右衛門宛 戊一二月二〇日 一通 三三

(書状) 小野仙右衛門・豊嶋源五右衛門 伊藤甚五右衛門・西村萩右衛門宛 四月二八日 一通 三三

(書状写) 西村多吉 伊藤甚五右衛門・西村織衛宛 正月二四日 半 一通 七

(書状) 村越三十郎内齋藤陸輔 酒井益藏宛 二月四日 一通 三〇

(書状) 今枝栄・菊池清造 酒井益藏宛 八月三〇日 一通 三六

(書状) 七左衛門 益藏宛 三月一五日 一通 三三

(書状) 近藤小平 池田様御内武田宛 三月二〇日 一通 三三

(御用状扣) 半 一冊 三

宗門改

郊宗門御改人別覚 大庄屋内藤十郎右衛門 青木直右衛門外宛 文化四年三月	一冊	二六
西年宗門御改人別覚 大庄屋内藤十郎右衛門 西村多守宛 文化一〇年三月	一冊	二六

收納請払

五ヶ年平均一ヶ年收納高取調帳 池田鎗三郎 明治二年二月	美	一冊	一〇六	御貸附金拝借証文 寄合池田内記 天保一四年一二月	美大	一冊	一三
高反別取米帳 池田鎗三郎内石田慎之丞 巳四月	美	一冊	一〇八	御貸附金村方引請証文 千原村 天保一四年一二月	美大	一冊	一四
御領分御下ケ札帳 岩城運八・伊藤寛之進 右村庄屋年寄惣百姓宛 弘化四年五月	美大	一冊	一〇九	御貸附金引当村方收納高書付 千原村 天保一四年一二月	美大	一冊	一五
谷村名寄帳下ケ札寛	半	一冊	一〇九	御貸附金拝借証文 寄合池田内記 天保一四年一二月	美	一冊	一六
御元方請払勘定帳 藤波勇馬 安政三年五月	半	二冊	一四一	御貸附金村方引請証文 千原村 天保一四年一二月	美	一冊	一七
御元方請払勘定帳 宮田幸治 安政四年正月	半	二冊	一四三	差上申証文 (御貸付金村方引請証文) 千原村 天保一四年一月	美	一冊	一八
(池田政樹様御入用請取書) 岩城与 一〇月 二三日		一通	一〇〇	御貸附金引当村方收納高書付 千原村 天保一四年二月	美	一冊	一九
御元方受取人 辰五月份		二綴	一三	酒造米			
(御用物請取書) 飾万津港御蔵元中嶋源蔵 形御陣屋御役人中宛 未一一月二〇日		一通	一三七	播磨国酒造米高帳 寄合池田右京 御勘定所宛 天保八年二月	半	一冊	二五
桜印諸買物覚 明治二五年	横半半	一冊	一八三	播磨国酒造米高帳 池田右京 御勘定所宛 天保八年	半	一冊	二六
(元利金相渡覚)		一通	一五三	播磨国酒造米高帳 寄合池田右京 御勘定所宛 天保八年二月	半	一冊	二七
(借金証文) 高橋精一郎 武田寛平宛 申五月 一八日		一通	一五四	酒造書上帳 谷村太郎右衛門 伊藤甚五右衛門 ・西村庄右衛門宛 天保八年一月	美大	一冊	二八
積立人連名 (辰年分米積立)		一通	一五五	酒造書上帳 下沢村吉太郎 伊藤甚五右衛門 ・西村庄右衛門宛 天保八年一月	美大	一冊	二九
御順見様御通諸色覚書帳 宝曆一〇年一〇月	横半半	一冊	一六	御貸附金拝借村方引請証文 千原村 文政五年 一二月	美大	一冊	一三
公儀御貸付金				助郷免除願			
御貸附金借用証文 寄合池田鎗三郎 文政三年一二月	美大	一冊	一〇				
御貸附金借用証文 寄合池田鎗三郎 文政五年一二月	美大	一冊	一三				

三河国
深溝村

八
田
家
文
書
目
録

三河国 八田家文書目録目次
深溝村

深溝陣屋	七
地役人	七
任免、御勝手向、陣屋入用、判物預り一件、	七
記録・日記	六
八田氏手留、日記、陣屋引継書類御用状	三
江戸御用状留、江戸用状、奈嶋用状、諸所用状、江戸・奈嶋宛御用状	三
知行所支配	三
支配	三
申渡・御触、申渡請印帳、村役人任免、庄屋扶持米渡手形	三
土地・戸口	三
高反別、朱印地書上、地改、五人組帳、宗門改帳、欠落、出稼願、関所手形	三
収納	三
検見、物成・取付郷帳、免定、年貢米金請取小手形、納米差引手形、扶持米渡手形、蔵米切手、米積払、皆	三

濟濟口差上證文、村々請払、陣屋請払、受取、御用金、借上、中間奉公、助郷、朝鮮使等御用、判物預り一件	三
拝借	三
公金貸附、貸附金受取小手形、一身田門跡祠堂金拝借、	三
講	三
頼母子講金貸附、長榮講	三
災害・御救	三
水難書上、地震書上、難渋書上、夫食拝借、褒美	三
御普請	三
出入・訴訟	三
庄屋不帰依、彦助博突一件、車屋出訴一件、肴商一件、深溝・拾石両村出入、村境爭論、水利出入、奉公人・家督出入	三
寺院	三
禁制、朱印地書上、明細書上、朱印改、再建願、梵鐘取調	三
絵図	三
八田家	三
書状	三

弥一左衛門宛、守(森)右衛門宛、弥太夫宛、伴七郎宛	四
記録	四
免許状	四
維新風聞	四
板倉家	四
家系・勤仕	四
菩提寺	四
板倉遠忌、回向料受取、寺合力	四

三河国
深溝村
八田家文書目録

(文書記号 23F)

深溝陣屋

地役人

任 免

起請文前書之事 岡田喜右衛門・高原忠助・名倉弥太夫・八田清兵衛 万治四年五月七日

一通 三六

奉願侯口上之覚 〔御免願〕 鳥居半兵衛 鳥山保・伊藤土須馬宛 嘉永四年三月

一通 三六

〔年寄申達御書〕 〔役御免〕 大目付宛 (嘉永四年) 四月二十六日

一通 三六

御勝手向

御殿様御書下 〔現地賄申付〕 板倉甚太郎村々役人宛 正月四日

一通 四七

〔申達〕 〔現地賄申付〕 板倉筑後守 (勝昇カ) 村々庄屋惣百姓宛 文政七年二月

一通 四三

当申ノ年々可下 御賄金定積之覚 田弥一左衛門宛 申三月

一通 四一

見積り書并ニ願書留書帳 佐登組 〔御用金御断・御仕法見積〕 三関村々役人 御役所宛 嘉永三年十二月

一通 二五ノ一

〔御仕送金ニ付御答申上候書付〕 〔御主法明ケ御仕送存寄書〕 三州村々役人 出役河野熊之丞宛 嘉永七年二月一日

一通 二五ノ二

*〔諸願書留〕 〔当春御賄一条ニ付庄屋出府一件〕 深溝役所宛 嘉永七年

一通 二五ノ三

*口書留 〔御賄一条出府一件〕 役所宛 嘉永七年五月

一通 三三

御用途金上納控 江戸下シ覚帳 八田控 安政三年三月

一通 三ノ五

*〔御用状案文〕 〔御勝手向一件〕

一通 一八ノ一

彦馬江可申達 〔表御座敷建継入用金〕 八月

一通 四七

申上候通り御引方被仰付被下候様猶又奉願侯〔為替金差下通知〕 八田・鳥居外 藤井外宛 一〇月一日

一通 八五ノ三

陣屋入用

寅年御陣屋金銀請払帳 辻村数馬 勘定所宛 文政二年一月

一通 三六ノ二

御陣屋取替物書出帳 〔弘化三年一月―二月小書出〕 齊藤斧右衛門 弘化三年二月

一通 三ノ一

年中諸色入用帳 〔出入之者遺物〕 〔八田家カ〕 台所 嘉永二年

一通 三ノ一

請雨入用帳 〔六年六月一日―二七日〕 嘉永六年六月

一通 三ノ三

御普請入用覚帳 〔陣屋普請カ〕 八田右衛門次郎 安政三年一月

一通 三ノ六

覚 〔纏見積書〕 槍師甚右衛門 役人宛 寅正月

一通 三三

出役諸入用払方覚帳 寅九月

一通 三ノ二

判物預り一件

差出申一札之事〔池野所持判物預〕八田右衛門次郎外 池野丑之助宛 嘉永二年七月九日
覚〔判物預リ期限延期〕八田右衛門次郎宛 子年〔嘉永五〕一二月一二日

記録・日記

八田氏手留

各用集 知氏覚書〔諸役人・出入商人・奥向出入人・家臣等〕	横美半	一冊	四
諸事留帳〔諸事覚書〕 亥年〔享和頃カ〕	横長半	一冊	五三
要用秘鑑〔知行地・家中諸事覚〕 嘉永四年五月	半	一冊	三
御停止諸扣 知克扣〔御蝕書等〕 嘉永六年八月	半	一冊	五七ノ一
城州綴喜郡奈嶋村明細書并反別有増扣〔山城一國禁裡御料献上時書出〕 八田内蔵允 慶応三年一月	半	一冊	三三
廻状写 松平刑部大輔家来 代官所・陣屋・大名宛 慶応四年一月		一通	四六七
〔知行所仕訳覚書上〕 辰年七月二四日	半	一冊	三四ノ二
○			
〔石川監物知行所代官手留〕 〔八田弥太夫〕 享保一九一〇年	半	仮一冊	二四ノ三
日記			
〔日記〕 〔天和二年〕一月一日―二月二八日	半	仮一冊	三九ノ一
大帳 宝永三年正月一日―二月二八日	半	一冊	二六

大帳 某武和 宝永五年一月―二月三〇日	半	一冊	二七
〔式歳萬日記〕 〔前欠〕 正徳二年一月一日―二月二九日	半	一冊	三〇
正徳参歳萬日記 正徳三年一月―二月三〇日	半	一冊	二八
〔日記〕 正徳四年一月一日―二月二九日	半	仮一冊	三三
〔日記〕 正徳五年一月―二月三〇日	半	一冊	二九
〔日記〕 享保元年一月一日―二月二九日	半	仮一冊	三五
日記 知氏 享保三年一月―二月二三日	半	一冊	二〇
己享保四歳日記 正房 享保四年一月―二月二九日	半	一冊	三三
庚享保五歳日記 正房 享保五年一月―二月三〇日	半	一冊	二三
辛享保六歳日記 正房 享保六年一月―二月三〇日	半	一冊	二三
癸享保八歳日記 正房 享保八年一月―二月三〇日	半	一冊	二四
〔甲〕享保九歳日記 享保九年一月―二月三〇日	半	仮一冊	二五
丙享保十一歳日記 知氏 享保一一年一月―二月三〇日	半	一冊	二六
〔日記〕 享保一二年一月一日―二月三〇日	半	仮一冊	二四
〔庚〕享保十五歳日記 享保一五年一月―二月三〇日	半	仮一冊	二七
享保十六歳日記 享保一六年一月―一八年一月二七日	半	一冊	二六
日記 享保一十九年四月二五日―二月三〇日	半	一冊	二九

享保二十一歲日記	享保二年一月—二月三〇日	半	一冊	二〇〇	安永三午甲日記	知武	安永三年一月七日—二月二十九日	半	一冊	二〇六	
(日記)	(延享三年一月)—二月三〇日	半	一冊	二三	安永十丑辛日記	知武	安永一〇年一月—二月三〇日	半	一冊	二〇九	
(日記)	(延享四年一月)—二月三〇日	半	一冊	二三	天明三卯癸日記	天明三年一月—二月二十九日	半	一冊	二〇〇		
日記(後欠)	延享五年一月—寬延元年二月二〇日	半	一冊	二三	(日記)	天明四年一月—二月二七日	半	一冊	二〇五		
(日記)	(寬延二年一月)—二月三〇日	半	一冊	二三	天明五巳日日記	天明五年一月—二月二八日	半	一冊	二〇三		
日記(知真)	寬延三年一月—二月二八日	半	一冊	二三	天明六午日日記	天明六年一月—二月二三日	半	一冊	二〇五		
日記	寬延四年一月—寶曆元年二月三〇日	半	一冊	二三	天明七丁未日日記	知武	天明七年一月—二月二十九日	半	一冊	二〇四	
(日記)	(寶曆二年)申年一月六日—二月晦日	半	一冊	三〇	(天明八申日日記)	天明八年一月—二月三〇日	半	一冊	二〇五		
(日記)	(寶曆三年)一月九日—一月一〇日	半	一冊	二六	天明九己酉日日記	知武	天明九年一月—寬政元年二月二十九日	半	一冊	二〇六	
(日記)	寶曆四年一月四日—二月二九日	半	一冊	二七	(日記)	寬政二年一月—二月二四日	半	一冊	二〇七		
日記	知真 寶曆五年一月—二月二九日	半	一冊	二六	寬政三亥日日記	寬政三年一月—二月三〇日	半	一冊	二〇六		
日記	寶曆六年一月—五月一三日	半	一冊	二九	御用向日記	八田森右衛門	寬政三年七月一日—二月三〇日	半	一冊	二〇五	
日記	知武 寶曆七年一月—二月三〇日	半	一冊	二四	寬政五丑年日記	私用	知武・知足	寬政五年一月—二月六日	半	一冊	二〇六
寶曆八戌寅日記	知武	半	一冊	二四	寬政七卯歲日記	知武	寬政七年一月—二月三〇日	半	一冊	二〇六	
寶曆九卯日記	寶曆九年一月—二月二九日	半	一冊	二四	(日記)	寬政八年一月—二月二七日	半	一冊	二〇六		
(日記)	(知武) 明和二年一月—二月三〇日	半	一冊	二四	寬政九己歲日記	八田知武・知足	寬政九年一月—二月二四日	半	一冊	二〇三	
(日記)	明和三年一月七日—二月二五日	半	一冊	二五	寬政十午日日記(後欠)	八田知足	寬政一〇年一月—二月一四日	半	一冊	二〇三	
(日記)	明和四年一月一七日—二月三〇日	半	一冊	二六							
(日記)	明和六年一月五日—二月三〇日	半	一冊	二六							
安永二巳日記(知武)	安永二年一月—九月二九日	半	一冊	二七							

日記(後欠) 知足 三 寛政二年一月―二月	半	一冊	一六四	日記 八田内蔵允 二九日 文政九年六月二六日―七月	半	一冊	一八一三
(日記) (寛政二年)七月―九月二三日	半	一冊	一六五	日記 八田内蔵允 一四日 文政九年八月一日―一月	半	一冊	一八一三
日記 知足 晦日 寛政一三年一月―享和元年二月	半	一冊	一六六	入用日記 知克 文政一〇年一月―二月二六日	半	一冊	一八三
日記 知足 享和二年一月―八月九日	半	一冊	一六七	用事日記 八田知克 文政一一年三月二四日―	半	一冊	一八三
(日記) 享和三年一月―二月朔日	半	一冊	一六八	文政十一子 戊日記 八田内蔵允知克 一日―七月一七日	半	一冊	一八四
(日記) 文化元年一〇月一九日―二月三〇日	半	一冊	一六九	日記 知克 文政一一年七月一八日―	半	一冊	一八五
(日記) 文化二年一二月一四日―二月三〇日	半	一冊	一七〇	文政拾己 日記 八田内蔵允知克 ―二月二九日	半	一冊	一八六
日記 知足 文化五年一月―七月五日	半	一冊	一七一	日記 文政一二年七月二一日―二月二七日	半	一冊	一八八
日記(後欠) 文化六年一月―二月晦日	半	一冊	一七三	要用日記 八田知克 文政一三年閏三月二九日 ―四月一四日	半	一冊	一八九
日記 知雄 文化七年一月―七月三日	半	一冊	一七五	日記 知克 文政一三年八月一八日―一月晦	半	一冊	一九〇
日記 文化九年七月二六日―八月二五日	半	一冊	一七四	日記 知克 天保二年三月一七日―六月五日	半	一冊	一九二
私用日記 知雄 文化九年七月二六日―八月二	半	一冊	一七四	日記 知克 天保二年九月一日―二月晦日	半	一冊	一九三
日記 知雄 文化一〇年一月―八月二四日	半	一冊	一七五	日記 八田氏知克 天保三年八月一日―晦日	半	一冊	一九三
日記 文化一一年一月―三月二四日	半	一冊	一七六	私用日記 知克 天保六年一月―二月二	半	一冊	一九四
日記(後欠) 文化一二年一月―四月二日	半	一冊	一七七	日記 八田内蔵允知克 九日 天保七年一月―四月二	半	一冊	一九五
日記 八田彌市(知房) 文化一三年一〇月一	半	一冊	一七七	公私日記 知克 天保七年五月一日―一月二	半	一冊	一九六
私用日記 八田知房 文化一四年一月―三月二	半	一冊	一七八	御用向留帳 知克 天保七年一月一日―一一	半	一冊	一九七
用書日記 知房 文化一四年一月―二月二四	半	一冊	一七九				
日記 八田内蔵允 文政八年一月―二月晦日	半	一冊	一八〇				
日記 八田知克 文政九年二月二六日―四月二	半	一冊	一八一				

仮日記 知克 天保一三年一月―七月九日	半	一冊	二六	郎宛 文化一三年一〇月三日・四日	半	二冊	七ノ六
日記 弘化四年一月―三月一八日	半	一冊	二九ノ一	御用状 江戸御用状留			
弘化四丁未歳日記 知克 弘化四年八月一日―十一月十一日	半	一冊	二九ノ二	御用状〔烙印輸送〕鳥山保外 八田右衛門次郎外宛 寅年〔安政元〕正月一六日	半	一冊	九ノ一
日記 陣屋 嘉永三年八月一日―八月九日	半	一冊	三〇	御用状〔御幕向御類外〕鳥山保外 鳥居半兵衛外宛 寅年四月一二日	半	一冊	九ノ二
〔日記〕 嘉永五年四月一日―四月二二日	半	一冊	三〇ノ一	御用状〔雑用金・御用金送方〕鳥山保外 鳥居半兵衛外宛 寅年五月二四日	半	一冊	九ノ三
日記 嘉永五年一〇月二三―十一月二三	半	一冊	三〇ノ二	御用状〔地役人等交替・送金〕鳥山保外 八田右衛門次郎外宛 寅年〔安政元〕七月五日	半	一冊	九ノ四
日記 知克 嘉永五年一〇月二四―十二月二九日	半	一冊	三三	御用状〔月割金・修覆金〕鳥山保外 八田右衛門次郎外宛 寅年八月二二日	半	一冊	九ノ五
日記 知克 嘉永六年六月一日―六月二七日	半	一冊	三三	御用状〔武用金・御用途金〕鳥山保外 八田右衛門次郎外宛 寅年八月二九日	半	一冊	九ノ六
〔御役勤日記〕〔八田〕 安政二年六月一日―八月一七日	横長半	一冊	三	御用状〔先便ノ件云々〕鳥山保外 八田右衛門次郎外宛 寅年九月一二日	半	一冊	九ノ七
日記 知克 万延元年五月一日―十一月一日	半	一冊	三四	御用状〔雑用金受取〕山田五郎右衛門外 齊藤三十郎外宛 戌年〔文久二カ〕九月二日	半	一冊	九ノ八
○				御廻状三而被仰出書〔文久二年カ〕閏八月	半	一冊	九ノ九
〔日記〕 酉年三月二〇日―五月二二日	半	一冊	三八	江戸多御用状			
日記 巳年三月九月―四月一日	半	一冊	三六	武藤治郎右衛門・荒木嘉右衛門書状〔米松方・作事材料 大坂在勤中カ〕 八田森右衛門宛 三月一〇日	一通	四五一	
〔日記〕 四月五日―二月晦日	半	一冊	三七	長沢丹治書状〔三谷村久藏身分取捌方〕 辻甚太郎・八田伴七郎宛 一月二二日	一通	四七三	
〔日記〕 六月五日―七月晦日	半	一冊	三三	河野熊之丞書状〔下向時礼状〕 八田宛 三月一日	一通	四七五	
〔日記〕 八月一日―二月二日	半	一冊	三三	河野熊之丞書状〔小前押而出府一条・陣屋武器一条〕 八田右衛門次郎宛 三月一日	一通	四九一	
〔日記〕 八月二八―十二月三日	半	一冊	三七				
〔日記〕 一〇月一日―十二月二日	半	一冊	三九				
〔日記〕 一〇月一四―十二月二九日	半	一冊	三八				
〔日記〕 十一月五日―十二月九日	半	一冊	三五				

陣屋引継書類

旧来御預りの御用物請取帳 辻村外 八田弥一

鳥居半兵衛書狀〔齊藤代リ一件カ〕 八田右衛門次郎宛 三月二〇日	一通	四七〇	庄屋又右衛門書狀〔立毛申立外〕 八田右衛門次郎・齊藤三十郎宛 知年七月	一通	四六三
生形文治書狀〔陣屋出張帰任礼狀〕 八田右衛門次郎宛 四月二八日	一通	四七三	庄屋又左衛門書狀〔洪水報告〕 齊藤三十郎・八田右衛門次郎宛 知年八月一日	一通	四六〇
生形文治書狀〔雜用・為替手形名前・御内用向〕 八田外宛 七月一日	一通	四七五	庄屋又左衛門書狀〔洪水・綿作等立毛報告〕 齊藤三十郎・八田右衛門次郎宛 知年八月二日	一通	四六一
生形文治・鳥山保・野沢左太夫書狀〔深溝村一件取扱方〕 添状共 八田右衛門次郎宛 七月一日	二通	四六九	庄屋又左衛門書狀〔檢見濟御礼・地震模様報告〕 八田右衛門次郎・齊藤三十郎宛 知年一〇月八日	一通	四七四
生形文治書狀〔齊藤権右衛門一条外〕 八田右衛門次郎宛 七月一八日	一通	四六八	庄屋又左衛門書狀〔地震普請入用金送方〕 右衛門次郎・三十郎宛 知年一〇月一九日	一通	四七五
鳥山保・河野熊之丞書狀〔差扣無用〕 八田右衛門次郎宛 閏七月二八日	一通	四六六	*庄屋又左衛門書狀〔御米入礼報告〕 八田右衛門次郎・齊藤三十郎宛 霜月四日	一通	四六八
伊藤良右衛門書狀〔齊藤惇一件・地役人勤方不宜云々〕 八田右衛門次郎宛 九月一日	一通	四六三	*〔御藏米入礼人名前書〕	一通	四六九ノ一
生形文治書狀〔上金取扱方〕 八田右衛門次郎外宛 一〇月一日	一通	四六一	*〔御藏米入礼〕	一三枚	四六九ノ二
野沢左太夫書狀〔御政事向直狀差出方〕 八田右衛門次郎宛	一通	四六九	年寄傳兵衛・九右衛門書狀〔上納金送届外〕 八田右衛門次郎宛 一二月六日	一通	四六〇
河野惣兵衛・藤井東藏書狀〔御領中間関所手形ノ件〕 齊藤七郎右衛門外宛 戌年一月一五日	一通	四六五	肝煎傳兵衛・九右衛門書狀〔上納金送届外〕 八田旦那宛 極月二一日	一通	四六八
河野惣兵衛・藤井東藏書狀〔中間関所手形渡方〕 齊藤七郎右衛門外宛 正月一五日	一通	四七七	諸所ノ用狀	一通	四七九
河野熊之丞書狀〔中間帰国先觸〕 (ノ九ノ一) 東海道宿々問屋宛	一通	八	西郡屋敷岡本順治・中川七郎書狀〔梵鐘鑄換一件〕 八田右衛門次郎宛 二月二〇日	一通	四七九
奈嶋ノ用狀			江戶・奈嶋宛御用狀		
庄屋傳兵衛書狀〔江戶家中賄金・皆済・宗門帳差上〕 八田森右衛門・齊藤富右衛門宛 辰年三月	一通	四六七	江戶御用狀下書 二 役所〔宝曆一〇年三月一九日 九月一四日〕	一冊	二〇
庄屋傳兵衛書狀〔先納金差上外〕 齊藤七郎右衛門・八田直右衛門宛 寛政五年一二月	一通	四六三	江戶奈嶋下書〔申年〔明和元カ〕五月一七日一九月二一日〕	一冊	一七
			御用〔明和元年一〇月五日一二月二五日〕	三綴	二
			江戶御用狀下書〔明和二年三月一二日一九月二〇日〕	一冊	一六

江府山城御用状御案文 深溝役所 安永四年一月	半	一冊	二三	公辺之御達書写〔名器・時鐘鑄直〕（安政二年）九月	半	一通	五〇〇
江戸奈嶋御用状留 深溝御役所〔天明二年一月一二月〕	横長半	一冊	一三	領分江申渡〔農村統治〕三・城州庄屋肝煎惣百姓宛 文化一三年一月	半	一冊	一九
江府御用状案紙〔嘉永五年一月一二月四日〕	半	一冊	四ノ一	御様殿御書下〔村役所改革〕嘉永四年四月一日	半	一通	三五
御用状下案 八田内蔵允扣〔慶応三年一月一二月一八日〕	半	一冊	四ノ二	五人組判鑑帳（前書ノミ）	半	一冊	二五三
（御用状下案）（慶応三年カ）	半	一冊	四ノ三	○			
江戸状下書〔戊辰年一月七日一二月二五日〕	半	一冊	一五	進達留〔愛知県第十一区深溝村旧税額取調書外〕八田内蔵允扣 明治七年三月・九年九月	半	一冊	四三
（御用状下案）〔巳年七月二三日一九月一日〕	半	一冊	八ノ二	申渡請印帳（一）〔土地・戸口〕			
（江戸奈嶋御用状下案）〔子年三月五日一二月一四日〕	半	一冊	八ノ三	御達書御請連印帳 江原村 庄屋辻村芳之丞外	半	一冊	二〇
（御用状下案）〔卯年三月三日〕	半	一冊	八ノ四	深溝村御役所宛 嘉永二年九月一七日	半	一冊	三
*御用状下案〔齊藤権右衛門出奔一件〕八月一日		一通	四九	御達書御請連印帳 岡嶋村 庄屋富田七兵衛外			
*（御用状扣）〔齊藤権右門不埒隠居一件外〕八田右衛門次郎外 奈嶋村庄屋徳左衛門宛 八月五日		一通	四六五	深溝御役所宛 嘉永二年九月二二日			
*（御用状案文）〔殿様御勝手向一件〕	横長半	一冊	八ノ一	村役人任免			
知行所支配				乍恐書付を以奉願上候〔老衰ニ付御役御免願〕		一通	二〇〇
支配				岡嶋村庄屋鳥居半兵衛 深溝御役所宛 天保九年一月		一通	二七
申渡・御触				乍恐書付を以奉願上候〔病氣ニ付山廻役御免願〕山廻岡右衛門 御役所宛 天保九年一二月		一通	二七
御書附写〔幕令等〕天明七年・八年	半	一冊	五〇	庄屋扶持米渡手形			
御肝煎中様之御廻状写〔幕令〕（安政元年カ）正月一十九日	半	一通	五〇四	覚〔川除奉行・木挽〕齊藤権右衛門・金子勝右衛門 深溝村兵助宛 正徳五年二月・三月		一通	二四二ノ三
				覚〔宗門改〕齊藤・金子 深溝村兵助・斧右衛門・次郎兵衛宛 正徳五年三月		一通	二四二ノ一
				覚〔中田晩田検見〕金子外 深溝村兵助・斧右衛門・次郎兵衛宛 正徳五年九月		一通	二四二ノ四
				覚〔御家中扶持〕金子外 深溝村兵助・斧右衛門・次郎兵衛宛 正徳五年九月		一通	二四二ノ三

美	美	美	美	美	美	美大	美大		美	美	美	美	美	美
一册	一册	一册	一册	一册	一册	一册	一册		一册	一册	一册	一册	一册	一册
三三一	二四〇	二四九	二四八	二五八	二五七	二五五	二四四		二四四	二四七	二四六	三〇二	三〇二	三〇一

五人組帳 三月	岡嶋村 庄屋鳥居半兵衛外 文政七年	美	一冊	三三	宗門御改帳 三冊之内〔了性寺〕 駒場村 庄屋十藏外 文政三年三月一日	美	一冊	三三
五人組帳 三月	奈嶋村 庄屋又左衛門外 文政五年	美	一冊	三五	宗門御改帳 三冊之内〔東本願寺系一〇力寺〕 駒場村 庄屋十藏外 天保二年三月一日	美	一冊	三三
宗門改帳					宗門御改帳 三冊之内〔了性寺〕 駒場村 弘化四年三月一日	美大	一冊	三七
宗門御改帳 文化一三年三月一日	四冊之内〔長満寺・長存寺〕 深溝村	美	一冊	三六	宗門御改帳 三冊之内〔東本願寺系一〇力寺〕 駒場村 安政三年三月一日	美	一冊	三七
宗門御改帳 文政五年三月一日	四冊之内〔三光院・安樂寺〕 深溝村	美	一冊	三五	宗門御改帳 三冊之内〔東本願寺系一〇力寺〕 駒場村 庄屋善八外 慶応二年三月一日	美	一冊	三七
宗門御改帳 文政九年三月一日	四冊之内〔長存寺・長満寺〕 深溝村	美	一冊	三六	宗門御改帳 三冊之内〔了性寺〕 駒場村 慶応二年三月一日	美	一冊	三七
宗門御改帳 天保一五年三月一日	四冊之内〔長存寺・長満寺〕 深溝村	美	一冊	三六	宗門御改帳 〔一三力寺〕 岡嶋村 庄屋鳥居 半兵衛外 文政五年三月	美大	一冊	三六
宗門御改帳 四冊之内〔二四力寺〕 深溝村	天保九年三月一日	美大	一冊	三三	宗門御改帳 〔一二力寺〕 岡嶋村 庄屋鳥居 半兵衛外 慶応二年三月一日	美大	一冊	三七
宗門御改帳 四冊之内〔長満寺・長存寺〕 深溝村	嘉永五年三月一日	美大	一冊	三六	宗門御改帳 奈嶋村 庄屋又左衛門外 文政三年三月	美	一冊	三七
宗門御改帳 四冊之内〔二〇力寺〕 深溝村	嘉永七年三月一日	美大	一冊	三六	宗門御改帳 〔深広寺〕 奈嶋村 庄屋又左衛門外 文政一〇年三月	美	二冊	三六
宗門御改帳 三冊之内 江原村 庄屋辻村三五郎外 天保六年三月一日	江原村 庄屋辻村三五郎外 天保六年三月一日	美	一冊	三六	指上申宗門御請狀之事 江原村福浄寺 寛文一三年二月一日			
宗門御改帳 三冊之内〔養壽寺・崇福寺〕 江原村	安政三年三月一日	美	一冊	三六	欠落			
宗門御改帳 三冊之内〔妙善寺〕 江原村	文久三年三月一日	美	一冊	三七	口上之覚 〔新蔵娘詮索方無構〕 板倉重矩 八田九郎三郎・同清兵衛宛 承応四年四月六日			
宗門御改帳 三冊之内〔養壽寺・崇福寺〕 江原村	文久三年三月一日	美	一冊	三七	奉願口上書 〔中間半十助命執成願〕 奈嶋村吉兵衛 八田幸右衛門宛 子年〔享保五〕六月九日			
宗門御改帳 三冊之内〔東本願寺系一四力寺〕 江原村	文久三年三月一日	美	一冊	三七	*差上申一札之支 〔追放中間請書〕 親五郎兵衛 奈嶋村吉兵衛・吉三郎宛 子年〔享保五〕六月			
宗門御改帳 三冊之内〔東向寺〕 駒場村 庄屋十藏 文政三年三月一日	駒場村 庄屋十藏 文政三年三月一日	美	一冊	三七	一通 三六			

乍恐書附を以奉願上候〔江戸屋敷出奔中間除籍〕岡嶋村庄屋半兵衛外 深溝役所宛 天保八年七月	一通	三六三	覚 八田内蔵允・岩瀬七兵衛 文久四年二月一日	一通	三六三
*伊藤在右衛門・河野惣兵衛書状〔深溝村抱中間欠落〕齊藤七郎右衛門外宛 四月一二日	一通	三三ノ三	収 納		
(申達)〔齊藤権右衛門出奔一件〕	一通	四八五	検 見		
*御用状下案〔齊藤権右衛門出奔一件〕 八田陣屋 八月一日	一通	四四九	文化十四丑年深溝村市場組立毛書板帳 文化一四年	横長半	一冊 三三ノ一
*〔御用状扣〕〔齊藤権右衛門不埒隠居一件〕 八田右衛門次郎外 奈嶋村庄屋徳左衛門宛 八月五日	一通	四六五	三河国額田郡深溝村三組文化十四丑年検見畝引仕出帳 文化一四年	半	一冊 三三ノ二
出稼願			文化十四丑年十月深溝村三組検見出合差引帳 文化一四年	横長半	一冊 三三ノ一
乍恐以書付奉願上候〔掃村延期願〕 出稼人駒場村栄助 深溝役所 天保一四年六月	一通	三六八	田方検見下附帳 江原村 安政二年九月	横長半	一冊 三三
乍恐以書付奉願上候 出稼人為吉 深溝役所 天保一四年六月	一通	三六四	文政元寅年十月駒場村検見出合差引帳 文政元年一〇月	横長半	一冊 三三ノ二
乍恐書付を以奉願上候 出稼人吉右衛門 深溝役所宛 天保一四年六月	一通	三六五	文政元寅年駒場村立毛書技帳 文政元年	横長半	一冊 三三ノ二
乍恐書付を以奉願上候 出稼人善左衛門 庄屋十兵衛 深溝役所宛 天保一四年六月	一通	三六六	畑方雑毛御検見帳 奈嶋村 深溝役所宛 文久元年九月	半	一冊 三三
乍恐以書付奉願上候 深溝村願人孫兵衛 地頭所役人宛 天保一四年七月	一通	三六七	物成・取付郷帳		
関所手形			三州貝吹村亥ノ取付帳 八田弥一左衛門 勘定所宛 天和三年一二月一八日	半	一冊 三三ノ三
奉願上候口上之覚〔下付願〕 八田右衛門次郎 鳥山保外宛 安政三年五月	一通	三三三	三州貝吹村取付郷帳扣 勘定所宛 貞享三年一二月二九日	半	一冊 三三ノ一
覚 八田内蔵允 諸関所宛 文久四年二月七日	一通	三六九	三州貝吹村取付下帳 八田弥一左衛門 勘定所宛 元禄二年一〇月	半	一冊 三三ノ三
覚 八田内蔵允 諸関所宛 文久四年二月七日	一通	三六〇	貝吹村御知行所取付帳 八田弥市左衛門・鶴飼兵左衛門 勘定所宛 元禄五年一二月	半	一冊 三三ノ四
覚 八田内蔵允 今切関所宛 文久四年二月一日	一通	三六一	三州貝吹村御取付下帳 八田弥一左衛門・鶴飼兵左衛門 板倉甲斐守内渥美又蔵宛 元禄六年一〇月	半	一冊 三三ノ五

請取已申ノ納金子之事 八田弥一左衛門 駒場村九郎左衛門宛 寛文六年一月九日	一通	三六四	覚 齊藤富右衛門・八田森右衛門外 深溝村庄屋宛 文化四年一一一年	二八枚 三六ノ一
請取申金子之事 八田弥一左衛門 駒場村九郎左衛門宛 寛文六年二月二五日	一通	三六三	覚 八田森右衛門外 江原村庄屋宛 文化九年四月	一枚 三六ノ二
請取申金子之事 八田弥一左衛門 駒場村九郎左衛門宛 寛文六年三月二三日	一通	三六二	覚 八田森右衛門外 駒場村庄屋宛 文化九年四月	一枚 三六ノ三
納米差引手形			覚 八田森右衛門外 岡嶋村庄屋宛 文化九年	四枚 三六ノ四
可被相渡米之事 〔黒極次郎左衛門・中間冬取分〕 八田清兵衛 江原村六郎兵衛・与左衛門宛 承応三年二月一九日	一通	三六	内熟濟口一札之事 〔廻米船難破二付米松下〕 平坂新家八右衛門支配船頭与四郎外 廻米掛役人宛 嘉永三年九月六日	一通 三六
可被相渡麦之事 〔七口七人分〕 八田清兵衛 駒場村勘三郎宛 寛文元年六月二七日	一通	三五九	一札 〔御米買請金子上納〕 平坂村市川平治郎 鍋屋常藏 廻米掛役人宛 嘉永三年九月七日	一通 三七
可被相渡米之事 〔參左衛門扶持米〕 八田弥一左衛門 駒場村九郎左衛門宛 寛文五年一二月二二日	一通	三五八	覚 〔藏米請取〕 三州大飼權右衛門〔鈴權〕 深溝村役人宛 寅年一〇月二九日	一通 三
可被相渡已ノ納米之事 〔伊藤半之丞取米ノ内村七郎左衛門〕 八田弥一左衛門 駒場村九郎左衛門宛 寛文六年三月三日	一通	三五七	覚 〔江戸屋敷行藏米請取〕 平坂湊市川平次郎 江原村庄屋林左衛門宛 寅年一二月九日	一通 三五
可被相渡已ノ納米之事 〔江原村半兵衛分〕 八田弥一左衛門 駒場村九郎左衛門宛 寛文六年四月一二日	一通	三五五	申上候通り御引方被仰付被下候様猶又奉存候 〔為替金差下通知〕 八田・鳥居外 藤井外宛 一〇月一二日	一通 三五ノ三
可被相渡已ノ納米之事 〔浅井權右衛門分五八石余〕 八田弥一左衛門 駒場村九郎左衛門宛 寛文年一一月一八日	一通	三五六	*奈嶋村庄屋又左衛門書状 〔米入札相場〕 八田右衛門次郎・齊藤三十郎宛 卯年霜月四日	一通 四六
可被相渡已ノ納米之事 〔西町半兵衛分八七俵〕 八田弥一左衛門 駒場村九郎左衛門宛 寛文五年一一月二五日	一通	三五三	*〔御藏米入札人名前書〕 〔卯年四月力〕	一通 四六ノ一
扶持米渡手形 〔↓「支配」〕			*〔御藏米入札力〕 〔卯年霜月力〕	一三枚 四六ノ二
藏米切手			○ 摂州堺鍋屋助十郎舟積登申候之事 〔積送状〕 三州中島屋敷岡田弥七・高平忠助・名倉弥太夫 板倉内膳正京都屋敷内江澄四郎兵衛・上原市郎右衛門宛 寛文九年二月二一日	一通 三

三州佐久嶋惣十郎舟二積下シ申竹之事〔送り状〕岡田弥七郎外 江戸龍口屋敷内名倉治部左衛門宛 寛文九年三月二日
覚〔荒麦買取化切〕 三州逆川斧藏 嘉永三年一月

皆濟濟口差上証文

差上申濟口一札之事 深溝村海谷組 海谷組庄屋村越兵九郎・肝煎千賀七郎次外 深溝役所宛 天保一一年一月二日

差上申一札之事 深溝村海谷組 海谷組庄屋村越豐助・肝煎治兵衛外 深溝役所宛 弘化三年一月二日

惣百姓連印帳 江原村 庄屋辻村三五郎・肝煎平七・文右衛門 深溝役所宛 天保一三年一月

惣百姓連印帳 駒場村 庄屋本田十藏・与頭文吉・幸藏 八田右衛門次郎外宛 弘化四年一月

惣百姓連印帳 駒場村 庄屋本田十藏・与頭源左衛門外 八田右衛門次郎外宛 嘉永五年一月

惣百姓連印帳 岡嶋村 庄屋鳥居半兵衛外 齊藤七郎右衛門外宛 天保一三年一月

惣百姓連印帳 岡嶋村 庄屋十兵衛・肝煎六左衛門外 八田右衛門次郎外宛 弘化四年一月

惣百姓連印帳 岡嶋村 庄屋富田十兵衛・肝煎十左衛門外 深溝役所宛 弘化五年一月

惣百姓連印帳 岡嶋村 庄屋富田十兵衛・肝煎孫左衛門外 八田右衛門次郎外宛 嘉永四年一月

*堤地所荒地鐵下帳〔洪水鐵下願〕庄屋伝兵衛・肝煎又左衛門外 奉行所宛 享和三年九月

村々請払

極高不足二付勘定仕立候覚帳〔惣百姓寄合〕次兵衛・八右衛門・惣百姓 正徳三年閏五月二三日

卯年皆濟目録〔勘定仕立〕 貝吹村 庄屋又助外 青木津右衛門宛 正徳二年二月

巳ノ年之皆濟目録〔勘定仕立〕 貝吹村 庄屋又助外 八田森右衛門宛 正徳四年二月

金銀米納帳 深溝村市場組 萬左衛門外 文化元年一月

皆濟目録〔勘定仕立〕 深溝村市場組 庄屋桐戸九郎左衛門・肝煎市郎兵衛外 役所宛 慶応二年一月二日

巳之年御物成清目録〔物成納払勘定〕 江原村 庄屋三五郎 八田森右衛門宛 享保七年四月

寅御年貢清目録 江原村 庄屋大塚林左衛門・肝煎茂助外 役所宛 慶応二年二月

〔会所請取金覚〕 江原村平七会所 深溝役所宛 寅年九月一二日

辰ノ年駒場村御物成目録 公田共 〔納払勘定〕 六兵衛・九郎左衛門 承応二年七月

巳ノ年駒場村御物成目録 九郎左衛門 八田清兵衛宛 承応三年一月四日

金米収帳〔駒場村勘六外〕 寛政一一年

〔岡嶋村御物成目録〕〔米納払〕 六郎左衛門 八田清兵衛宛 萬治三年二月一七日

申年皆済目録 奈嶋村 庄屋吉兵衛・肝煎太郎 右衛門外 八田森右衛門宛 享保二年二月	一通 三三	戊年御勘定帳 〔西国分〕 安永七年	半	一冊 三三ノ三
城州綴喜郡奈嶋村皆済目録帳 八田右衛門次郎外 勘定所宛 嘉永四年一二月	一冊 三三ノ一	〔三州城州巳年御勘定帳〕 天明五年	半	一冊 三三ノ一
〔子年辰年追米皆済目録下書〕	美 一冊 三三ノ二	參州御知行所當寅御物成帳 八田森右衛門・齊藤七郎右衛門 寛政六年十一月	半	一冊 三三ノ二
○	横長半 一冊 八六ノ三	三州城州卯御物成御勘定帳 八田森右衛門・齊藤七郎右衛門 勘定所宛 寛政八年一〇月	半	一冊 三三ノ三
奈嶋村又左衛門の借り入金遣払覚帳 〔安政二年七月以降遺払内訳〕	陣屋請払	三州城州未御物成御勘定帳 八田森右衛門・齊藤七郎右衛門 勘定所宛 寛政一二年二月	半	一冊 三三
寅之納村々請払帳 〔市場・里・字仁屋・江原丁西岡嶋・駒場・貝吹納分請払方〕 貞享三年一〇月	半 一冊 三三	三州城州西歲御物成御勘定帳 享和元年	半	一冊 三四
丁酉歲三州御知行所御物成払清目録扣	半 一冊 三六ノ一	參州子年御收納御勘定帳 八田森右衛門・齊藤富右衛門 文化三年	半	一冊 三五
八田森右衛門 享保四年	半 一冊 三六ノ二	三州城州午年御收納御勘定帳 八田森右衛門・齊藤富右衛門外 勘定所宛 文化八年四月	半	一冊 三七
三州御知行所乙巳御勘定清目録下書 八田弥市左衛門 勘定所宛 享保一〇年一〇月	半 一冊 三六ノ二	三州城州寅年御收納御勘定帳 辻村数馬 勘定所宛 文政二年一月	半	一冊 三六ノ一
戌年御勘定下書 〔寛保二・三年三州勘定〕	半 一冊 三四ノ一	*寅年御陣屋金請払帳 辻村数馬 勘定所宛 文政二年一月	半	一冊 三六ノ二
辰巳年奈嶋村御勘定帳扣 八田森右衛門 宝曆二年	半 一冊 三八ノ一	米金請払目録・申暮御收納米金差引目録・申年御勘定西暮不足金村々請取払方差引目録 松浦儀八 文政九年四月	半	一冊 三九
辰巳午未御勘定帳ひかへ 八田森右衛門 宝曆二年一二月	半 一冊 三八ノ二	御合力米御扶持米并御陣屋諸勘定帳 八田内藏吉外 勘定所宛 天保八年一二月	半	一冊 三九
申酉兩年御勘定ひかへ 〔四カ村〕 八田森右衛門 宝曆四年閏二月	半 一冊 三九ノ一	〔諸請払目録〕 丑・寅年	横長半 一冊 三ノ三	
戌年城州奈嶋村御勘定帳 八田森右衛門・洪江常右衛門外 海野与左衛門・鳥山安右衛門宛 宝曆六年三月	半 一冊 三九ノ二	小松指引覚帳 〔安永五年一二月〕 奈嶋年貢金外	横長半 一冊 八七	
亥年參州四ヶ村御勘定帳 八田森右衛門外 鳥山安右衛門・海野与左衛門宛 宝曆六年三月	半 一冊 三九ノ三	小物成御林金米金利足取集帳 嘉永五年一月	横長半 一冊 八六ノ二	
申年酉年戌年御勘定帳 明和四年三月	半 一冊 三〇ノ一			

覚〔財用・借金・払方〕

(払方覚)〔役料・扶持・諸払〕

*長円寺御廟所大破御修積帳 万延二年

御弘山代金覚帳 八田控〔嘉永三年一月一六年
宮入山〕

預り申御山代金之事〔五五兩借用証文〕齊
藤権右衛門外 生形文治・野沢左太夫宛 天保
一四年五月

受 取

参州城州去ル寅申迄物成算用之事〔皆済
請取〕板倉主税助 八田森右衛門・齊藤七郎右
衛門宛 寛政元年一月一日

城州奈嶋村卯辰納米算用之事 板倉主税 八
田森右衛門・齊藤七郎右衛門宛 宝曆二年三月
一六日

城州奈嶋村申酉戌納米算用之事 板倉主税
八田森右衛門・斎藤七郎右衛門宛 明和四年四月
三日

御用金

己酉之年願書共之写

差上申御請書之事〔異国船一条ニ付軍用金
差出〕深溝村万吉外 深溝御役所宛 嘉永六
年七月

御用金入用覚帳〔嘉永六年一月一嘉永七
年一月 送金高・諸差引〕

先年御頼金高書上帳 岡嶋村庄屋十兵衛外
深溝役所宛 天保五年九月

一通 四〇

一通 四三

一通 三六

一通 三〇二

一通 五七

一通 五七

一通 三六六

一通 三三七

一通 四二〇七

一通 八〇

一通 三三〇四

一通 八五〇一

借 上

卯年御借上金之覚〔三州〕 明和九年三月

御借上金改帳〔三州・城州〕 安永四年

中間奉公〔↓「江戸へ御用状」・「欠落」〕

助 郷

藤川宿助郷着村之節書付〔免除由緒等〕 文
政二年

東海道藤川宿助郷之儀ニ付中尾卯吉様中村
与次兵衛様御出役之節留書 深溝役所宛
金子吉左衛門扣 文政一〇年十一月

朝鮮使等御用

朝鮮信使御目見書付〔板倉氏カ〕〔天和二年
八月二七日以降〕

琉球朝鮮人書付共写〔繼立陣馬ニ付往復書
類留 宝永七年八月以降〕

延享来聘麗人書〔正副使人名等〕

朝鮮人来朝国役金廻状 勘定奉行神尾伊賀外
酒井紀伊守外宛〔寛延二年一〇月〕

仕上ル一札之事〔人足・馬請負〕 吉田町権兵
衛・御油町弥左衛門・同七左衛門 板倉内辻村三
五郎宛 天和二年七月一日

判物預り一件〔↓「地役人」〕

拝 借

公金貸附

〔中泉代官所御貸附金借用ニ付質地坪付差出
証文〕〔五〇〇兩借用〕 河野惣右衛門・佐久間
政吉外 深溝庄屋肝煎宛 文化一〇年二月

一通 四二

一通 三六

一通 三〇二

一通 五七

一通 五七

一通 三六六

一通 三三七

一通 四二〇七

一通 八〇

一通 三三〇四

一通 八五〇一

質地反別帳〔傳馬役助成金拝借〕江原村等 三ノ村庄屋外 赤坂役所宛 文化一〇年十二月	美	一冊	六三
御貸附金拝借証文并質地証文案 三州四ヶ 村名主外 (役人奥書) 笠松役所宛 文化一十 年十二月	半	一冊	六五ノ一
御知行所村々御貸附金拝借返納方之義二付 御勘定奉行古川山城守江御問書一件〔上総 門々抵當借受一件〕西丸御先手大久保八郎左衛 門 文化一四年四月	半	一冊	六五ノ二
御用御貸附金拝借証文 江原村庄屋仙藏 (地役 人奥書) 赤坂役所宛 文化一四年十二月	美	一冊	六五ノ三
宿々助成御貸附金拝借質地証文 深溝村名主 為次外 (地役人奥書) 多羅尾頼負役所宛 文政 三年十二月	半	一冊	六五ノ四
御貸附金証文〔地形書入〕 深溝村為次外 中 泉役所宛 文政三年正月	半	一冊	六五ノ五
御貸附金借用証文〔村方直納請合〕 定火消 板倉左近 中泉役所宛 文政三年正月	半	一冊	六五ノ六
御貸附金借用証文 岡嶋村名主外 笠松役所宛 文政三年十二月	美	一冊	六六ノ一
御貸附金拝借証文 深溝村・駒場村・岡嶋村地 役人 (板倉奥書) 笠松役所宛 文政三年十二月	美	一冊	六六ノ二
中泉証文扣御貸附金拝借添証文 拾人火消板 倉左近知行所 深溝・江原・駒場村 (奥書アリ) 中泉・笠松役所宛 文政五年一月	半	一冊	六七ノ一
申五月改御貸附金借用証文〔深溝村引当〕 甲府城番板倉筑後守 笠松役所宛	半	一冊	六七ノ二
御貸附金拝借証文 深溝村 庄屋又郎右衛門 (駒場村役人・地役人・板倉連印奥書) 笠松役所 宛 文政五年十二月	美大	一冊	六八ノ二
御貸附金引当村方物成米金取調帳 江原村 庄屋増右衛門 多羅尾頼負役所宛 文政五年正月	美大	一冊	六八ノ三
御貸附金証文 江原村名主外 信楽役所宛 文 政五年一月	美大	一冊	六九ノ二

御貸附金引当村方物成米金取調帳 岡嶋村 庄屋半兵衛外 赤坂役所宛 文政五年十二月	美大	一冊	六九ノ一
御貸附金借用証文 甲府勤番支配板倉筑後守 笠松役所宛 文政五年十二月	美大	一冊	六九ノ二
御貸附金拝借添証文 寄合板倉甚太郎 中泉 役所宛 天保三年一月	美大	一冊	一〇〇
御貸附金返納方引請証文 江原村名主外 信 楽役所宛 天保五年一月	美大	一冊	一〇一
御貸附金拝借村方引請証文 深溝村三組名主外 笠松役所宛 天保六年六月	美大	一冊	一〇三
御貸附金納方引当收納高帳 深溝村名主外 笠松役所宛 天保六年六月	半	一冊	一〇三
御貸附金納方引当收納高帳 深溝村 庄屋彦左 衛門外 笠松役所宛 天保六年六月	美大	一冊	一〇四
御貸附引当村高收納高書付 江原村名主外 赤 坂役所宛 天保一〇年一月	美	一冊	九ノ七
御貸附未納金方添証文〔宿々品々分〕 寄合板 倉主馬助 赤坂役所宛 天保一〇年五月	美	一冊	九ノ一
御貸附金借用証文〔宿々品々分 江原村引当〕 板倉主馬助 赤坂役所宛 天保一〇年五月	美	一冊	九ノ二
御貸附金拝借村方引請証文 駒場村・岡嶋村 名主外 中泉・赤坂役所宛 天保一〇年五月	美	一冊	九ノ三
御貸附金拝借村方引請証文 江原村名主外 赤坂役所宛 天保一〇年五月	美	一冊	九ノ四
御貸附未納金村方引請証文 駒場村・岡嶋村 庄屋外 中泉・赤坂役所宛 天保一〇年五月	美	一冊	九ノ五
御貸附未納金村方引請証文 江原村庄屋外 赤坂役所宛 天保一〇年五月	美	一冊	九ノ六
御救馬代金拝借貸付帳	半	一冊	七
貸附金受取小手形	半	一冊	七

覚 手附赤木篤三郎・星野又右衛門 一カ村宛 天保二年二月九日	深溝村外	一通	三六	奉拝借御銀之事 文政四年三月	両州五カ村庄屋外	祠堂掛宛	一通	五九	
覚 手附星野又右衛門・杉本市兵衛 天保二年四月二日	深溝村宛	一通	三七	奉拝借候金子之事 文政六年二月	両州五カ村庄屋外	祠堂掛	一通	六〇	
覚 手附村田鉄兵衛・杉本市兵衛 天保二年五月二九日	深溝村宛	一通	三七	奉指上御議定一札之事〔返納利足用捨・平野 屋市兵衛上納引請云々〕	三州四カ村庄屋外	祠堂	一通	六一	
覚 手附村田鉄兵衛・杉本市兵衛 天保二年八月三日	深溝村宛	一通	三七	拝借銀引宛証文之事 文政六年二月	両州五カ村庄屋外	祠堂	一通	六二	
覚 手附星野又右衛門・手代村田鉄兵衛・赤木 篤三郎 深溝村外一カ村宛 天保二年一〇月二 六日	深溝村外	一通	三五	〔拝借引当証文〕	両州五カ村庄屋外	祠堂掛宛	一通	六三	
覚 手附星野又右衛門・手代赤木篤三郎 深溝 村外一カ村宛 天保二年一二月二日	深溝村外	一通	三四	奉拝借候金子之事 天保五年二月	両州五カ村庄屋外	祠堂掛	一通	六四	
覚 手附星野又右衛門・杉本市兵衛 深溝村外 一カ村宛 天保四年二月二日	深溝村外	一通	三七	拝借引宛証文之事 天保七年二月	両州五カ村庄屋外	祠堂掛	一通	六五	
覚 手附星野又右衛門・杉本市兵衛 深溝村宛 天保四年五月一九日	深溝村宛	一通	三六	奉拝借候金子之事 天保九年二月	両州五カ村庄屋外	祠堂掛	一通	六六	
覚 手附星野又右衛門・杉本市兵衛 深溝村宛 天保四年七月一日	深溝村宛	一通	三七	借用申金子之事〔上納取替借用〕	三州四カ村 庄屋 平野屋常右衛門宛 天保一〇年一二月	三州四カ村	一通	六七	
覚 手附星野又右衛門・杉本市兵衛 深溝村外 一カ村宛 天保四年九月一日	深溝村外	一通	三七	拝借引宛証文之事 天保一〇年一二月	三州四カ村庄屋外	祠堂掛	一通	六八	
覚 手附星野又衛門・村田鉄兵衛・杉本市兵衛 深溝村外一カ村宛 天保四年一二月一三日	深溝村外	一通	三六	拝借引宛証文之事 天保一三年一二月	三州四カ村庄屋外	祠堂掛	一通	六九	
覚 手附星野又右衛門・野田斧吉・杉本市兵衛 深溝村外一カ村宛 天保四年一二月一八日	深溝村外	一通	三五	奉拝借候金子之事 弘化三年一二月	三州四カ村庄屋外	祠堂掛	一通	七〇	
覚 手附杉本市兵衛・手代村田鉄兵衛 駒場村 宛 天保二年三月一五日	駒場村	一通	三六	奉拝借候金子之事 弘化四年一二月	三州四カ村庄屋外	祠堂掛	一通	七一	
一身田門跡祠堂金拝借		一通	三六	奉拝借御銀之事 〔收納米引当借用〕	三州四 カ村・城州一カ村々々 文政三年一二月	三州四カ村庄屋外	祠堂掛	一通	七二

奉拝借候金子之事 宛 文久元年二月	三州四力村庄屋外 祠堂掛	一通	三	二カ所頼母子金文 改 嘉永兩度御山金御貸出シ帳 嘉永三年十一月	横長半	一冊	八
拝借引宛証文之事 宛 文久元年二月	三州四力村庄屋外 祠堂掛	一通	四	御頼母子仕法帳 講元齊藤氏 嘉永四年十一月	半	一冊	八五ノ二
拝借引宛証文之事 宛 文久元年二月	三州四力村庄屋外 祠堂掛	一通	六	頼母子金証文之事 借主市場組喜作 本立院会 所連中宛 安政二年二月二五日	半	一通	八
覚 「暮上納分請取」 所 深溝使人宛 丑年二月六日	一身田御殿御拝受銀方役 深溝使人宛	一通	四六	融通返金講仕法帳 講元八田氏 引請人岩瀬・金子氏	半	一冊	八ノ一
覚 「上納金請取」 佐次右衛門宛 卯年二月一〇日	御拝受銀方役所 深溝使人	一通	四六	融通返金講仕法帳 講元八田氏	半	一冊	八ノ二
乍恐奉願上口上 「拝借願」 三州四力村庄屋 山田奉行所宛 文政五年正月	板倉左近知行所 文政五年正月	一通	七	借主又八 長榮講世話人衆宛 慶応二年二月五日	半	一通	二〇
一札 「借用證」 川勘解由宛 (文政五年正月カ)	三州四力村庄屋・地役人 小川勘解由	一通	六	借用申講金之事 借主半兵衛 世話人衆宛 慶応二年二月	半	一通	二〇
御用金拝借副証文 「返済請書」 山田奉行宛 (文政五年正月カ)	小川勘解由	一通	六	借用申講金之事 借主豐吉 世話人衆宛 慶応二年二月	半	一通	二〇
田地引宛見図帳 「引当証文」 行所城州奈嶋村百姓徳左衛門 泉涌寺貸附所宛 嘉永四年二月	板倉備後守知 泉涌寺貸附所宛	一冊	三ノ四	借用申講金之事 借主左治兵衛 世話人衆宛 明治三年二月	半	一通	二二
講				借用申講金之事 借主五右衛門 世話人衆宛 明治三年二月	半	一通	二二
頼母子講金貸附				借用講金之事 借主源右衛門 世話人衆宛 明治三年二月	半	一通	二三
御融通返金勘定帳 文化一〇年二月	横長半	一冊	六	借用申金子之事 八田内蔵允 拾石村小林幾右衛門宛 明治四年二月	半	一通	二三
御頼母子金証文 「土地書人年貢代金借用」 喜作 本立院会所連中宛 文政二年二月二五日	横長半	一通	六	災害・御救			
御頼母子金御山金奈嶋御収納金其外御貸出シ帳 「借受人」江戶役人・地役人・百姓」天保一五年二月	横長半	一冊	六	水難書上			

水難書上帳 江原村 庄屋辻村芳之丞外 役所宛 嘉永三年九月九日	横長半	一冊	三六二	(吉良三カ村夫食渡請書) 江原村外二カ村庄屋外 深溝役所宛 天保八年三月	一通	二七	
畑方田成書上帳 江原村 庄屋林左衛門外 深溝役所宛 安政二年一〇月	横長半	一冊	三〇	御夫食拝借金名寄帳扣 吉良三カ村 嘉永三年一月	一冊	二六	
堤外本田書上帳 江原村 庄屋大塚林左衛門外 深溝役所宛 安政六年一〇月	横長半	一冊	三二一	難洪者江年次米被下置割合名前帳 江原村 庄屋辻村芳之丞外 八田右衛門次郎宛 嘉永三年一二月晦日	一冊	三六ノ四	
新田并改出シ畑田成書上帳 江原村 庄屋大塚林左衛門外 深溝役所宛 安政六年一〇月	横長半	一冊	三二ノ二	御拝借金名前書上帳 江原村 庄屋辻村芳之丞外 深溝役所宛 嘉永五年三月一九日	一冊	六ノ一	
堤外本畑書上帳 江原村 庄屋大塚林左衛門外 深溝役所宛 安政六年一〇月	横長横	一冊	三二ノ三	村一同誓約書「歎願成就迄違約無之儀」 儀七外 百姓代茂平宛	一通	三三	
堤外井ノ下本畑書上帳 江原村 庄屋大塚林左衛門外 深溝役所宛 安政六年一〇月	横長半	一冊	三二ノ四	褒美			
堤外本畑田成書上帳 江原村 庄屋大塚林左衛門外 深溝役所宛 安政六年一〇月	横長半	一冊	三二ノ五	御褒美米割渡帳「水難防止出勤」 江原村 庄屋辻村芳之丞 深溝役所宛 嘉永四年一二月	一冊	三三	
乍恐書付を以奉願候「普請助成・減免願」 奈嶋村百姓一同 八田弥市左衛門宛 享保一三年九月		一通	三六	覚「長寿祝被下札状」 江原村福浄寺老母 深溝役所宛 嘉永七年七月	一通	三六	
地震書上				御普請			
大地震破損所書上帳 江原村 庄屋林左衛門外 役所宛 嘉永七年一月	半	一冊	三六	大以御普請御入用帳 長左衛門 辻村三五郎宛 寛政一〇年三月	半	一冊	三七
大地震ニ付居宅倒并ニ大損事書上帳 江原村 嘉永七年二月	横長半	一冊	三五	堤御普請所并ニ以渡シ金書上帳 江原村庄屋林左衛門 深溝役所宛 安政二年三月	半	一冊	三六
難洪書上				乍恐書付を以奉願候 奈嶋村百姓一同 八田弥市左衛門宛 享保一三年九月	一通	三六	
凶年難洪願上帳「拜借願」 庄屋十藏外 天保七年二月	横長半	一冊	三六ノ一	出入・訴訟			
難洪者人別書上帳 江原村 辻村芳之丞外 役所宛 嘉永三年九月	横長半	一冊	三六ノ二	庄屋不帰依「↓彦助博奕一件」			
吉良三カ村願ニ付借リ入金覚 江原村庄屋 辻村芳之丞 八田右衛門次郎宛 嘉永三年一二月	横長半	一冊	三六ノ三	乍恐以書附奉願上候「庄屋勤役中不正謝罪」 深溝村海谷組豊助 地頭所役所宛 嘉永七年九月	一通	三三	
夫食拝借							

御請書連印帳〔豊助不正一件内済御札〕 庄屋 五兵衛外 地頭所役所宛 嘉永七年一〇月	半	一冊	三	一札〔村内静謐請書〕 惣百姓惣代半左衛門外 辻村芳之丞外宛 嘉永四年四月	一通	二五五
乍恐以口上書奉願上候〔金子彦左衛門市場 組小前爭論内済願〕 辻村芳之丞外 八田右衛門 次郎外宛 嘉永三年一二月		一通	三三	書付〔内閣御執成札狀〕 庄屋本田十蔵外 辻村 芳之丞外宛 嘉永四年四月	一通	二九四
差上申一札之事〔市場組一件内済開届ニ付請狀〕 辻村芳之丞外 八田右衛門次郎外宛 嘉永三年一 二月		一通	三三六	乍恐奉申上候〔村方静謐方願〕 庄屋本田十蔵 深溝役所宛	一通	四三二
乍恐口上書を以奉申上候〔庄屋三五郎反別改 時ノ不正ニ付不帰依〕〔江原村〕平七外四名 役 所宛 文化一二年一二月		一通	三九	車屋出訴一件		
○				御吟味ニ付奉申上候〔御答書〕 深溝村市場組 五人組頭惣左衛門 地頭所役人宛 嘉永三年三月	一通	三九五
*〔諸願書留〕〔当春御賄一条ニ付庄屋出府一件〕 深溝役所宛 嘉永七年	半	一冊	一〇五ノ三	市場組入組一件〔車屋行間違一件吟味申立書 取〕 嘉永四年三月	半	四〇一
*口書留〔御賄出府一件〕 役所宛 嘉永七年五 月	半	一冊	三三	市場組車屋一件留書〔申立・口書・仕置一件〕 嘉永四年三月	半	四〇三
乍恐以書附奉申上候〔山方村小前出府一件ニ付 謝罪〕 市場組徳兵衛 地頭所役所宛 嘉永七年八 月		一通	三九四	御吟味ニ付奉申上候〔御答書〕 深溝村才神兵 蔵 地頭所役人宛 嘉永四年三月	一通	三九六
彦助博突一件〔庄屋不帰依〕				乍恐以書付奉願上候〔江戸表差出用捨願〕 深溝村三組五人組頭 地頭所役人宛 嘉永四年 五月	一通	三九三
乍恐以書付奉願上候〔彦助御帳除額〕 駒場 村庄屋本田十蔵外 深溝役所宛 嘉永四年三月 五日		一通	三三〇	市場組一件〔吟味覚書〕〔嘉永四年七月〕	半	四〇三
御吟味ニ付奉申上候〔吟味御答書〕 嘉永四 年三月七日 駒場村吉左衛門 地頭所役人宛		一通	三六	市場組一件〔吟味覚書等〕〔嘉永四年七月九〕	半	四〇四
御吟味ニ付御答申上候 駒場村彦左衛門 地 頭所役人宛 嘉永四年三月七日		一通	三六	御吟味ニ付奉申上候〔吟味覚書〕 車屋直吉外	一通	三九三
差上申一札之事〔手鎖御免ニ付請狀〕 駒場 村吉左衛門・親類外 地頭所役人宛 嘉永四年 四月一七日		一通	三九七	肴商一件		
差上申一札之事〔手鎖・役儀御免ニ付誓約書〕 彦左衛門・親類外 地頭所役人宛 嘉永四年四 月二八日		一通	三九	奉差上御請書之事〔赤坂役所出訴人手鎖御免 一件〕 深溝村市場組亀吉・惣七 地頭役所宛 文政一二年七月	一通	四一七
				奉差上御請書之事 市場組半兵衛 役所宛 文政一二年七月	一通	四一九
				口上書〔事件經由・発端人受取〕 市場組役人 深溝役所宛 巳年〔文政一二年九〕 七月	一通	四二

松平弥一左衛門書狀 藏・金子十郎右衛門宛 〔出訴取下事情〕 齊藤丹 七月六日	一通 四五六
伊藤在右衛門書狀 三人宛 九月一六日	一通 四三三
伊藤在右衛門書狀 三人宛 九月一六日	一通 四三四
御請証文之事〔出訴人村松等ニ付御請〕 深溝 村百姓好右衛門・村役人 役所宛 文政一二年 一月一二日	一通 四三三
申渡請書〔出訴人手鎖・過怠錢〕 江戸表 深溝 村惣百姓宛 文政一二年一月一	一通 四四四
申渡請書 深溝村亀吉 役所宛 文政一二年一 一月	一通 四四五
〔御吟味ニ付御答書〕〔御門訴ノ經由〕 深溝村 好右衛門 深溝御役所宛 文政一二年一月一二 日	一通 四四六
〔御吟味ニ付御答書〕 深溝村好右衛門 役所 宛 文政一二年一月一二日	一通 四四八
乍恐以書附奉申上候〔御答・詫狀〕 深溝村 好右衛門	一通 四四三
乍恐以書付奉申上候〔四二〇下書〕 深溝村 好右衛門 役所宛	一通 四四三
深溝・拾石両村出入	
海谷貫物山一件留書〔秋葉堂建立ニ付拾石村 トノ出入〕 知礼扣 文久三年五月	一通 三九一
某書狀〔晚野山一条〕	一通 三九二
村境爭論	
折谷村境芦谷村と入組ニ付掛合之趣留書 嘉永元年九月	一冊 三八
為取替規定之事〔芦谷・深溝境論内済〕 岡崎兼三郎代官所芦谷村名主弥右衛門外 深溝 村豊助外宛 嘉永四年四月	一通 三九
差出申一札之事 庄屋市川孫十外 八田右衛門 次郎宛 嘉永四年四月	一通 三三
〔芦谷村深溝村道境図〕 両村庄屋外 嘉永四 年四月	一鋪 三五
乍恐以書付奉願上候〔八田ノ庄屋不調法御 免願〕 深溝村肝煎勘十外 八田右衛門次郎宛 嘉永四年五月	一通 三四
差上申一札之事〔八田宛詫書〕 深溝村肝煎 勘十外 八田右衛門次郎宛 嘉永四年五月	一通 三五
水利出入	
乍恐以口上書奉申上候〔西尾領小焼野村板堰 一件〕 駒場村庄屋十藏外 深溝役所宛 天保九 年一〇月	一通 三六
〔西尾領小焼野村板堰一件願書留〕 小笠原長 門守知行所碧海郡中嶋村外一力村 松平和泉守 役所宛 天保一三年四月	一通 三九
御訴訟扣〔矢作古川・広田川板堰取払願〕 幡 羅郡高川原村・花藏寺村・大和田村・永良村・駒 場村・岡嶋村 奉行所宛 天保一三年一二月	一冊 三九
奉公人・家督出入	
〔兵九郎年季奉公出入ニ付口上一札〕 駒場村 庄兵衛 八田清兵衛宛 明曆三年一〇月一日	一通 三〇
奉差上返答書之覺〔養子離縁願〕 佐十郎後家 ひさ 御屋鋪役人宛 天保一五年一〇月	一冊 四〇
寺 院	
禁 制	
覺〔本光寺境内竹木伐採殺生禁止〕 板倉甚太郎 文政一三年閏三月	一通 四三
朱印地書上〔↓『土地・戸口』『朱印地書上』〕	

明細書上

(寺院名書)

(寺院明細書上) 菅沼八郎知行所設栗郡大洞村
本光寺大乘 赤坂役所宛 辰年二月

一通 四八〇
一通 四三三

〇

以書付奉申上候「養子届」江原村福浄寺鳳全
深溝役所宛 嘉永六年二月二七日

一通 四三三

朱印改

口上之覚「出府届」駒場村東向寺 深溝役所
宛 嘉永七年九月

一通 四三六

口上之覚「帰国届」駒場村東向寺 深溝役所
宛 嘉永七年一月

一通 四三六

廻状「朱印渡」八田森右衛門 本光寺外宛
一月二〇日

一通 四三七

再建願

乍恐以書付奉御願上候「七面堂再建」深溝
村庄屋金子常助外 役所宛 嘉永元年七月

一通 四三三

以書付奉願上候「禪堂古来復帰」江原村妙善
寺 深溝役所宛 嘉永二年閏四月

一通 四三七

以書附奉願上候口上覚「木戸門」深溝村円
超寺 深溝役所奉行宛 嘉永二年九月

一通 四三三

梵鐘取調

赤坂陣屋佐藤丈助御用状「幕令達」陣屋役人
宛 二月一九日

一通 四八一

赤坂陣屋廻状写 二八知行所陣屋宛 二月一九
日

一通 四八四

赤坂之来状写 役人宛 二月一九日

一通 四八六

八田右衛門次郎書附「書上ノ件達」本光寺・
三光院宛 二月二〇日

一通 四八二

廻状「赤坂へ出張スベキ達」八田右衛門次郎・
齊藤三十郎 江原村妙喜寺外宛 二月二一日

一通 四〇二

赤坂陣屋廻状写「梵鐘調催促」林伊太郎手附
佐藤丈助 御馬陣屋曲淵甲斐守役人外二七陣屋役
人宛 二月二二日

一通 四八三

八田右衛門次郎・齊藤三十郎書状「寺院名
前書差出方」佐藤丈助宛 二月二四日

一通 四九九

御尋ニ付申上候書付「宗派・梵鐘等書上」江
原村福浄寺一法 赤坂役所宛 辰年(安政三カ)二
月二六日

一通 四〇五

御尋ニ付申上候書付 三光院天州 赤坂役所宛
辰年二月二六日

一通 四〇六

御尋ニ付申上候書付 駒場村随縁寺智順 赤坂
役所宛 辰年二月二六日

一通 四〇七

御尋ニ付申上候書付 江原村妙喜寺黙庵 赤坂
役所宛 辰年二月二六日

一通 四〇八

御尋ニ付申上候書付 深溝村長満寺中本立坊春
耀 赤坂役所宛 辰年二月二六日

一通 四〇九

御尋ニ付申上候書付 深溝村長満寺中松林坊春
賢(カ) 赤坂役所宛 辰年二月二六日

一通 四一〇

御尋ニ付申上候書付 深溝村長満寺中春宣カ
・赤坂役所宛 辰年二月二六日

一通 四一一

御尋ニ付申上候書付 深溝村長満寺日通 赤坂
役所宛 辰年二月二六日

一通 四一二

絵 図

(三州額田郡深溝村絵図)

160×180 一舗 四一六

三河国幡豆郡江原村絵図 文化九年五月

121×206 一舗 四一五

駒場村絵図	文化九年五月	105×150	一舖	四三〇	中嶋与五郎書状	〔来月江戸罷下ノ事〕	一一月一八日	一通	四四八ノ一六
三河国幡豆郡駒場村絵図	天保三年一〇月	150×80	一舖	四三三	横藤藤四郎書状	〔御茶一種被下御礼〕	一二月一二日	一通	四四三
(入会草刈場絵図)		34×49	一舖	四三七	守(森)右衛門宛				
後川略絵図		28×72	一舖	四三八	中嶋与五郎書状	〔勘太郎留袖ノ儀・出府中消息〕	一月五日	一通	四四八ノ七
(村絵図下書)		43×31	一舖	四三九	中嶋与五郎書状	〔正月出府ノ報〕	二月一七日	一通	四四八ノ一八
奈嶋村絵図	庄屋又左衛門・徳左衛門	72×42	一舖	四四〇	中嶋与五郎書状	〔礼状・駿府云々〕	三月二三日	一通	四四八ノ五
関ヶ原合戦図		56×78	一舖	二五	円福寺東□書状	〔市川助右衛門書状御届云々〕	五月八日	一通	四四四
八 田 家					中嶋与五郎書状	〔江戸へ便へ挨拶・安身様三三回忌ノ事・田植模様〕	〔享保元年力〕五月二二日	一通	四四八ノ二
書 状					中嶋与五郎書状	〔領内消息・麦作云々〕	七月六日	一通	四四八ノ六
弥一左衛門宛					中嶋与五郎書状	〔甲斐守長円寺御立寄ノ事〕	八月四日	一通	四四八ノ二
中嶋与五郎(重央)書状	〔弥一左衛門江戸下り云々〕	七月六日	一通	四四八ノ三	中嶋与五郎書状	〔弥一左衛死去悔状〕	(元文二年力)九月二二日	一通	四四八ノ一七
中嶋新右衛門書状	〔法事ノ事等〕	八月二六日	一通	四四八ノ二〇	中嶋与五郎書状	〔地震消息〕	一〇月七日	一通	四四八ノ三
中嶋与五郎書状	〔鳥見罷越ノ事〕	九月一二日	一通	四四八ノ二五	中嶋与五郎書状	〔領内静謐ノ由云々・此元免相下難儀云々〕	一一月一四日	一通	四四八ノ九
中嶋与五郎書状	〔石見守老中就任云々・大風見舞礼状〕	九月二七日	一通	四四八ノ一	中嶋与五郎書状	〔立毛・米値段等〕	一一月二〇日	一通	四四八ノ八
松平七郎兵衛(親正)書状	〔姉出産消息〕	一〇月三日	一通	四四五	中嶋与五郎書状	〔後欠〕	〔江戸へ来人・同消息等〕	一通	四四八ノ四
中嶋新右衛門(重能カ)書状	〔公儀ノ者紛入召捕云々〕	一一月上旬	一通	四四八ノ一四	弥太夫宛				
中嶋与五郎書状	〔鳥見ノ件〕	一一月一七日	一通	四四八ノ一三	河井賀野右衛門(正元)書状	〔改年祝等〕	正月八日	一通	五二三

大山庄助〔政延〕書狀〔改年祝等〕	正月八日	一通	三〇四	〔伝源義経太刀之図〕	24×118	一枚	四七六		
小川佐助〔尚附〕書狀〔改年祝等〕	正月一七日	一通	三三三	地方仕法書	半	一冊	五二四		
木津屋左兵衛書狀〔改年祝〕	正月二〇日	一通	三三六	地方算法	半	一冊	五二五		
天野貞之進〔尚恒〕書狀〔九郎左衛門縁組ノ件〕	二月二一日	一通	三三七	長沼流調鍊覚書	八田姓	半	一冊	五二六	
梅村奎兵衛・近藤弥助書狀	〔八田帰国ニ付招待〕 六月九日	一通	三三八	正月規式之卷	半	一冊	五二七ノ一		
梅村奎兵衛・近藤弥助書狀	〔村々未進取立方等〕 七月九日	一通	三三九	婚礼器服之卷	半	一冊	五二七ノ二		
伴七郎宛				寛政七卯春祝用〔祝言諸事留〕	半	一冊	五二七ノ三		
矢作龜助書狀〔招待謝絶云々〕	二月二三日	一通	四九七	朝鮮御征伐豊臣武将年代記	書林京都文精堂蔵	半	一冊	五三〇	
上村井善蔵書狀〔借金御札等〕	五月九日	一通	五〇五	額田県彊記聞	第二号	半	仮一冊	五三二	
〇				維新風聞					
大しま波右衛門書狀〔麻蚊帳差上云々〕	八田宛 六月二二日	一通	四九三	大塩平八郎一乱写〔嘉永元年極月〕	半	一冊	五三八		
某書狀〔天領検見出張ノ件外〕	九月一八日	一通	五〇三	桜田一件聞書	半	一冊	五二九		
某書狀〔御転役ノ祝言〕		一通	五	文久二年正月一五日浪人者存意書〔安藤対馬守襲撃一件〕	半	一冊	五二二		
記 録				下総国枋木宿ノ之来状写〔江戸開城・宇都宮合戦等〕〔慶応四年〕四月二六日		一通	四六四		
〇 免許狀				板倉家					
免許狀〔会中席〕池坊專用	八田内蔵吉宛	一通	四四六	家系・勤仕					
天保九年四月		一通	四四六	御先祖書写〔重直一勝宦〕	板倉主税助	寛政一二年一二月	半	一冊	一
伝授狀〔草木集生花卷〕池坊專明	八田内蔵吉宛	一通	四四七	〔諸事覚〕〔延宝八年四月一〇日一八月二日江戸城内諸事留〕		半	一冊	五二六	

*山城奈嶋村駈出足輕中間人数役付之事 〔二
条城番役荷物搬入〕 正徳四年三月

半 一冊 三七

東照宮百回御忌於日光山法花經万部御法事
執行 〔正徳五年四月〕

半 一冊 五三

御沙汰書 〔延亨五年五月―八月一日幕府職制〕

半 一冊 五六

御定書 〔幕法〕 寛政三年五月二五・六日写

半 一冊 五九

京都被仰出書写 慶応四年五月

半 一冊 五七ノ二

菩提寺

板倉遠忌

源達様御三回忌御法事料 〔享保一二年カ〕

一通 四四

閑幽院様百五十回忌留帳 天保七年五月二六日

半 一冊 二三

覚 〔源俊様御忌香奠目録〕

一通 四二

回向料受取

覚 〔大洞院位牌立〕 長円寺納所 代番八田右
衛門次郎宛 丑年七月八日

一通 五六

覚 〔永崇院〕 長円寺納所 代番八田宛 丑年
八月二二日

一通 五五

覚 〔徳応院〕 長円寺納所 代番八田宛 寅年
二月一七日

一通 五〇

覚 〔心月院〕 長円寺納所 代番八田宛 寅年
二月一七日

一通 四八

覚 〔天徳院〕 長円寺納所 代番八田宛 寅年
二月一七日

一通 五四

覚 〔本光院〕 長円寺納所 代番八田宛 寅年
一〇月一〇日

一通 四九

覚 〔寛隆院〕 長円寺納所 代番八田宛 卯年
八月二三日

半 一通 四五

覚 〔海鱗和尚〕 長円寺納所 代番八田宛 卯
年三月一四日

一通 四六

覚 〔瑞光院〕 長円寺納所 代番八田宛 子年
八月二六日

一通 四三

覚 〔寺納請取〕 長円寺納所 代番八田宛 午
六月一日

一通 五三

覚 〔義正院〕 長円寺納所 代番八田宛 未年
二年月二八日

一通 五三

寺合力

覚 〔合力米請取〕 長円寺納所 齊藤丹藏・金
子十郎右衛門宛 天保五年一二月

一通 四二五

覚 長円寺納所 八田右衛門次郎宛 子年一
月

一通 五二

覚 長円寺納所 代番八田宛 丑年一月九日

一通 四三二

覚 長円寺納所 御使番八田宛 辰年一月二
一日

一通 四三〇

覚 〔借用金カ〕 長円寺納所 八田右衛門次郎
宛 卯年一二月一二日

一通 四九三

*長円寺御廟所大破御修覆積帳 万延二年

半 一冊 三八六

旗
越
氏
本

和
州
御
用
場
文
書
目
録

旗本 船越氏 和州御用場文書目録目次

御用場	四
江戸へ来状、御用状控、御用場日記	五
引継書類、御触・回状	六
知行所支配	七
土地・納入、人別	八
神宮寺一件	九
觀教申立書(地頭役所宛)、龍然申立書、豊前口上書、濟口届書	一〇

和州御用場文書目録

(文書記号 45A)

御用場

江戸へ来状

田中権助・岩田真兵衛書状〔賀状〕北厚治
・高嶋丈太郎宛 正月五日
田中仙助・同猶次郎書状〔殿様駿府加番ニ付
金子調達ノ件〕北厚治外宛 七月一八日

御用状控

御蔵屋敷 江書状扣 和州御用場 安政四年六月
二〇日―十二月一〇日

大坂御蔵屋敷・摂州御用場 文通扣 和州御用
河州御用場・江戸御勝手方 文通扣 和州御用
場(高嶋丈太郎手元扣) 安政六年一月五日―八
月一九日

心得方手扣〔江戸屋敷用人等ノ文通扣〕和
州村役場掛 高嶋丈太郎手元扣 万延二年一月

御用書艸稿〔江戸屋敷トノ文通扣〕和州方御
用場 文久二年正月五日―閏八月一九日

文久二戊午御用書扣〔江戸屋敷田中等トノ文
通扣〕 九月二日―一〇月一五日

大坂御蔵屋敷 文通扣 和州方役場(高嶋丈太
郎手元扣) 文久三年一月八日―六月七日

御用書艸稿 和州方役場 文久三年十二月二八
日―文久四年五月二七日

和州御用場文書 御用場

大坂御蔵屋敷 文通扣 和州方役場(高嶋丈太
郎手元扣) 文久四年一月五日―十二月一八日

御用書艸稿 和州方御用場 慶応二年一月五日
―六月一九日

大坂御蔵屋敷 文通扣 和州方役場(高嶋手元
扣) 慶応三年一月一日―十二月二四日

大坂御蔵屋敷 文通扣 和州方役場(高嶋手元
扣) 慶応四年一月五日―九月一日

御用書艸稿 和州方御用場 慶応四年一月五日
―九月一四日

御廻状并御達書扣〔冥加上納ノ件・北差控ノ
件・三千兩借上等〕勘定方 明治元年―二年

御用書 船越内高嶋丈太郎 明治三年五月―七
月二一日

御用場日記

江戸御 日記 高嶋丈太郎 安政五年一〇月一
日―十一月七日

日録 和州方役場 文久二年九月三日―十二月
一六日

日記 和州方船越役場 文久三年三月二〇日―
八月一五日

四五

日録	和州方役場	文久四年一月一日―一〇月二日	半	一冊	六	土地・納入	大和国知行所村高帳（宇智郡内五カ村）舟越左門家来坂本文久八・江田平内 植村右衛門佐家来宛 元禄一一年四月二九日	美	一冊	一
日記	船越役場	文久四年一〇月三日―一二月二六日	半	一冊	六	靈安寺村田畑帳 庄屋勘右衛門・年寄利兵衛外 享保三年二月	美	一冊	六	
日録	和州方御用場	慶応二年一月一日―六月九日	半	一冊	三	御物成之帳（物成立合算用） 嶋野村庄屋増右衛門 天明二年一二月	半	一冊	三	
日記	和州方御用場	慶応三年六月二四日―一月晦日	半	一冊	三	奉差上書附之写并村方取締連印帳（備用会益銀被下付仕法差上） 嶋野村 地頭役所宛 安政四年五月一七日	美	一冊	六	
（日録）	引継書類	一一月二六日―一二月晦日	半	一冊	三	御請書（上野府庫金借用・御勝手取仕切） 嶋野村惣百姓 地頭役所宛 安政五年一二月五日	半	一冊	三	
御用場御取払後御預御用物品数帳	北厚治	北厚治 高嶋丈太郎 嘉永二年八月	半	一冊	三	（上納金差上三付村方口上書）（一七カ寺御進發上納） 五カ村庄屋 地頭役所宛 慶応元年七月二八日	美	一冊	六	
御用物之内御引渡目録	北厚治	高嶋丈太郎 宛 安政四年六月一八日	半	一冊	六	○				
（船越家来伺書）（旧制取調方旧役所一括上申、件）中太夫船越柳之助家来高嶋丈太郎（代筆郷宿かせや治兵衛） 奈良府役所宛	明治二年三月一四日	一通	六			（難波百姓願口上書）（年貢御用捨・助成等願） 靈安寺村重左衛門 明治二年七月六日	一冊	六		
御触書写帳	〔三商売取締公儀御触〕	文化一一年二月	半	一冊	六	（御預銀相済二付御山村かじ差入証文）〔御武備調達請銀受取〕 御山村かじ 嶋野村役人宛 嘉永三年六月	二冊	六		
（知行所村役人請書）〔大俵被仰出〕	五カ村役人 地頭役所宛	嘉永七年七月二一日	美	一冊	六	大和五条御差紙始末書覚〔原田村借銀年賦返済願〕 文久元年六月	半	一冊	六	
五人組前書之通	〔雛形〕〔高嶋奈良造手留カ〕	文久二年八月	美	一冊	三	引合書〔嶋野村奈良造貸銀取立幹旋願〕 嶋野村年寄奈良吉 吉野郡桂原村・長瀬村役人宛 文久二年六月一一日	一通	六		
寺社御改奉書上候	滝村役人 奈良府役所宛	明治二年三月二九日	美	二冊	三	人 別				
						村中宗旨御改人別帳 嶋野村役人 中井良平・中村問太郎宛 天保四年三月	半	一冊	三	
						宗旨御改人別帳 車谷村庄屋高嶋奈良造外 北厚治・高嶋丈太郎宛 慶応二年三月	一冊	三		

知行所支配

神宮寺一件

觀教申立書（地頭役所宛）

乍恐以書付奉願上候〔神宮寺祈禱料・諸德催促〕御靈宮別坊井上山觀心院神宮寺無住 _{ニ付} 妻帶靈安寺村地藏寺病氣 _{ニ付} 觀教 地頭役所宛 天保一四年九月二三日	一通	七
乍恐再返答奉申上候〔被下置祈禱料方取込吟味一件 _{ニ付} 再返答〕天保一四年九月二八日	一通	七
口上書〔橫領一件吟味催促〕天保一四年一月五日	一通	四
口上書〔南都表出訴却下・地頭所取扱拒否〕天保一四年一月五日	一通	四
口上書〔橫領一件約束促進方〕天保一四年一月二八日	一通	四
乍恐以書付急訴奉願上候〔社木伐取吟味願〕天保一四年一月二八日	一通	四
口上書〔取込一件取計願〕天保一四年二月二六日	一通	四
口上書〔祈禱料渡方取計願〕天保一四年二月二九日	一通	四
御尋 _{ニ付} 以書附左 _ニ 奉申上候〔豊前橫領停止願〕天保一五年二月二日	一通	三
御尋 _{ニ付} 口上書〔神宮寺満願寺年貢上納ノ件〕天保一五年二月二日	一通	三
覚〔除地吟味願〕天保一五年二月二日	一通	三
口上書〔満願寺妻帶再届〕天保一五年三月二九日	一通	三

口上書〔豊前〔掛ル本公事願〕 觀教・取喰人大坂定助 天保一五年四月二一日	一通	三
以書付御届奉申上候〔諸堂修覆 _{ニ付} 南都罷出届〕天保一五年八月五日	一通	七
以書付御答申上候〔境目一件御請差出猶予願〕天保一五年一〇月一六日	一通	六
口上書〔請書差出猶予願〕天保一五年二月八日	一通	三
奉願上口上書〔仁兵衛御答宥免願〕天保一五年二月二一日	一通	三
奉歎願口上書〔藤九郎寄附山放棄一札〕弘化二年二月三日	一通	四
奉差上口上書〔別当職由来〕弘化二年三月一〇日	一通	三
奉願上口上書〔相手上京取札願〕弘化二年三月一五日	一通	六
口上書〔再込内濟請書〕弘化二年四月二六日	一通	五
乍恐以書付奉申上候〔吟味取扱方〕弘化二年四月二七日	一通	二
御請書〔南都出頭〕弘化二年四月二八日	一通	五
奉差上御請書〔南都再呼出〕弘化二年四月二八日	一通	五
以書付奉申上候〔福中大祭札執行〕弘化二年九月一九日	一通	六
以書付御届奉申上候〔村方不穩御届〕〔陣屋守篤平 _{トテ} 〕弘化二年九月一九日	一通	七
以書付急訴奉歎願候〔地藏寺博奕取調一件御糾願〕弘化二年九月二一日	一通	九
御尋 _{ニ付} 奉申上口上書〔豊前申立御札願〕弘化二年一〇月一三日	一通	三

以書付歎願奉申上候〔和解直令へ返答書〕 弘化二年一〇月一六日	一通	三	乍恐別紙御断奉申上候〔名前認方聞届願〕 弘化二年四月二七日	一通	四
口上書〔御手当御請猶予願〕弘化二年一〇月二三日	一通	六	（口上書）〔和解申付箇条へ返答〕弘化二年一〇月一九日	一通	五
奉差上御請書〔御利解申渡請書〕弘化二年一〇月二九日	一通	三	乍恐御詫書〔御有免・神職存続方願〕弘化三年一〇月二日	一通	七
以書付歎願奉申上候〔一件片付取計方願〕弘化三年七月三日	一通	六	濟口届書		
以書付御届奉申上候〔旧記取調届〕弘化三年七月八日	一通	六	字智郡靈安寺村御靈大明神社坊神宮寺同村同社人豊前井村役人江相掛リ倒候出入濟口御届書〔南都御番所宛濟口証文御届〕靈安寺村関係人 地頭役所宛 弘化四年五月	一冊	七
以書付歎願奉申上候〔米下付願〕弘化三年八月六日	一通	六			
以書付御届奉申上候〔配札ノタメ南都罷出届〕弘化三年八月六日	一通	六			
以書付奉願上候〔村役人有免願〕弘化三年八月六日	一通	七			
以書付奉願上候〔御唱号等御下ゲ願〕弘化三年八月一五日	一通	六			
龍然申立書					
以書付御届申上候〔登山着到届〕弘化三年七月五日	一通	五			
以書付御届奉申上候〔掃寺養生届〕地蔵寺龍然 地頭役所宛 弘化三年七月一五日	一通	七			
豊前口上書					
（別紙田地証文之写）〔享保三年質物差入証文・享保一九年讓狀〕御靈宮大明神社人藤井豊前地頭役所宛 天保一五年四月一二日	一通	三			
乍恐御答書〔由來書上〕天保一五年四月一三日	一通	六			

上野国
東小保方村

萩原家文書目録

上野国 萩原家文書目録目次
東小保方村

久永家	頁	酒小売・船問屋・店借、百姓御咎、訴訟、出奔人	七
家	五	寺院	七
家系、相続、吉凶、屋敷・土地、家来勤方	五	萩原家	七
勤仕	五	勤方	七
出仕、御祝言上・献上、組・與力支配、諸役、書状	五	久永家御役・扶持・高、戸田家年貢諸役	六
陣屋元	五	田畑・居屋敷・山林	六
御触	五	奉公人	七
御勝手	五	書状・風聞	七
用状・御用状	五	諸芸、明治、その他	七
久永萩原宛、久永家来萩原宛、書状	三		
年貢収納	三		
検見、年貢請状、年貢納入、藏米請取、上納金、先納、村借	六		
国役・夫役	六		
国役、夫役	六		
困糶・夫食・頼母子	六		
公事・出入	六		
百姓騒立一件、用水、相続・離縁	六		

上野国 萩原家文書目録

(文書記号 37B)

久永家

家

家系

久永氏系図 (天和—元文)	一通	五ノ一
久永主税殿系譜書付 [重章—章温]	一通	五ノ二
宗佐養子二付菅沼新三郎殿へ略書付 [久永宗佐略系図]	一通	五ノ三
小浜公来政勝様・重之様御母公書付 [久永政勝・重行母系図]	一通	五ノ四
先祖由緒 [断簡]	一通	三〇
久永源兵衛 (勝信) 履歷書 (寛政七年)	一通	五ノ五
覚恩寺書狀 [久永家先祖書問合] 久永源兵衛勝信宛 一月九日	一通	五
久永主税書狀 [代々法号問合] (久永源兵衛勝信)宛 七月一三日	一通	一〇七ノ二
久永主税書狀 [先祖由緒問合] (久永源兵衛勝信)宛 一〇月一七日	一通	一〇七ノ一
久永主税書狀 [先祖菩提寺問合] 久永源兵衛 (勝信)宛	一通	一〇七ノ三
佐橋家家来書狀 [久永家由緒問合] 清水三郎治宛 三月晦日	一通	一〇五ノ一
相統		

萩原家文書 久永家

(久永伊織閑翁遺言狀) 久永源兵衛 (勝信)宛四月	一通	九四
(久永源兵衛勝信妹縁組許可書) 久永源兵衛勝信宛	一通	六四
若年寄御書附 [源左衛門隠居・廣太郎家督二付登城召] 久永廣太郎宛 (天保七年) 一二月二一日	一通	四六
御隠居御家督之節被仰出御書下ケ写 付諸土拝領物被仰付候次第 天保七年	一冊	九
宗佐養子後二付問答書写	一通	五ノ六
吉凶		
三州額田郡能見村覚恩寺役僧書狀 [久遠院法事] 久永源左衛門 (勝明) 内萩原要右衛門・松井啓太夫宛 六月二九日	一通	五八
清水三郎次・井上郡太夫書狀 [遊林院位牌料・茶料等] 覚恩寺宛 八月二二日	一通	二〇〇
久永先祖墓石図	一通	三三
園戲院遊林大居士位牌図	一通	二〇八
久遠院位牌図	一通	二〇九
屋敷・土地		
(久永源五郎勝純居屋敷地返贈証文) 金子文次郎宛 元文三年七月二三日	一通	一〇四
御屋敷請取証文之事 佐竹左近將監家来 久永源兵衛内清水六郎右衛門他宛 安政二年六月二九日	一通	六

屋敷御引渡証文之事 佐竹左近將監家来
久永源兵衛内清水六郎右衛門他宛 安政二年六月二十九日

一通 九

御屋敷借地証文之事 佐竹將監家来

久永源兵衛内清水六郎右衛門他宛 安政二年六月二十九日

一通 一〇〇

(江戸町奉行御書附) 「久永源兵衛借屋敷上水組合出銀御勘弁」 (安政二年)

一通 一〇三

久永源兵衛家来井上義十郎願書 「借屋敷諸出銀御勘弁」 (安政二年) 六月晦日

一通 一〇一

(久永源兵衛大塚茗荷谷下屋敷絵図) (安政二年)

一鋪 一〇三

(四ツ谷屋敷絵図)

23×46 一鋪 一七ノ一

(赤坂屋敷絵図)

23×46 一鋪 一七ノ二

(目白台屋敷絵図)

23×46 一鋪 一七ノ三

(二十騎町屋敷絵図)

23×46 一鋪 一七ノ四

○

(地所奉差上御請書) 塩嶋和十郎他 清水六郎右衛門他宛 嘉永二年一〇月六日

一通 一四七

家来勤方

(久永家中諸士勤方覚)

一通 五

一昨四日被仰進候御答 「清水六郎右衛門・周作御知行所取扱不埒御答一件」 (文久元年) 二月六日

半 一冊 二

(清水周作上納仕法手違ニ付願書) (文久元年) 一一月一〇日

半 一冊 二八

久永氏御書附 「高・扶持成遣」 清水周作宛

一通 五九ノ九

○
音羽町喜兵衛奉公人請狀 久永源兵衛(勝信) 役人中宛 寛政九年六月

一通 一三ノ一

勤仕

出仕

(久永伊織御目見願書) (宝曆五年) 一〇月
(久永伊織御目見願書) (宝曆五年) 一〇月

一通 八ノ一
一通 八ノ二

○

本安芸守御書附 「私宅召」 久永源兵衛宛 一一月一二日

一通 四

御祝言上・献上

側衆返札 「寒中御機嫌伺」 久永源兵衛(勝信) 他宛 (文化二年) 一一月二三日

一通 四ノ一

側衆返札 「寒中伺」 久永源兵衛(勝信) 他宛 (文化二年) 一一月二五日

一通 四ノ一

老中返札 「御暇被下返札」 久永源兵衛(勝信) 宛 三月九日

一通 五

老中返札 「改年慶賀進物」 久永源兵衛(勝信) 宛 正月一日

一通 六

老中返札 「家族病氣看病ニ出府許可礼状」 久永源兵衛(勝信) 宛 七月二九日

一通 五

若年寄返札 「密柑献上」 久永源兵衛(勝信) 宛 一一月二一日

一通 四

老中返札 「御機嫌伺」 久永源兵衛(勝信) 他宛 一一月二二日

一通 三

老中返札 「密柑献上」 久永源兵衛(勝信) 宛 一二月六日

一通 三

久永源兵衛伺書控〔組同心縁者之者牢舎〕

一通
八

一通
八

一通

一通 一八九

一通
八

一通 八三ノ二

一卷
九六

一通 八三ノ二

一通 五ノ三

一通
八四

一通
八五

一通
三六

一通

一通
三七

一通

通
九

一通 九二ノ一

一卷
九七

一通二只ノ三

一通 四二

一通 六三ノ一

一通 六三ノ二

一通
四三

一通
九〇

一通
ノ
四三

(西丸御先手弓組久永源兵衛日記) (寛政一
年二月) 九一六日

○駿府城番

(老中土井大炊頭御城入式次第) (享和三年
閏正月二三日)

土井大炊頭殿御道中日取書付 (享和三年)
閏正月

駿府御到着砌之事等覚 (享和三年)

横長半

大村上総介純昌書狀「上総介オランダ船入船
二付参勤延期」久永源兵衛(勝信)宛 (享和三
年二月三日)

大村上総介純昌書狀「上総介ロシア船入船二
付参勤延期」久永源兵衛(勝信)宛 (文化元
年二月一日)

茂呂露泊書狀「江戸へ駿府道中」若殿(久永
源左衛門勝明カ)宛 (文化二年) 閏八月二日

側衆連名御書附「駿府城代内藤甲斐守差扣通
知」(文化二年) 一一月二三日

側衆連名御書附「駿府城代内藤甲斐守差扣」
久永源兵衛(勝信)他宛 (文化二年) 一一月
二五日

松平吉太郎書狀「駿府町奉行御貸金」二月
一日

○駿府・江戸往返用狀

久永源兵衛(勝信)書狀「城内破損并浅間
再建取扱被仰付」源左衛門宛 (享和三年)
一一月二六日

久永源兵衛(勝信)書狀「采女正殿朝鮮来
聘御用」三 源左衛門・内匠宛 (文化元年)
六月一日

久永源兵衛(勝信)書狀「松平能登守殿本
丸若年寄被仰付」源左衛門・内匠宛 (文化元
年) 八月一七日

久永源兵衛(勝信)書狀「奥津献上済・大
炊頭・对馬守殿御奉書拜見」六 源左衛門・
内匠宛 正月一日

*久永源兵衛(勝信)書狀「河岸場取斗村役
人手鎖申付」三 源左衛門宛 七月一日

久永源兵衛(勝信)書狀「家来不行義座敷
住居申付」五 源左衛門宛 九月一日

久永源兵衛(勝信)書狀「家中取扱方」一
七 源左衛門・内匠宛 一〇月三日

久永源兵衛(勝信)書狀「久永主税へ貸附
金・馬買入」源左衛門宛 一一月三〇日

○往返用狀

源兵衛用狀「旧冬勘定・堀殿知行所村借
一八」源左衛門・内匠 正月二日

源左衛門・内匠用狀「駿府御仕廻用金・家
来江之被下物」一二 源兵衛宛 正月六日

源兵衛用狀「飛脚便取扱方・浅岡貸附朱書・
常州取扱」二二 源左衛門・内匠宛 正月二三
日

源左衛門・内匠用狀「鳥頂戴・根木村仕附
残り不審」八 源兵衛宛 二月五日

源左衛門・内匠用狀「番丁知行名目御借用
・御郡代附御貸附」一〇 源兵衛宛 二月五
日

源兵衛用狀「御城代明中心得」二五 源左
衛門・内匠宛 二月一日

源左衛門・内匠用狀「知行所實地御貸附申
込」八 源兵衛宛 二月六日

一通 二六ノ八

一通 二六ノ六

一通 二六ノ二

一通 二六ノ五

一通 二六ノ三

一通 二六ノ四

一綴 三ノ五

一綴 三ノ六

一綴 三ノ六

一綴 三ノ六

一綴 三ノ二

一綴 三ノ三

一綴 三ノ七

源左衛門・内匠用状〔御城代明中心得・庄
松方証文 二七〕（後欠） 源兵衛宛 二月一
五日

源左衛門・内匠用状（前欠）源兵衛宛
二月一六日

源兵衛用狀〔身辺雑事 八〕 源左衛門・内匠宛 二月二一日

源左衛門・内匠用状
源兵衛宛 二月二五日
〔管根手形受取 一四〕

源兵衛用狀〔常州納メ金取立扱方
源左衛門・内匠宛 三月二日 一三〕

源左衛門・内匠用状 〔身邊雜事 四〕 源兵衛宛 三月六日

源兵衛用狀 (前欠) 源左衛門・内匠宛
二月二〇日

源左衛門・内匠用狀〔御菜園御菜種御納・
今月入用金 一二〕源兵衛宛 二月二五日

源兵衛用狀〔馬買入 一六〕 源左衛門・内
匠宛 二月晦日

源左衛門・内匠用状
上州表御臨時御入金
九 〔御城代跡役被仰付・
源兵衛宛 三月

源兵衛用状〔俊蔵帰府二付申遣用事・身辺雑

源左衛門・内匠用状
〔九鬼和泉守家来御金

宮州一系全二二
六日 漢書卷之六

原左衛門・内匠用犬「送金」

源左衛門・内匠用状〔送金 七〕 源兵衛宛
四月六日

源兵衛用狀〔奉行金御代官金調達 一八〕
源左衛門・内匠宛 四月十日

源左衛門・内匠用状
〔御留守御門出入取締
源兵衛宛 四月一五日
八〕（後欠）

源左衛門・内匠用狀
源兵衛宛 四月一四日
〔御貸附申込衆 五〕

二〇日 源兵衛月狀 〔六〕 源左衛門・内匠宛 四月

阿見村河岸場一件 二二〇 後欠 源兵衛宛
四月二五日

源左衛門・内匠用狀〔奉行所御返納金
九〕源兵衛宛 四月二五日

源兵衛用状 〔四〕 前欠 源左衛門・内匠宛
五月一日

源左衛門・内匠用狀〔端午之節句・常州見分八〕源兵衛宛 五月五日

源左衛門・内匠用状〔阿見村河岸一件
一〕源兵衛宛 五月一五日

源左衛門・内匠用狀
〔常州百姓除帳伺
○〕源兵衛苑 五月一五日

源左衛門・内匠用状
〔二〇〕
（前欠）源兵衛宛 五月二五日

源左衛門・内匠用狀
〔九〕〔前欠〕源兵衛
宛 六月五日

源左衛門・内匠用狀
〔前欠〕
源兵衛

源兵衛用狀
月二〇日
(前欠)
源左衛門・内匠宛
六

源左衛門・内匠用状
〔暑中呈書・上州・武
州・野州植付届 一二〕
源兵衛宛

源左衛門・内匠用状 〔暑中御書到來・奥御奉公願三付大目付達書〕 源兵衛宛 六月二十五日	一綴 三ノ三
源兵衛用状 〔身辺雑事 八〕（前欠） 源左衛門・内匠宛 七月一日	一綴 三ノ七
源左衛門・内匠用状 〔暑中呈書差出・常州百姓除帳伺 一五〕 源兵衛宛 七月五日	一綴 三ノ六
源左衛門・内匠用状 〔五〕（前欠） 源兵衛宛 七月一日	一綴 三ノ五
*源兵衛用状 〔常州河岸場取締方 一五〕（前欠） 源左衛門・内匠宛 七月二〇日	一綴 三ノ四
*源左衛門・内匠用状 〔女子婚姻・常州河岸場一件 七〕（後欠） 源兵衛宛 七月二十九日	一綴 三ノ四
源左衛門・内匠用状 〔御城代病氣二付月並金増金・野州知行所早魃 九〕 源兵衛宛 七月二十五日	一綴 三ノ四
源兵衛用状 〔御城代明中取扱心得 一一〕 源左衛門・内匠宛 七月二十九日	一綴 三ノ四
源左衛門・内匠用状 〔知行所空地年貢取附帳請書出来 一一〕 源兵衛宛 八月五日	一綴 三ノ四
*源兵衛用状 〔女子婚姻・常州取斗方 一七〕 源左衛門・内匠宛 八月六日	一綴 三ノ四
源左衛門・内匠用状 〔御留守日記并勘定帳御改 一五〕 源兵衛宛 八月一日	一綴 三ノ三
源左衛門・内匠用状 〔新御城代出立・御幕方御規定帳用方 八〕 源兵衛宛 八月一日	一綴 三ノ三
源兵衛用状 〔七〕 前欠 源左衛門宛 八月一日	一綴 三ノ四
源左衛門・内匠用状 〔新御城代仰付 一〇〕 源兵衛宛 八月二十五日	一綴 三ノ六
*源兵衛用状 〔常州河岸場取扱一件 二三〕 源左衛門・内匠宛 八月二十六日	一綴 三ノ五
源兵衛用状 〔新御城代被仰付心得〕 源左衛門・内匠宛 八月二十六日	一綴 三ノ三
源左衛門用状 〔新御城代一件 一一〕 源兵衛宛 閏八月一日	一綴 三ノ五
源兵衛用状 〔信都一件 七〕 閏八月二日	一綴 三ノ六
源左衛門用状 〔常州田方受免願書 九〕 源兵衛宛 閏八月二日	一綴 三ノ六
源兵衛用状 〔常州毛見 九〕 源左衛門宛 閏八月二日	一綴 三ノ三
源左衛門用状 〔常州毛見評議 一二〕 源兵衛宛 九月五日	一綴 三ノ三
源兵衛用状 〔三〕（前欠） 源左衛門宛 九月五日	一綴 三ノ三
内匠・源左衛門用状 〔御組御褒美手継 一〇〕 源兵衛宛 十月四日	一綴 三ノ三
源兵衛用状 〔家中金二慎方 三〇〕 源左衛門・内匠宛 九月二二日	一綴 三ノ二
源兵衛用状 〔牧野備前守殿江歛状 一六〕 源左衛門・内匠宛 九月二〇日	一綴 三ノ四
内匠・源左衛門用状 〔學問御試御達書 一〇〕 源兵衛宛 九月二五日	一綴 三ノ四
源兵衛用状 〔月並金送方 一七〕 源左衛門・内匠宛 九月晦日	一綴 三ノ三
源左衛門・内匠用状 〔御側衆御小納戸御吟味 一〇〕（後欠） 一〇月五日	一綴 三ノ三
源兵衛用状 〔身辺雑事 一一〕 一〇月一日	一綴 三ノ四
源左衛門用状 〔四〕（後欠） 一〇月一日	一綴 三ノ三

源左衛門用狀〔五〕（前欠）一〇月一五日	一通 三ノ五
内匠・源左衛門用狀〔松下殿拝借金 一三〕	一綴 三ノ五
源兵衛宛 一〇月二五日	
源兵衛用狀〔紛失物町奉行へ御届 一二〕	一綴 三ノ五
源左衛門・内匠宛 一〇月二九日	
（源左衛門・内匠用狀）〔家来上州へ出立・渡辺殿御貸附 九〕（後欠）一二月三日	一綴 三ノ五
（源左衛門・内匠用狀）断簡 二〇ノ五五ノ続キ力	一綴 三ノ五
*源左衛門・内匠用狀〔阿見村一件 一九〕	一綴 三ノ五
源兵衛宛 一二月四日	
*源左衛門・内匠用狀〔常州一件 一三〕	一綴 三ノ六
源兵衛宛 一二月一五日	
*源兵衛用狀〔阿見村一件 一三〕 一二月二〇日	一綴 三ノ六
源左衛門・内匠用狀〔松平兵庫頭殿御達書 一〇〕（後欠）一二月二五日	一綴 三ノ九
源兵衛用狀〔蜜柑献上 一二〕 源左衛門・内匠宛 一二月五日	一綴 三ノ三
内匠・源左衛門用狀〔田口五郎左衛門殿方御貸附掛合 一三〕 源兵衛宛 一二月五日	一綴 三ノ一
源兵衛用狀〔田口方御貸附一件 一六〕	一綴 三ノ一
源左衛門・内匠宛 一二月九日	
源兵衛用狀〔身辺雜事 四〇〕 源左衛門・内匠宛 一二月九日	一綴 三ノ七
（源左衛門・内匠用狀）〔御奉書御受取・返納金・御貸附金 二八〕 一二月一五日	一綴 三ノ七
（源左衛門・内匠用狀）〔御手当・御用金申付 九〕（前後欠）	一綴 三ノ二
（源左衛門・内匠用狀）〔八〕（後欠）	一綴 三ノ五

萩原家文書 久永家

（源左衛門・内匠用狀）〔四〕（後欠）	一通 三ノ五
（源兵衛用狀）〔三〕（前欠）	一通 三ノ七
（源兵衛用狀）〔五〕（前欠）	一通 三ノ六
往返用狀〔表紙〕 駿府 源左衛門・内匠宛 文化二年正月	一通 三ノ六
○	
駿府の奥津鯛差上候ニ付申遣候〔御城代差扣御免一件〕（文化三年）正月元日	一通 三ノ三
○	
飛脚屋日野屋久右衛門詫狀〔飛脚賃銀改訂ニ付不調法〕 久永源兵衛役人中宛 享和三年一月	一通 二六
日野屋飛脚請狀〔江戸木挽町宛早便〕	一通 二七
久永源兵衛内小侯繁右衛門宛 享和三年二月二六日	
（飛脚心得）〔駿府・江戸往返〕 長谷川要人・川瀬文右衛門・小宮源右衛門 萩原俊藏・赤石逸平宛（文化二年）正月二五日	一通 二四
○	
（久永家人御用狀）〔御機嫌伺金品并御扶持被仰付等覚〕 御兩人宛（享和三年）	一通 二九
廿日便り目録帳 三人 御兩人宛 一二月二〇日	一冊 二六
書狀	
左京書狀 久永源兵衛宛（寛政七年）四月二七日	一通 二〇
長谷川要人・川瀬文右衛門・小宮沢右衛門書狀〔江戸へ便取扱方〕 萩原俊藏・赤石逸平宛（文化二年）正月一八日	一通 二五ノ六
萩原俊藏・赤石逸平差扣伺〔定便取扱不調法〕（文化二年）正月二一日	一通 二九

萩原家文書 久永家・陣屋元	*〔勘定奉行石川左近書狀〕〔知行所懸合之儀決着〕〔文化〕一〇月九日	一通	五〇
	*〔勘定奉行石川左近書狀〕〔阿見村百姓騒立〕〔文化〕一〇月二十九日	一通	五二
	*久永源兵衛書狀〔河岸場一件〕〔勘定奉行〕石川左近將監宛 七月二日	一通	二八ノ一
	松下忠次郎書狀〔松下知行所農民拝借金御世話ニ付礼物進上〕久永源兵衛宛	一通	三三
	〇		
	〔觀音寺領地ニ付由緒書上〕	一通	一五〇
	陣屋元		
	御触		
	〔尾張大納言逝去ニ付普請鳴物停止触書〕〔寛政二年〕一二月二四日	一通	三七
	御触書之写〔四天王寺再建寄附・武州御獄山社頭修復助成・江戸表江白米一切引受停止〕〔文化二年〕一二月一文化三年二月	一通	六六ノ一
御勝手	御触之写〔諸釋改〕〔文政四年〕八月	一通	六六ノ二
	御触之写〔百姓・町人葬儀取締〕〔天保二年〕四月	一通	六六ノ三
	御用番達書〔大塩平八郎徒党誅伐〕松平甲斐守他宛〔天保八年〕二月二六日	一通	七〇
	御触之写〔桑枝皮売買〕〔文久元年〕二月	一通	六六ノ四
	御触之写〔浪人・無宿鉢之者共召捕方〕〔文久元年〕二月	一通	六六ノ五・六
	久永源兵衛御書附〔庄松方出金返済方不行届〕小林庄松宛 享和三年九月	一通	五五
	〔御屋敷様勝手御入用金差上受書〕木嶋村名主与市 御陣屋役人中宛 寛政九年七月	一通	三〇
	西鹿田村金子受取手形〔間野谷借用金利足・御貸附金御用出府雜用〕西鹿田村名主松井儀左衛門 萩原俊藏宛 文化三年正月	一通	一九三
	小林庄松扶持米受取覚〔五人扶持〕萩原俊藏宛 文化一五年一二月二五日	一通	五九ノ二
	久永源兵衛〔勝信〕御書附覚〔当收納返済差留〕萩原俊藏他宛 丑一〇月二五日	一通	一四六
用状・御用状	丑上州・武州・野州年貢金勘定覚 丑十一月	一通	一四三ノ一
	久永源左衛門内松井儀右衛門松真木請取覚 平塚川岸間屋弥惣治宛 巳四月一九日	一通	一七九
	〔昼夜買切日雇代覚〕川瀬文右衛門 五月八日	一通	一八三
	久永源兵衛〔勝信〕		
	久永源兵衛用状〔大炊頭駿府御越・勝手方不足金手当〕俊藏宛〔享和二年〕一二月一六日	一通	一〇五
	久永源兵衛〆惣百姓へ申渡候書付〔勝手方困窮ニ付用金・先納金五ヶ年居置指示〕〔享和三年〕九月	一通	五四
	久永源兵衛用状〔留守中家来心得ケ条書〕俊藏他宛 正月晦日	一通	一〇五

久永源兵衛門用狀〔家来慰勞〕 萩原俊藏・川瀬文右衛門宛 四月二〇日

久永源兵衛門用狀 〔戸田采女正実母死去 九〕 (前欠) 七月三日

○久永源左衛門 (勝明)

久永源左衛門用狀 〔木嶋村受書差出・知行所御用金・小麦蒔付免許 六〕 俊藏・矢作宛 (文化二年) 八月六日

久永源左衛門用狀 〔庄松方古証文・入用金送方 六〕 俊藏宛 三月六日

久永源左衛門用狀 〔知行所早魃 三〕 俊藏宛 六月二三日

久永源左衛門用狀 〔俊藏御勝手御免願取扱〕 俊藏宛 八月六日

久永源左衛門用狀 〔広太郎縁組・家修復・根本村受免許容難致 一〇〕 (文政六年) 四月二七日

久永源左衛門用狀 〔常州弘米相場・皆濟・先納取扱 八〕 俊藏・要右衛門宛 (文政九年) 正月一六日

久永源左衛門用狀 〔山王祭礼〕 (文政九年) 五月二八日

久永源左衛門用狀 〔山王祭礼・常州番金・無尽 八〕 俊藏・要右衛門宛 (文政九年) 五月二八日

久永源左衛門用狀 〔家来永暇申付・江戸表騒々敷 五〕 俊藏・要右衛門宛 (文政九年) 六月三日

久永源左衛門用狀 〔家来永暇差留・田方仕付・西鹿田村百姓出訴 六〕 俊藏・要右衛門宛 (文政九年) 六月二四日

一通 一〇五ノ七

一通 一七ノ三

一通 一〇五ノ三

一通 一〇五ノ四

一通 一〇五ノ六

一通 一〇五ノ七

一通 一〇五ノ六

一通 一〇五ノ五

一通 一〇五ノ七

一通 一〇五ノ三

一通 一〇五ノ五

一通 一〇五ノ三

久永源左衛門用狀 〔金子受取・米価下落二付勝手始末六ヶ敷 一三〕 俊藏・要右衛門宛 (文政九年) 二月一五日

久永源左衛門用狀 〔長屋修復・無尽 一一〕 俊藏・要右衛門宛 (文政九年) 二月

久永源左衛門用狀 〔当暮入用三付先納 八〕 俊藏・要右衛門宛 (文政九年) 二月一〇日

久永源左衛門用狀 〔用人共新参〕 (後欠) 俊藏宛 (文政九年)

久永源左衛門用狀 〔女子縁組入用金・無尽 一五〕 俊藏・要右衛門宛 三月一五日

久永源左衛門用狀 〔当月入用金畑方取立・御知行所御用金皆納 七〕 俊藏・要右衛門宛 七月一〇日

久永源左衛門用狀 〔俊藏病氣見舞・田方水無之 六〕 萩原俊藏・要右衛門・谷長平宛 六月一四日

久永源左衛門用狀 〔婚儀臨時入用金・陣屋元帳面見七可申 六〕 俊藏・要右衛門宛 一〇月一五日

久永源左衛門用狀 〔陣屋出府・陣屋破損所修復 五〕 要右衛門宛 三月一三日

久永源左衛門用狀 〔御貸附金返納・知行所困米 一三〕 要右衛門宛 一〇月八日

久永源左衛門用狀 〔常州俵数相場・御郡代御貸附金皆納 七〕 萩原要右衛門宛 一〇月一七日

久永源左衛門用狀 〔金子請取・新畑山年貢困米松代金 一二〕 萩原要右衛門宛 二月一二日

久永源左衛門用狀 〔常州借返 五〕 二月二〇日

一通 一〇五ノ七

一通 一〇五ノ三

一通 一〇五ノ七

一通 一〇五ノ四

一通 一〇五ノ六

一通 一〇五ノ二

一通 一〇五ノ六

一通 一〇五ノ三

一通 一〇五ノ六

一通 一〇五ノ三

一通 一〇五ノ四

一通 一〇五ノ六

一通 一〇五ノ四

久永源左衛門用狀〔八月雜用金常州三ヶ村
差送 六〕八月一日

久永家来る萩原宛

一通 〇五ノ四

*長谷川要人・川瀬又右衛門・小宮沢右衛門
御用狀〔江戸定便取扱方〕萩原俊藏・赤石逸
平宛〔文化二年〕正月一八日

一通 〇五ノ六

*長谷川要人・川瀬又右衛門・小宮沢右衛門
御用狀〔飛脚心得〕萩原俊藏・赤石逸平宛
〔文化二年〕正月二五日

一通 二四

萩原俊藏・玉井武太夫・井上勘太夫御用狀
〔雜用金受取 五〕萩原要藏宛 六月八日

一通 〇五ノ六

石川仙右衛門御用狀〔雇入給金〕萩原矢作
宛〔文化二年〕三月五日

一通 〇五ノ六

赤石半藏・角田勝右衛門御用狀〔村方出入
三〕萩原俊藏宛〔文化七年〕八月二〇日

一通 〇五ノ四

赤石半藏御用狀〔常州田方請免仰付・江川
様と拝借人御呼出 一四〕萩原俊藏宛〔文
化一一年〕九月九日

一通 〇五ノ五

赤石半藏・清水三郎治御用狀〔大風雨江戸
大破〕萩原俊藏宛〔文化一三年〕閏八月七日

一通 〇五ノ四

長谷川要人御用狀〔阿見村新百姓取扱〕
萩原俊藏宛〔文化〕二〇日

一通 〇五ノ三

清水三郎治御用狀〔御臨時金御調達 五〕
萩原俊藏宛〔文政六年〕八月一日

一通 二五

清水三郎治御用狀〔御代官と国役金懸合・
駿府御貸附金 三〕萩原俊藏宛〔文政七年〕
五月一八日

一通 〇五ノ六

赤石半藏・清水三郎治御用狀〔名主重右衛
門地頭江不埒一件一〇〕萩原俊藏宛 二月一
六日

一通 〇五ノ三

赤石半藏御用狀〔御用金一件〕萩原俊藏宛
三月一二日

一通 〇五ノ三

赤石逸平御用狀〔駿府入用金 七〕萩原俊
藏・川瀬文右衛門宛 四月八日

一通 一〇五

赤石半藏・清水三郎治御用狀〔日光御法会
国役収納 六〕萩原俊藏宛〔文政一〇年〕
五月二三日

一通 〇五ノ六

清水三郎治御用狀〔鉄砲証文受取・臨時金
三〕萩原俊藏宛 四月二三日

一通 〇五ノ六

清水三郎治御用狀〔御勘定所仰渡 四〕
萩原俊藏宛 四月二五日

一通 〇五ノ六

清水三郎治御用狀〔御臨時入用金送金 七〕
萩原俊藏宛 五月一四日

一通 〇五ノ七

川瀬文右衛門御用狀〔野州田沼村一件・中
間給金送金依頼 三〕萩原俊藏宛 五月一四
日

一通 〇五ノ三

赤石逸平・川瀬文右衛門御用狀〔駿府町人
江返済金 六〕萩原俊藏宛 五月二五日

一通 〇五ノ六

赤石半藏・石川仙右衛門御用狀〔俊藏出勤
依頼〕萩原俊藏宛 五月二五日

一通 一〇五ノ一

清水三郎治御用狀〔勘定方工風二付出府依
頼〕萩原俊藏宛 六月一八日

一通 〇五ノ四

赤石半藏・石川仙右衛門御用狀〔大間々村
卜東小保方村百姓出入〕萩原俊藏宛 七月二日

一通 〇五ノ四

赤石半藏・清水三郎治御用狀〔桑原口入金
濟方〕萩原俊藏宛 閏八月九日

一通 〇五ノ二

赤石半藏御用狀〔御家督御礼勤方・常州検見
御仕廻 五〕萩原俊藏宛 九月二二日

一通 〇五ノ五

清水三郎治御用狀〔大目付と鉄砲改御達 四〕
萩原俊藏宛 一〇月二九日

一通 〇五ノ九

長谷川要人・川瀬文右衛門・小宮沢右衛門
御用狀〔金子受取・当秋田方立毛 五〕
萩原俊藏宛 一〇月三〇日

一通 〇五ノ六

赤石半藏御用状〔庄松方御借付金〕〔萩原俊藏宛〕二月三日
 赤石逸平・川瀬文右衛門・石川仙右衛門御用状〔松下内匠様納金落手 八〕萩原俊藏宛二月八日
 川瀬文右衛門御用状〔御臨時金送金依頼〕二月十五日
 長谷川要人御用状〔奥津鯛献上取調〕萩原俊藏宛二月一日
 赤石半藏御用状〔村田村早米納方・御家督御礼 七〕一〇月朔日
 清水三郎治御用状〔御郡代御役所懸合一件〕俊藏・要右衛門宛 一月八日
 井上義十郎御用状〔年始御祝詞・御勝手勤方〕萩原要右衛門宛 正月一日
 大野郡藏御用状〔薪積船未着 七〕萩原要右衛門宛 二月八日
 大野郡藏御用状〔薪到着不足 四〕萩原要右衛門宛 二月五日
 清水六郎右衛門御用状〔要右衛門出府慰勞〕萩原要右衛門宛 二月三日
 松藤啓太夫・内山録兵衛御用状〔入用・国役金 一〇〕萩原要右衛門・周助宛〔天保三年〕一〇月一日
 松藤啓太夫・清水六郎右衛門・井上義十郎御用状〔小保方村田方植付・西鹿田村郷御藏屋根替 一〇〕萩原要右衛門・周助宛〔天保四年〕六月三日
 松藤啓太夫・清水六郎右衛門・井上義十郎御用状〔入用金受取・家中心得・諸役仰付 一〇〕萩原要右衛門・周助宛〔天保四年〕八月三日

一通二五ノ二五
 一通二五ノ五九
 一通二五ノ八
 一通二五ノ一九
 一通二五ノ二五
 一通二五ノ四〇
 一通二五ノ四九
 一通二五ノ五三
 一通二五ノ五九
 一通二五ノ六三
 一通二五ノ六六
 一通二五ノ七〇

松藤啓太夫・清水六郎右衛門・井上義十郎御用状〔牛込御門御橋御普請・大風雨報知 一六〕萩原要右衛門・周助宛〔天保四年〕八月一日
 松藤啓太夫・清水六郎右衛門・井上義十郎御用状〔常州檢見濟 一〇〕萩原要右衛門・周助宛〔天保四年〕二月三日
 萩原俊藏・萩原要右衛門御用状〔女子縁組・無尽 一九〕松藤啓太夫・内山録兵衛宛 三月八日
 萩原要右衛門・萩原周助御用状 久永源左衛門勝明附札付〔田方毛見 六〕松藤啓太夫・内山録兵衛宛 一〇月二八日
 赤石半藏・角田勝右衛門・清水三郎次御用状〔組頭藤吉手鎖・被仰付 三〕萩原要司・下境佐吉宛 正月晦日
 某書狀〔御屋敷御目見〕〔後欠〕
 ○
 御用飛脚通 嶋屋佐右衛門 清水六郎右衛門宛 安政七年
 書狀
 赤石半藏書狀〔御前疑心之病 三〕萩原俊藏宛 七月二八日
 清水三郎治書狀〔若殿様御入用難儀〕萩原俊藏宛 八月一日
 弓好書狀〔御郡代御貸付金〕萩原雅君宛 五月二日
 富口忠兵衛書狀〔前欠〕萩原要右衛門宛 二月二〇日
 某書狀〔前欠〕萩原俊藏宛

一通二五ノ五
 一通二五ノ五四
 一通二五ノ五九
 一通二五ノ六三
 一通二五ノ六六
 一通二五ノ七〇
 一通二五ノ七四
 一通二五ノ七八
 一通二五ノ八二
 一通二五ノ八六
 一通二五ノ九〇
 一通二五ノ九四
 一通二五ノ九八
 一通二五ノ一〇二
 一通二五ノ一〇六
 一通二五ノ一〇九
 一通二五ノ一〇三
 一通二五ノ一〇七
 一通二五ノ一一一
 一通二五ノ一一五
 一通二五ノ一二〇
 一通二五ノ一二四
 一通二五ノ一二八
 一通二五ノ一三二
 一通二五ノ一三六
 一通二五ノ一四〇
 一通二五ノ一四四
 一通二五ノ一四八
 一通二五ノ一五二
 一通二五ノ一五六
 一通二五ノ一六〇
 一通二五ノ一六四
 一通二五ノ一六八
 一通二五ノ一七二
 一通二五ノ一七六
 一通二五ノ一八〇
 一通二五ノ一八四
 一通二五ノ一八八
 一通二五ノ一九二
 一通二五ノ一九六
 一通二五ノ二〇〇
 一通二五ノ二〇四
 一通二五ノ二〇八
 一通二五ノ二一二
 一通二五ノ二一六
 一通二五ノ二二〇
 一通二五ノ二二四
 一通二五ノ二二八
 一通二五ノ二三二
 一通二五ノ二三六
 一通二五ノ二四〇
 一通二五ノ二四四
 一通二五ノ二四八
 一通二五ノ二五二
 一通二五ノ二五六
 一通二五ノ二六〇
 一通二五ノ二六四
 一通二五ノ二六八
 一通二五ノ二七二
 一通二五ノ二七六
 一通二五ノ二八〇
 一通二五ノ二八四
 一通二五ノ二八八
 一通二五ノ二九二
 一通二五ノ二九六
 一通二五ノ三〇〇
 一通二五ノ三〇四
 一通二五ノ三〇八
 一通二五ノ三一二
 一通二五ノ三一六
 一通二五ノ三二〇
 一通二五ノ三二四
 一通二五ノ三二八
 一通二五ノ三三二
 一通二五ノ三三六
 一通二五ノ三四〇
 一通二五ノ三四四
 一通二五ノ三四八
 一通二五ノ三五二
 一通二五ノ三五六
 一通二五ノ三六〇
 一通二五ノ三六四
 一通二五ノ三六八
 一通二五ノ三七二
 一通二五ノ三七六
 一通二五ノ三八〇
 一通二五ノ三八四
 一通二五ノ三八八
 一通二五ノ三九二
 一通二五ノ三九六
 一通二五ノ四〇〇
 一通二五ノ四〇四
 一通二五ノ四〇八
 一通二五ノ四一二
 一通二五ノ四一六
 一通二五ノ四二〇
 一通二五ノ四二四
 一通二五ノ四二八
 一通二五ノ四三二
 一通二五ノ四三六
 一通二五ノ四四〇
 一通二五ノ四四四
 一通二五ノ四四八
 一通二五ノ四五二
 一通二五ノ四五六
 一通二五ノ四六〇
 一通二五ノ四六四
 一通二五ノ四六八
 一通二五ノ四七二
 一通二五ノ四七六
 一通二五ノ四八〇
 一通二五ノ四八四
 一通二五ノ四八八
 一通二五ノ四九二
 一通二五ノ四九六
 一通二五ノ五〇〇
 一通二五ノ五〇四
 一通二五ノ五〇八
 一通二五ノ五一二
 一通二五ノ五一六
 一通二五ノ五二〇
 一通二五ノ五二四
 一通二五ノ五二八
 一通二五ノ五三二
 一通二五ノ五三六
 一通二五ノ五四〇
 一通二五ノ五四四
 一通二五ノ五四八
 一通二五ノ五五二
 一通二五ノ五五六
 一通二五ノ五六〇
 一通二五ノ五六四
 一通二五ノ五六八
 一通二五ノ五七二
 一通二五ノ五七六
 一通二五ノ五八〇
 一通二五ノ五八四
 一通二五ノ五八八
 一通二五ノ五九二
 一通二五ノ五九六
 一通二五ノ六〇〇
 一通二五ノ六〇四
 一通二五ノ六〇八
 一通二五ノ六一二
 一通二五ノ六一六
 一通二五ノ六二〇
 一通二五ノ六二四
 一通二五ノ六二八
 一通二五ノ六三二
 一通二五ノ六三六
 一通二五ノ六四〇
 一通二五ノ六四四
 一通二五ノ六四八
 一通二五ノ六五二
 一通二五ノ六五六
 一通二五ノ六六〇
 一通二五ノ六六四
 一通二五ノ六六八
 一通二五ノ六七二
 一通二五ノ六七六
 一通二五ノ六八〇
 一通二五ノ六八四
 一通二五ノ六八八
 一通二五ノ六九二
 一通二五ノ六九六
 一通二五ノ七〇〇
 一通二五ノ七〇四
 一通二五ノ七〇八
 一通二五ノ七一二
 一通二五ノ七一六
 一通二五ノ七二〇
 一通二五ノ七二四
 一通二五ノ七二八
 一通二五ノ七三二
 一通二五ノ七三六
 一通二五ノ七四〇
 一通二五ノ七四四
 一通二五ノ七四八
 一通二五ノ七五二
 一通二五ノ七五六
 一通二五ノ七六〇
 一通二五ノ七六四
 一通二五ノ七六八
 一通二五ノ七七二
 一通二五ノ七七六
 一通二五ノ七八〇
 一通二五ノ七八四
 一通二五ノ七八八
 一通二五ノ七九二
 一通二五ノ七九六
 一通二五ノ八〇〇
 一通二五ノ八〇四
 一通二五ノ八〇八
 一通二五ノ八一二
 一通二五ノ八一六
 一通二五ノ八二〇
 一通二五ノ八二四
 一通二五ノ八二八
 一通二五ノ八三二
 一通二五ノ八三六
 一通二五ノ八四〇
 一通二五ノ八四四
 一通二五ノ八四八
 一通二五ノ八五二
 一通二五ノ八五六
 一通二五ノ八六〇
 一通二五ノ八六四
 一通二五ノ八六八
 一通二五ノ八七二
 一通二五ノ八七六
 一通二五ノ八八〇
 一通二五ノ八八四
 一通二五ノ八八八
 一通二五ノ八九二
 一通二五ノ八九六
 一通二五ノ九〇〇
 一通二五ノ九〇四
 一通二五ノ九〇八
 一通二五ノ九一二
 一通二五ノ九一六
 一通二五ノ九二〇
 一通二五ノ九二四
 一通二五ノ九二八
 一通二五ノ九三二
 一通二五ノ九三六
 一通二五ノ九四〇
 一通二五ノ九四四
 一通二五ノ九四八
 一通二五ノ九五二
 一通二五ノ九五六
 一通二五ノ九六〇
 一通二五ノ九六四
 一通二五ノ九六八
 一通二五ノ九七二
 一通二五ノ九七六
 一通二五ノ九八〇
 一通二五ノ九八四
 一通二五ノ九八八
 一通二五ノ九九二
 一通二五ノ九九六
 一通二五ノ一〇〇〇

年貢收納

検見

西鹿田村検地請狀 清水三郎次・萩原俊蔵・清水富三郎宛 寛政一〇年一〇月

新田郡西鹿田村儀右衛門駕籠訴狀 〔毛見場所惡敷作趣議訴一件〕 御奉行所宛

上州西岡新田百姓願書 〔年貢減免願〕 御陣屋宛 天保四年八月

上州・武州・野州御知行所村々取調帳控 御陣屋元 安政七年三月二十四日(一八九六)

〔台組田畑覚〕 台組名主 万延元年六月

三室上組名主幸吉奉差上候書付 〔御検見野帳等七冊受取〕 陣屋元役人宛 万延元年八月

御知行所御損毛覚 丑一一月

御知行所御損毛覚 丑一一月改之

廻状 〔田方植付二付〕 陣屋元 六月一七日

村田村百姓願書 〔夏成減免願〕 名主清五郎 萩原俊蔵宛 七月一九日

知行所村々畑方永覚

○

空地開発畝歩割付帳 萩原俊蔵・川瀬文右衛門・萩原矢作・高橋伴助 文化二年七月

年貢請狀

赤見村御年貢米御蔵入請書 松本李右衛門 萩原要蔵・清水富三郎宛 寛政九年一〇月一日

横長半

一通 一七〇

一通 一五四

一通 一六

一通 二

一通 二五

一通 一六

一通 二四ノ一

一通 二四ノ二

一通 二五ノ五

一通 二九

一通 二四ノ二

美

一通 一四

一通 一七ノ二

西鹿田村御上納米御蔵入請書 名主善右衛門 陣屋役人宛 寛政九年一〇月一三日

野州田沼村御米御蔵入請書 半左衛門 萩原要蔵・清水富次郎宛 寛政九年一〇月一七日

木嶋村当収納米御蔵入請書 名主与市 萩原要蔵・清水富次郎宛 寛政九年一〇月

西鹿田村年貢請狀 名主吉次郎他 清水三郎次・萩原俊蔵・清水富次郎宛 寛政九年一〇月一日

赤見村年貢請狀 名主与市右衛門他 萩原俊蔵・清水三郎次 文政四年一〇月

年貢納入

三室上組年貢上納覚 三室上組 陣屋宛 文化七年一二月一日

〔年貢上納覚〕 台組名主七郎平 陣屋宛 文化七年一二月一日

午田方御上納覚 小泉組名主丈右衛門 陣屋宛 文化七年一二月一六日

亥御年貢皆済目録帳 西岡新田 萩原俊蔵他 文化一三年正月

廻状 〔年貢納方〕 御陣屋役所 村々宛 文化元年五月五日

御水帳掛リ銭受取覚 三室下組名主代栄蔵 伊勢崎孫右衛門 〔天保五年〕一二月

〔年貢上納覚〕 八寸組名主齊次郎 陣屋宛 万延元年六月七日

〔年貢上納覚〕 小保方村平井組名主嘉七 陣屋宛 万延元年六月七日

〔年貢上納覚〕 台組名主七郎平 陣屋宛 万延元年六月七日

半

一通 一七ノ四

一通 一七ノ三

一通 一七ノ一

一通 一七ノ五

一通 一七ノ六

一通 一五ノ一

一通 一五ノ二

一通 一五ノ三

一通 一四

一通 二五ノ六

一通 二四ノ二

一通 一五ノ六

一通 一五ノ七

一通 一五ノ八

(年貢上納覺) 三室下組名主辰五郎 陣屋宛 万延元年六月	一通 一三五ノ九
(年貢上納覺) 小泉組名主彦右衛門 陣屋宛 万延元年十一月一六日	一通 一三五ノ二〇
(年貢上納覺) 三室組名主幸吉 陣屋宛 万延元年十一月二〇日	一通 一三五ノ四
(年貢上納覺) 平井組名主嘉七 陣屋宛 万延元年十一月二一日	一通 一三五ノ三
(年貢上納覺) 下野組名主文藏 陣屋宛 万延元年十一月二一日	一通 一三五ノ二
(年貢上納覺) 八寸組名主齊次郎 陣屋宛 万延元年十一月	一通 一三五ノ五
村田村・根本村願書 (凶作ニ付上納年延願) 御貸附方御役所 巳二月二三日	一通 一四〇
御村上リ 山御年貢受取覺 下野組名主友吉 戊二月	一通 一四四ノ三六
藏米請取	
(藏米壳渡内金受取覺) 久永源兵衛内萩原俊 藏・川瀬文右衛門 大間々高草木与四右衛門宛 文化二年十一月九日	一通 一四二
(藏米前金請取証文) 久永源左衛門奥書 小 保方村名主七右衛門他 大間々町高草木与四右 衛門宛 文化一三年二月	一通 一七五
(藏米受取算用覺) (藏米前渡・貸金利足他) 大間々高草木与四右衛門 萩原俊藏宛 寅一二 月	一通 一八〇
(藏米受取覺) 車屋茂八 小保方村名主嘉七 宛 亥一〇月二七日	一通 一八二ノ四
(藏米受取覺) 車屋茂八 小保方村大組名主 清藏宛 亥一〇月二七日	一通 一八二ノ二

(藏米受取覺) 車屋茂八 小保方村名主忠助 宛 亥一〇月二七日	一通 一八二ノ三
(藏米受取覺) 車屋茂八 名主忠助宛 亥一〇月二七日	一通 一八四ノ三
御藏米請取覺 大間々小川店 萩原宛 文政一〇年	一冊 三三
(藏米受取覺) 西鹿田村高橋忠藏 小保方村 萩原俊藏宛 寅一一月二九日	一通 一八二ノ一
上納金	
(御入用金上納請書) 木嶋村名主与市 陣屋宛 寛政九年七月	一通 一八六ノ一
(御屋敷御勝手向御入用金上納請書) 小保方村八組 陣屋宛 寛政九年七月	一通 一八六ノ二
上納金借用証文 台組名主七郎平他 萩原要 右衛門宛 天保七年十二月	一通 一八六ノ二
先納	
惣百姓へ申渡候書付 (知行所用金・先納五 ヶ年居置) (久永) 源兵衛 萩原俊藏宛 (享和三年) 九月	一通 一四四
(先納金借用証文) 新町組名主吉藏 萩原要 右衛門 天保三年四月六日	一通 一八六ノ一
先納金上納高荒増仕出写 東小保方村幸右衛 門・勘助 天保一一年四月	一冊 一五
(畑方先納金借用覺) 下野組名主儀平 萩原要右衛門宛 午三月四日	一通 一八五
村借	
西鹿田村借用証文 (地頭所勝手向要用) 名主安田伊平他 竹沢村忠兵衛宛 文政九年一 二月	一通 一七〇ノ一
西鹿田村借用証文 (地頭所勝手向要用) 名主伊右衛門他 連沼村齋藤伝吉宛 天保六年一二月	一通 一七〇ノ二

国役・夫役

国役

〔国役金請取覚〕〔江戸川橋修復〕大久保帶
刀内沢田安次他 久永源兵衛宛 寛政九年九月
七日

勘定所御書附 〔川普請国役金仰付〕 辰八月

〔浅間金取立覚〕 〔寅年―辰年〕

〔御書附〕 〔川普請国役金〕 巳八月

御勘定所御触書 〔利根川普請国役〕 巳九月

陣屋役所御触書 〔国役金収納〕 九月一五日

陣屋役所御触書 〔川々国役・諸料〕 七ヶ村
々宛 一〇月九日

国役廻状 〔関東筋諸川普請〕 御陣屋役所
小保方村他宛

〔御書付〕 〔役金仰付定〕

〔御書附〕 〔川普請国役金〕 〔前後欠〕

〔御書附〕 〔川普請・朝鮮人来聘国役〕

夫役

柑本兵五郎手附百瀬慎助・平岩右膳手附館
雄治郎書状 〔日光御参詣人馬役〕 久永源左
衛門用人中宛 〔文政七年〕五月

久永源左衛門内萩原要右衛門先触 〔人馬差
出〕 問屋名主中宛 寅一〇月朔日

久永源左衛門内萩原要右衛門先触 〔人馬差
出〕 問屋・名主中宛 卯九月一八日

久永源左衛門内松藤啓太夫先触 〔馬差出〕
卯一二月五日

赤見村組頭勝右衛門書状 〔人夫金送付〕
陣屋元清水周作・萩原要右衛門 未二月八日

久永源兵衛家来先触 〔継立人馬〕 小保方村
役人共 八月八日

地突奉納人足出人数覚 巳四月八日

困糶・夫食・頼母子

御困糶御願書 根本村名主幸右衛門 清水富
次郎宛 寛政八年一〇月

夫食金借用議定証文 〔不作三付借用〕 知行
所根本村名主・組頭他 三河屋万兵衛宛 天保
一〇年五月

〔頼母子料理代請取覚〕 伊勢崎西町錢屋良助
萩原要司宛 三月六日

公事・出入

百姓騒立一件

○阿見村一件

勘定奉行松平兵庫頭達書 〔常州村々騒立候
吟味〕 〔文化元年〕一二月

*〔源左衛門・内匠〕用状 〔常州阿見村河岸場
一件〕 〔後欠〕 源兵衛宛 四月二五日

*源左衛門・内匠用状 〔常州見分〕 源兵衛宛
五月五日

一通 一四ノ四

一通 一五

一通 一四ノ一

一通 一五

半

一冊 一三

一通 一四

一通 一六

一通 一五ノ三

一綴 三ノ五

一綴 三ノ四

*源左衛門・内匠用状 源兵衛宛 五月十五日	〔阿見村河岸場一件〕	一綴 三〇ノ四	用水	東小保方村役人訴訟願書 〔西小保方村相 手用水出入〕 東小保方村名主 奉行所宛 文政 三年五月	一通 一七六
*久永源兵衛〔勝信〕書状 〔河岸場取斗〕 久永源左衛門〔勝明〕宛 七月一日	〔河岸場一件〕	一通 二六ノ二		東小保方村惣代郡藏濟口差上証文 〔西小保 方村相手用水出入〕 評定所宛 文政五年二月	一通 一七〇ノ一
*久永源兵衛書状写 〔河岸場一件〕 石川左近將監〔勘定奉行〕宛 七月一日	〔勘定奉行〕宛 七月一日	一通 二六ノ一		東小保方村・西小保方村用水絵図	一鋪 一七〇ノ二
*源左衛門・内匠用状 〔常州河岸場取扱一件〕 〔後欠〕 源兵衛宛 七月二十九日	〔常州河岸場取扱一件〕	一綴 三〇ノ七	相続・離縁	百姓清左衛門願書 〔忠次郎相手跡式相続〕 陳屋宛 寛政一二年八月	一通 二六ノイ
*源兵衛用状 〔常州河岸場取扱一件〕 源左衛 門・内匠宛 八月二十六日	源左衛門・内匠宛	一綴 三〇ノ五		百姓忠次郎願書 〔跡式相続〕 陳屋宛 寛政一二年八月	一通 二六ノロ
*源兵衛用状 〔常州取計方〕 源左衛門・内匠 宛 八月六日	源左衛門・内匠宛	一綴 三〇ノ四		百姓傳左衛門願書 〔老衰病身ニ付跡式相続 マデ発心仕度〕 陳屋宛 寛政一二年八月	一通 一七六
*勘定奉行石川左近將監書状 〔常州知行所懸 合之儀決着〕 久永源兵衛宛 一〇月九日	〔常州知行所懸 合之儀決着〕	一通 三〇		木嶋村利右衛門等濟口証文 〔増利平田満ニ 離縁〕 陳屋役人宛 享和元年一〇月	一通 一三〇
*勘定奉行石川左近將監書状 〔常州百姓共騒 立〕 久永源兵衛宛 一〇月二十九日	〔常州百姓共騒 立〕	一通 三二		西鹿田村藤吉訴訟願書 〔上刈名村馬口労働 助相手縁談不履行〕 酒井与八郎役所宛 文政五年一二月	一通 一五二
*久永源兵衛家来栢植良助伺書 〔加助郷ニ付 百姓騒立一件〕 一〇月二十九日	〔加助郷ニ付 百姓騒立一件〕	一通 一五ノ二	酒小売・船問屋・店借	小保方村新町組酒小売主幸吉願書 〔酒小売 休仰渡〕 陳屋宛 文化一〇年四月	一通 一七二
*源左衛門・内匠用状 〔阿見村一件〕 源兵衛 宛 一二月四日	〔阿見村一件〕	一綴 三〇ノ三		手塚村舟問屋名主弥惣次代幸七返答書 〔川岸場出入一件訴訟〕 御評定所宛 文政九年七月一日	二通 一五三 ノ・二
*源左衛門・内匠用状 〔常州阿見村一件〕 源兵衛宛 一二月十五日	〔常州阿見村一件〕	一綴 三〇ノ六		西鹿田村百姓店借出入一件廻状 亥五月	一通 一八〇ノ一
源兵衛用状 〔阿見村一件〕 一二月二〇日	〔阿見村一件〕	一綴 三〇ノ五		1 久永源兵衛家来井上郡太夫申渡書	一通 一八〇ノ一
村騒動控帳 新田郡阿さ美村役人惣代組頭伴 助 万延二年二月	新田郡阿さ美村役人惣代組頭伴 助	一冊 一六		2 御陳屋元役人廻状 名主中宛 亥五月二 八日	一通 一八〇ノ二

久永源兵衛家来井上郡太夫申渡書〔西鹿田村百姓藤次郎母いと江戸池田屋利右衛門出入一件〕 亥五月

一通 二七

○質地・貸借

西久保村清右衛門濟口差上証文〔貸金出入〕 奉行所宛 天明二年三月

一通 二六

新町組甚左衛門・平蔵口書〔貸金催促之際切懸手疵為負〕 陣屋役人宛 寛政一〇年九月

一通 二六

東小保方村平蔵訴訟願書〔貸金出入傷害一件〕 陣屋役人宛 寛政一〇年九月〔一六四〕

一通 二六

田沼村長右衛門濟口差上証文〔質地出入〕 評定所宛 寛政一二年一月二五日

一通 二六

本町村又兵衛濟口差上証文〔貸金出入〕 久永源左衛門役所宛 文化一五年三月二九日

一通 二六

上州山田郡大間々村傳蔵訴訟願書〔貸金出入〕 久永源左衛門役人宛 文政五年四月

一通 二六

貸借出入一件覚 新蔵 弥惣次宛 四月一五日

一通 二六

堀込町四丁目三郎兵衛訴訟願書〔貸金出入〕 奉行所宛

一通 二六

百姓御咎

木嶋村百姓常七口書〔長脇差着用吟味〕 陣屋役人宛 寛政一一年八月二九日

一通 二六

木嶋村百姓常七口書〔長脇差着用被見咎被召捕〕 陣屋役人宛 寛政一一年九月一〇日

一通 二六

小保方新町組勘太夫親類組合村役人願書〔御咎百姓病氣療養仕度〕 陣屋役人宛 文化七年四月

一通 二六

西鹿田村嘉七組合源太郎他願書〔嘉七百姓無情手鎖被仰付〕 小保方陣屋役人宛 文政五年三月

一通 二六

寄合久永源左衛門届書〔儀右衛門并訴状引渡〕 一〇月晦日

一通 二六

○盜難

西鹿田村名主善右衛門訴状〔盜賊一件〕 陣屋役人宛 寛政一二年一〇月一日

一通 二六

西鹿田村名主善右衛門差上申一札并上州利根郡木原村村役人請取一札〔盜賊被入紛失物〕 地頭所役人宛 寛政一二年一月

一通 二六

小保方御陣屋役所御触〔火之番盜賊博奕等自身番申付・野火除ケ刈申付〕 村八組宛 一二月二日

一通 二六

○口論

上州新田郡普塩村百姓善左衛門出入一件控〔長岡村百姓手疵為負出入〕 天明二年二月二八日

半 一冊 二七

西鹿田村平右衛門訴訟願書〔武井村次郎八相手狼籍出入〕 奉行所宛 寛政一〇年一〇月

一通 二六

三室上組願人七太夫相手善平出入一件願書・返答書写

二六

1 三室上組七太夫願書〔善平店ニテ乱暴〕 陣屋宛 寛政一二年九月

一通

2 善平返答書 陣屋宛 寛政一二年九月二二日

一通

小保方村秀五郎代惣右衛門訴訟願書〔百姓口論出入〕 伊勢崎役所宛 文政五年八月

一通 二六

八寸村秀五郎下百姓村藤右衛門為取替濟口証文〔百姓口論出入〕 文政五年九月

一通 二六

訴訟

間野谷村吉五郎他奉行所仰渡請書 寛政一二年二月二七日

一通 二六

西鹿田村村役人訴訟願書〔百姓訴訟陣屋ニテ御取上被下度〕名主織右衛門 陣屋宛
文化七年五月一八日 一通 一五〇

西鹿田村政吉願書〔奉行所へ出訴ニ付添書被差下度〕陣屋宛〔文政九年〕二月一九日 一通 一五六

扱人上田村年寄幾右衛門差上申日延一札〔訴訟呼出農事差障〕西小保方新井惣七宛
元治元年五月 一通 一七三

出奔人

陣屋役所御触書〔出奔人尋〕七ヶ村々宛
寛政一二年八月一日 一通 二五ノ四

〔出奔百姓御尋ニ付村々返答書〕文化一二年五月一六月 一九通 一五六

小泉組平六願書〔悴不埒行方不知ニ付除帳願〕陣屋宛 文化一二年八月 一通 一七四

寺院

龍善寺願書 妙教房 寛政一二年八月 一冊 二〇

小保方村村役人・龍善寺口上書〔竜善寺焼失再建ニ付用立金被返下度〕陣屋宛 午一〇月一三日 一通 一九三

○

高橋伴助判鏡 萩原要藏・弥作宛 寛政一二年三月二八日 一通 九三

仲間峯八通行手形 萩原要右衛門 中仙道宿々村々問屋・名主中宛 文政一二年三月三日 一通 一六六

御陣屋廻状 寅二月 一通 二五ノ七

萩原家

勤方

久永家御役・扶持・高

○要藏

久永家家来書附〔中小姓被仰付〕萩原要藏宛〔寛政三年〕七月 一通 五九ノ八

久永家家来書附〔近習格・六両二人扶持仰付〕萩原要藏宛〔寛政六年〕三月 一通 五九ノ一

○俊藏

久永氏御書附〔役高加増〕萩原俊藏宛 巳二月 一通 五九ノ七

久永源兵衛御書附〔徒士・足輕取立〕萩原俊藏宛 六月一三日 一通 五九

○要司

給人申付御書附 萩原要司宛 文政四年三月 一通 五九ノ三

○要右衛門

久永氏御書付〔古俊藏骨折ニ付母江男扶持老入〕萩原要右衛門宛 文政一二年四月一六日 一通 五九ノ五

久永氏御書附〔陣屋元蔵米三〇俵〕萩原要右衛門宛 文政一二年四月一七日 一通 五九ノ四

男扶持老入分差遣覚 萩原要右衛門 文政一二年四月一八日 一通 五九ノ五

久永氏御書附〔役高加増〕 萩原要右衛門
天保六年九月一二日

一通 五九ノ六

萩原俊藏御請書〔御出勤御入用取斗方決定〕
赤石半藏他宛 七月一四日

一通 一五ノ七

戸田家

道中并浦賀在勤中日記 戸田伊豆守内萩原要
右衛門 嘉永四年

一冊 三

御奉行様御代々控 浦賀奉行所ニテ写ス
萩原要右衛門 嘉永六年五月一八日

一冊 二四

下田御用所七輪送り状 二月

一通 六

年貢諸役

〔役掛錢覺〕 新五右衛門宛 亥一二月七日

一通 三四

〔御飯米金覺〕 新五右衛門宛

一通 三三

〔夫金代参掛り受取覺〕 名主奎左衛門
萩原要右衛門 (天保五年) 二月

一通 一四ノ四

午春夫錢受取覺〔御前様分・萩昌院様分〕
新町組名主喜多右衛門 萩原要右衛門宛
(天保五年) 二月七日

一通 一四ノ五

先納金受取覺 三室上組市左衛門 萩原要右
衛門宛 (天保五年) 三月

一通 一四ノ二

先納金請取覺 小泉村名主權右衛門 萩原要
右衛門宛 天保五年五月七日

一通 一四ノ七

畑方御年貢受取覺 新町組名主喜多右衛門
萩原要右衛門宛 (天保五年) 六月六日

一通 一四ノ六

畑方御年貢受取覺 新町組名主喜多右衛門
萩原俊藏宛 (天保五年) 六月六日

一通 一四ノ九

畑方御年貢銀受取覺 三室下組名主団藏
萩原要右衛門宛 天保五年六月七日

一通 一四ノ一

畑方御年貢請取覺 小泉組名主權右衛門
萩原要右衛門宛 (天保五年) 七月

一通 一四ノ二

国役掛り請取覺〔要右衛門分・御隠居分〕
名主榮八 萩原要宛右衛門宛 (天保五年) 一
〇月

一通 一四ノ三

年貢受取覺〔御前様分・御隠居様分・清藏分〕
新町名主喜多右衛門 萩原要右衛門宛 (天保五
年) 一〇月

一通 一四ノ八

年貢請取覺 下野組名主和三郎 萩原要右衛
門宛 (天保五年) 一〇月

一通 一四ノ四

年貢・先納元利歸り皆済覺 八寸組名主市
太夫 萩原要右衛門宛 (天保五年) 一二月一
〇日

一通 一四ノ二

御水帳掛り錢受取覺 三室下組名主代榮藏
萩原要右衛門宛 (天保五年) 一二月

一通 一四ノ三

年貢受取覺 三室上組名主榮藏 蓮沼太仲宛
(弘化四年) 六月

一通 一四ノ六

〔受取覺〕 新町組名主吉太郎 萩原要右衛門
宛 弘化四年一〇月七日

一通 一四ノ五

年貢受取覺〔俊藏様分〕 新町組名主吉太郎
萩原要右衛門宛 弘化四年一〇月

一通 一四ノ六

年貢請取覺〔孫市分〕 新町組名主吉太郎
萩原要右衛門宛 弘化四年一〇月

一通 一四ノ七

国役金受取覺 三室上組名主榮藏 台組萩原
要右衛門宛 (弘化四年) 一〇月

一通 一四ノ九

国役・堀掛り共受取覺 下組名主和三郎
萩原要右衛門宛 (弘化四年) 一〇月

一通 一四ノ三

年貢請取覺 名主榮八 萩原要右衛門宛 (弘
化四年) 一〇月

一通 一四ノ三

国役金受取覚〔孫市分・要右衛門分・母貞分〕
新町組名主吉太郎 萩原要右衛門宛（弘化四年）
一〇月

一通 一六四ノ三

国役金請取覚〔御内分・萩昌院様分・長谷川分〕
台組名主栄八 萩原要右衛門宛（弘化四年）
一二月五日

一通 一六四ノ三

春夫銭請取覚〔萩昌院分・長谷川分〕 名主栄八
萩原要右衛門宛（弘化四年） 二月九日

一通 一六四ノ三

年貢冬夫共受取覚 新町組名主吉太郎
萩原富三郎宛

一通 一六四ノ七

田畑・居屋敷・山林

畑質地書入証文 田部井村弥右衛門 弥惣次宛
宝曆二年四月一三日

一通 一三ノ一

畑質地書入証文 田部井村伊太夫 弥惣次宛
宝曆九年一月

一通 一三ノ二

畑質地書入証文 田部井村伊太夫 弥惣次宛
明和元年八月

一通 一三

（畑質地讓証文） 弥惣次 新蔵宛 安永六年三月

三通 二九

（質地御年貢勘定無之一札） 伊太夫
東小保方村新蔵宛 天明二年五月

一通 一三五

畑壳渡証文 すま 西小保方村男八宛
文化七年一〇月

一通 一三ノ一

質地田畑壳渡証文 おすま 萩原要次郎宛
文化八年六月

一通 一三ノ二

小作扣証文 重次郎 要次郎宛 文化八年一月

一通 一七三

田畑壳渡証文 萩原弥惣次 文化一〇年二月

一通 一三ノ三

田畑質地書入証文 下野組佐次右衛門
文政四年七月

一通 一三ノ四

居屋敷壳渡証文 小泉組与市 文政四年二月

一通 一三ノ三

居宅代金受取証文 小泉組伝七 萩原要右衛門宛
文政二年三月

一通 二四

畑壳渡シ証文 新助 清蔵宛 文政二年九月

一通 二〇

奉公人

一季奉公人請狀 萩原要司宛 文政三年二月

一通 一三ノ二

年季奉公人請狀 萩原要司宛 文政三年二月

一通 一三ノ三

質物年季奉公人請狀 受人台組富蔵 萩原要右衛門宛
文政一年三月

一通 一三ノ四

一季奉公人請狀〔通奉公〕 受人台組金蔵
萩原富三郎宛 弘化五年二月一五日

一通 一三ノ五

一季奉公人請狀〔通奉公〕 受人台組七郎
萩原富三郎 弘化五年二月一五日

一通 一三ノ六

一季奉公人請狀 受人中村市右衛門
萩原富三郎宛 嘉永四年二月一五日

一通 一三ノ七

○

身之代金証文 下の組半蔵 萩原要右衛門宛
文政二年二月

一通 一三ノ一

身之代金証文 下の組周蔵 萩原要右衛門宛
天保二年二月四日

一通 一三ノ二

身之代金証文 下の組周蔵 萩原要右衛門宛
天保三年二月二四日

一通 一三ノ三

身之代金証文 下野組多右衛門 萩原要右衛門宛
天保四年二月二八日

一通 一三ノ四

身之代金証文 大間々角左衛門 萩原要右衛門宛 天保六年二月二十六日

(身之代覺書) 末一二月

書狀・風聞

萩原俊藏書狀 「庄松方返済金 四」 萩原要藏宛 「寛政二年」 一月二十六日

(萩原) 俊藏書狀 「父上御役義御免御願 三」 父上(要藏)宛 四月七日

萩原俊藏書狀 「女子行え不知一件 四」 萩原要司宛 九月二十六日

○ 長谷川藤次郎書狀 「土蔵普請入用金・真綿買取値段 七」 萩原要司宛 「文政二年」 九月二十六日

長谷川藤次郎書狀 「蓮沼伝吉立替金子返済依頼 六」 兄上(萩原要右衛門)宛 「弘化元年」 二月二十六日

御役替書附 「幕閣」 弘化二年五月十一日

某書狀 「アメリカカ舟渡来風聞」 (嘉永六年六月一日)

(長谷川) 藤次郎書狀 「慎徳院逝去御遺物報知」 (嘉永六年) 九月一日

長谷川藤次郎書狀 「異国船渡来江戸表風聞」 兄上(萩原要右衛門)宛 「安政元年」 正月二十五日

長谷川藤次郎書狀 「萩昌院二十七回忌・幕府御役替 五」 兄上(萩原要右衛門)宛 「安政元年」 五月一日

長谷川藤次郎書狀 「家作 一一」 兄上(萩原要右衛門)宛 「安政元年」 九月二十五日

一通二四ノ五

一通二四ノ六

一通二五ノ七

一通二五ノ七

一通二五ノ七

一通二五ノ八

一通二五ノ六

一通二六ノ三

一通二七ノ二

一通二七

一通二五ノ三

一通二五ノ八

一通二五ノ八

(長谷川藤次郎) 書狀 (安政元年九月)
長谷川藤次郎書狀 「蚕養様子・江戸風聞 一二」 兄上(萩原要右衛門)宛 「安政二年」 七月一日

長谷川藤次郎書狀 「久能山御宮三州大樹寺普請御用相済 一三」 兄上(萩原要右衛門)宛 「安政二年」 九月二〇日

御役替書付 「幕閣」 (前欠) (文久二年) 閏八月二十八日

御役替書付 「幕閣」 (文久二年) 十一月

井上義十郎書狀 「幕閣役替報知」 (後欠) 萩原要右衛門宛 「文久二年」

清水八十五郎書狀 「幕閣役替報知」 萩原要右衛門宛 「文久三年」 正月二日

長谷川藤次郎書狀 「義父取仕舞金借用 三」 萩原俊藏宛 六月一日

長谷川藤次郎書狀 「送金受取り 一四」 萩原要司宛 六月二五日

弥惣次書狀 「弥惣次田畑売払 四」 (萩原) 俊藏宛 七月一日

遠藤書狀 「御有代御札 五」 萩原宛 七月二七日

長谷川藤次郎書狀 「女子縁付 三」 萩原要司宛 九月一日

長谷川藤次郎書狀 「周助不始末一件・預ケ金取斗一件 二三」 兄上(萩原要右衛門)宛 九月二六日

長谷川藤次郎書狀 「大守様江心願一件・上州表御林売渡 四」 兄上(萩原要右衛門)宛 一〇月二日

一通一七ノ四

一通二五ノ七

一通二五ノ七

一通二六ノ五

一通二六ノ一

一通二五ノ六

一通二六ノ二

一通二五ノ八

一通二五ノ八

一通二五ノ九

一通二五ノ二

一通二五ノ七

一通二五ノ六

一通二五ノ七

長谷川藤次郎書狀〔家普請金送金手達 一六〕兄上〔萩原要右衛門〕宛 一〇月二日 一通 〇五ノ八六

長谷川藤次郎書狀〔家普請金送金手達 三〕兄上〔萩原要右衛門〕宛 一〇月三日 一通 〇五ノ九

長谷川藤次郎書狀〔家普請金送金手達 一三〕兄上〔萩原要右衛門〕宛 一〇月一〇日 一通 〇五ノ八五

長谷川藤次郎書狀〔隱居宅壳弘 一五〕兄上〔萩原要右衛門〕宛 一〇月五日 一通 〇五ノ八七

同役名順 与力 長谷川藤次郎 一通 六三ノ四

○年賀・見舞狀

清水八十五郎正吉書狀〔年頭御祝儀〕萩原要右衛門宛 正月二日 一通 五七ノ五

清水八十五郎書狀〔年頭御祝詞〕萩原要右衛門宛 正月二日 一通 五七ノ二七

後藤勇五郎・後藤勇藏書狀〔年始御祝詞〕萩原要司・萩原運藏宛 正月二日 一通 五七ノ六

山口吉兵衛書狀〔年始御祝〕萩原俊藏宛 正月二日 一通 五七ノ三

齊藤授津正書狀〔御祈禱・修行〕萩原俊藏宛 正月二日 一通 五七ノ四〇

角田勝右衛門・清水三郎治書狀〔年始御祝詞〕萩原俊藏宛 正月三日 一通 五七ノ二九

〔佐原池年書狀〕〔年始御祝詞〕萩原要右衛門 正月六日 一通 五七ノ二

川瀬文右衛門書狀〔年始御祝詞〕萩原要藏宛 正月七日 一通 五七ノ三

長谷川藤次郎書狀〔年始御祝詞〕萩原要右衛門宛 正月七日 一通 五七ノ三

松井主一郎書狀〔年賀〕萩原俊藏・萩原要伺郎宛 正月七日 一通 五七ノ六

清水六郎右衛門書狀〔年始御祝詞〕萩原要右衛門・萩原周助宛 正月九日 一通 五七ノ七

赤石半藏・角田勝右衛門・清水三郎治書狀〔年頭御祝詞〕萩原要司宛 正月一日 一通 五七ノ一四

赤石半藏・角田勝右衛門・清水三郎治書狀〔年始御祝詞〕萩原俊藏宛 正月一日 一通 五七ノ一五

赤石半藏・角田勝右衛門・清水三郎治書狀〔年頭御祝詞〕萩原俊藏宛 正月一日 一通 五七ノ一六

中島角五郎書狀〔年頭御祝詞〕萩原俊藏宛 正月一日 一通 五七ノ三五

小磯治兵衛書狀〔年始御祝詞〕萩原俊藏・要右衛門宛 正月一日 一通 五七ノ二九

松井友右衛門政晴書狀〔年始御祝詞〕萩原要右衛門宛 正月一日 一通 五七ノ四

井上義十郎正路・角田小平太忠義・角田釘之助政允・井之上陸之助正治書狀〔年始御祝詞〕萩原要右衛門宛 正月一日 一通 五七ノ六

清水磯右衛門・松崎〔啓〕藏書狀〔年始御祝詞〕萩原要右衛門 正月一日 一通 五七ノ一〇

赤石半藏・角田勝右衛門書狀〔年始御祝儀呈書差上報知〕萩原俊藏宛 正月一日 一通 五七ノ三

清水三郎治・角田勝右衛門書狀〔年始御祝詞〕萩原俊藏・萩原要司宛 正月一日 一通 五七ノ二四

清水三郎治・角田勝右衛門書狀〔年始御祝詞〕萩原俊藏宛 正月一日 一通 五七ノ三一

小山小太郎書狀〔年始御祝詞〕萩原俊藏宛 正月一日 一通 五七ノ三四

松井儀右衛門・松井主一郎書狀〔年頭御祝詞〕萩原俊藏・萩原要右衛門・萩原周助宛 正月一日 一通 五七ノ三七

角田銀藏書狀 〔年始御祝詞〕 萩原要右衛門宛 正月一七日	一通 五七ノ四三	佐藤忠克書狀 〔歲暮御礼〕 萩原俊藏・赤石逸平宛 二月二七日	一通 五七ノ三〇
萩原俊藏・玉井武太夫・井上郡太夫書狀 〔年始御祝詞〕 萩原要藏宛 正月二二日	一通 五七ノ三六	齊藤讚岐盛歲書狀 〔新米供等報知〕 萩原俊藏宛	一通 五七ノ二三
赤石半藏・角田勝右衛門・清水三郎治書狀 〔年頭御祝詞〕 萩原要右衛門 正月	一通 五七ノ二	赤石免平・川瀬文右衛門・石川儀右衛門書狀 萩原俊藏宛	一通 五七ノ三六
谷長平書狀 〔年始御祝詞〕 萩原俊藏・萩原要司宛 正月	一通 五七ノ九	某書狀	一通 五七ノ三六
清水三郎治峯寧書狀 〔暑中見舞〕 萩原俊藏宛 六月七日	一通 五七ノ八	某書狀 〔年頭御壽〕	一通 五七ノ三六
小磯治兵衛書狀 〔新役加増御礼〕 萩原俊藏宛 六月二九日	一通 五七ノ二三	○	
小磯治兵衛書狀 〔新役加増御礼〕 萩原要右衛門宛 六月二九日	一通 五七ノ二六	赤見村名主与一右衛門他書狀 〔不埒百姓追立〕 萩原要右衛門・周助宛 未五月一四日	一通 五七ノ九
飯原芳藏書狀 〔暑中御見舞〕 萩原要右衛門宛 七月朔日	一通 五七ノ三三	中嶋文内書狀 〔年賦金受取 二〕 萩原俊藏宛 戊三月六日	一通 五七ノ一〇
中山長順書狀 〔中元御礼〕 源兵衛様用人中 七月一四日	一通 五七ノ三七	谷長平書狀 〔無宿殺害人取扱〕 萩原要右衛門・周輔宛 五月	一通 五七ノ九二
長谷川要人・川瀬文右衛門・小宮沢右衛門書狀 〔上様御機嫌伺〕 萩原俊藏・赤石逸平 八月二〇日	一通 五七ノ一	久永屋敷之内勘藏書狀 〔借金依頼〕 萩原俊藏宛 七月一四日	一通 五七ノ四二
太田勇藏書狀 〔御婚禮御款〕 萩原要司宛 九月一五日	一通 五七ノ三〇	川岸町武之助書狀 〔餅菓子・水油御用〕 萩原要司宛 十一月六日	一通 五七ノ六九
角田勝右衛門・次永西藏・小保繁右衛門書狀 〔男子御誕生御祝〕 萩原俊藏・赤石逸平宅 十一月二〇日	一通 五七ノ三五	赤見村名主与一右衛門書狀 〔未進奉公人差戻し〕 萩原要右衛門・周助宛 十一月二七日	一通 五七ノ二九
駿府日野屋久右衛門書狀 〔寒中御機嫌窺〕 赤石逸平・萩原俊藏宛 十二月二七日	一通 五七ノ三	谷長平書狀 〔米売捌方二付相場報告〕 萩原要右衛門・周輔宛 十一月二七日	一通 五七ノ九三
齊藤授津書狀 〔寒中見舞〕 萩原要右衛門宛 十二月七日	一通 五七ノ四二	○御申渡・風聞・書附類	
		若君様御元服御官位一件 〔家慶元服〕 〔寛政九年〕	一冊 一
		御稽古所新規建仕様書 文政一年九月	一冊 八

文政七申年上州高崎宿ニ而御召取相成候伏見宮御家来今并殿其外一味之者共御裁許書 文政八年六月一九日	美	一冊	三	板倉周防守様々御達衣服変革等御書付 (文久二年) 閏八月	一冊	六
播磨国兵庫高田屋一件覚〔異国江積送りニ付 關所御改〕(天保四年) 二月一五日		一通	七	老中松平豊前守御書附〔松平春嶽政事總裁 職仰付〕(文久二年)	一通	六
酒井雅楽頭家来庄野慈右衛門屈書写〔酒 井雅楽守家中仇討打果〕(天保六年カ) 七月一 四日		一通	五十四	(大名貸附覚) 丑寅正月	一通	六
御大禮御用参向衆御日取御規式 天保八年 九月	美半半	一冊	元	御社参之節御行列書	一冊	七
(大目付申渡書写)〔松平下野守浜田藩竹島 事件ニ付永蟄居〕松平下野守(康定) 宛 (天保八年) 二月二日		一通	五十一	幕閣列名	一通	二三
(西丸炎上御普請ニ付松平内匠頭其外江御書 附) (天保九年) 三月一六日		一通	三	○		
(諸大名并旗本献上金品書付覚)〔江戸城西 丸宮作費〕(天保九年)		一通	一六	伊勢参宮吉凶説 下強戸邑 岡部辰五郎写 慶応四年一月	一冊	九
(捨得真字金ニ付申渡書写) 天保一五年三月 二九日		一通	五ノ三	諸芸		
御申渡写〔斎昭隱居申渡〕水戸中納言(斎 昭) 天保一五年五月六日		一通	五ノ三	猿つくし	一冊	三
老中御申渡書写〔忠邦蟄居・家督他仰付〕 水野越前守(忠邦)・堀大和守宛 弘化二年九 月二日		一通	五ノ二	道能記 天明四年二月一四日萩原銀藏写之 都のにしき譜	一冊	三
審書取調所規則覚書	半	一冊	六	白鶴書状〔扇揮毫出来〕小川宛 二月一 六日	一通	二
講武所規則覚書 安政三年	半	一冊	七	明治		
諸申渡書写〔安政三年幕閣御役御免大名隠居〕 (文久二年) 八月		一通	五ノ五	御用留 第九区三小区新田郡久宮村用掛 明治六年六月一九月	一冊	三
(御政事向並士風取締ニ付諸役人へ御書付) 文久二年五月二二日		一通	七	亥石代外諸費割合取立帳 新田郡北金井村役 人 明治九年三月	一冊	三
				(学業優秀ニ付賞状) 郡役所 俊藏二女萩原 きく宛 明治一六年一〇月一五日	一通	二
				その他		
				(寺社方御仕置例書・公事方御定書ニ添候 例書)	一冊	四

久永松五郎知行所東小保方村弥惣次代兼同
人弟新藏願書〔新藏兄代人ニ出頭仕度〕
天明二年三月

(貸付金算用覚)

位牌料金覚 万屋兵助

雜

忌服御聞合書 久永源左衛門

美

一通 一六

一通 一四ノ三

一通 三一

六通 二三

一冊 三五

播磨国
屋形

旗本池田家文書目録解題

文書の伝来

本文書は、昭和四十三年に池田佐与氏（現住所〓神奈川県茅ヶ崎市東海岸南四ノ一ノ二六）より当史料館が譲渡を受けたものである。

佐与氏の家は、播磨国神東郡屋形村外九カ村三千石を領知した旗本池田家の後裔にあたられる。本文書は岡山市の同家の蔵に伝存されたが、今次大戦後にその一部を散佚したという。（昭和二十九年現住所へ転居）。

本文書は、時代は近世後期に限られ比較的少量ではあるが、外様大名分知系三千石級旗本の支配関係文書を主体としている。なお、譲渡のさい、若干の系譜類などが池田家に留保された。

池田家について

池田家は、池田輝澄の七男政済まさなりを祖とする知行高三千石の旗本であり、その知行所は代々播磨国に所在した。

播磨国姫路藩主池田輝政（五十二万石）の四男輝澄は、元和元年六月同国安栗郡に三万八千石（山崎城主）、寛永八年八月同国佐用郡に加増三万石をうけ、都合六万八千石を領知したが、同十七年七月家中の騒動事件のため改易となり、因幡国鳥取藩主池田光仲に御預、領内の鹿野に籠居、勘忍分一万石を給知され、寛文二年四月同地に歿した。

同年九月輝澄の四男政直が遺領を継ぎ、一万石を播磨国神崎・印南両郡内に宛行われ、翌三年十一月神崎郡の福本に居館を定めた。同五年十二月政直歿し、嗣子なきため翌六年三月遺領一万石のうち神崎・印南両郡内七千石を弟政武（輝澄五男）に、神崎郡内三千石を次々弟政済（輝澄七男）に分知された。政武は交代寄合に列し、福本の居館に住み、政済は寄合に入り、江戸居住となった。ここにおいて、大名分知の変型としての幕臣の旗本両家が成立したことになる。かくして、政済は政済系旗本池田家の祖となったのであるが、同家は寛文六年三月初代政済から代を重ねて第十一代政樹にいたり、版籍奉還となるのである。

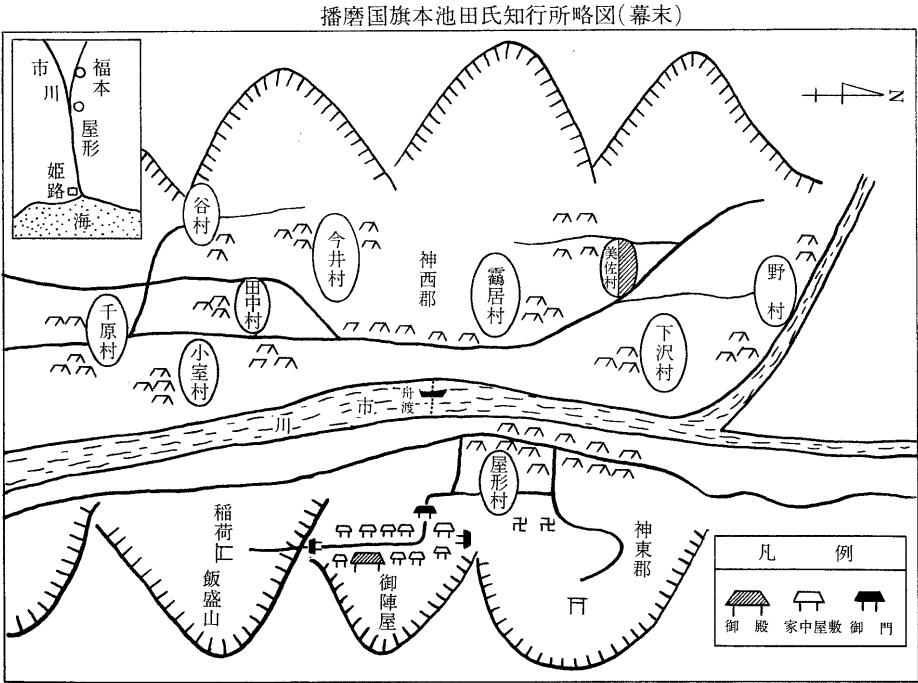
その知行所は、現在の姫路市の北方、市川の上流両岸地帯、つまり東岸に屋形村（神東郡内）、西岸に小室村など九カ村（神西郡内）が分布しており、その陣屋は屋形村に置かれた。これら領内十カ村三千石の支配は、この屋形陣屋を拠点として、代官（在役・用人）と地方役人によっておこなわれた。領内各村には庄屋・年寄・組頭・百姓代などの村役人がおかれ、陣屋元の屋形村には大庄屋がおかれた。

江戸屋敷に常住した旗本池田家の歴代領主（地頭）は、いずれも非役である「寄合」に属することが多かったが、その間、小姓を勤仕した第二代政因を除いては、御使番ないし火事場見廻を勤仕した者が多い。官位は第二代政因の従五位下伊豆守叙任の外は、布衣免許がみられる程度である。明治初年には朝臣となり士大夫を称され、ついで士族に編籍された。江戸屋敷は本所―麴町三丁目―永田町―小川町―表四番町などと転移している。

旗本池田家の家臣団は家老・用人・給人―中小姓（平士）―徒士―足輕・小人（仲間）という格式役順をもち、江戸詰、在所詰の諸役を勤仕したが、本文書所収の「池田家法」の「御意之趣相認覚」が参照されよう。

次に、旗本池田家の略系図（「先祖書」、「家系」、「池田家統集」、「新訂寛政重修諸家譜」に掲げる）、領主（地頭）一覧表（同上）、知行所略図（幕末期「播磨国旗本池田氏知行所略図」、慶応二年「御在所御家中繪図」に掲げる）、知行

所村高表（天保四年「播磨国神東郡神西郡之内郷村高帳」に掲げる）を掲げて、一応の参考に供する。

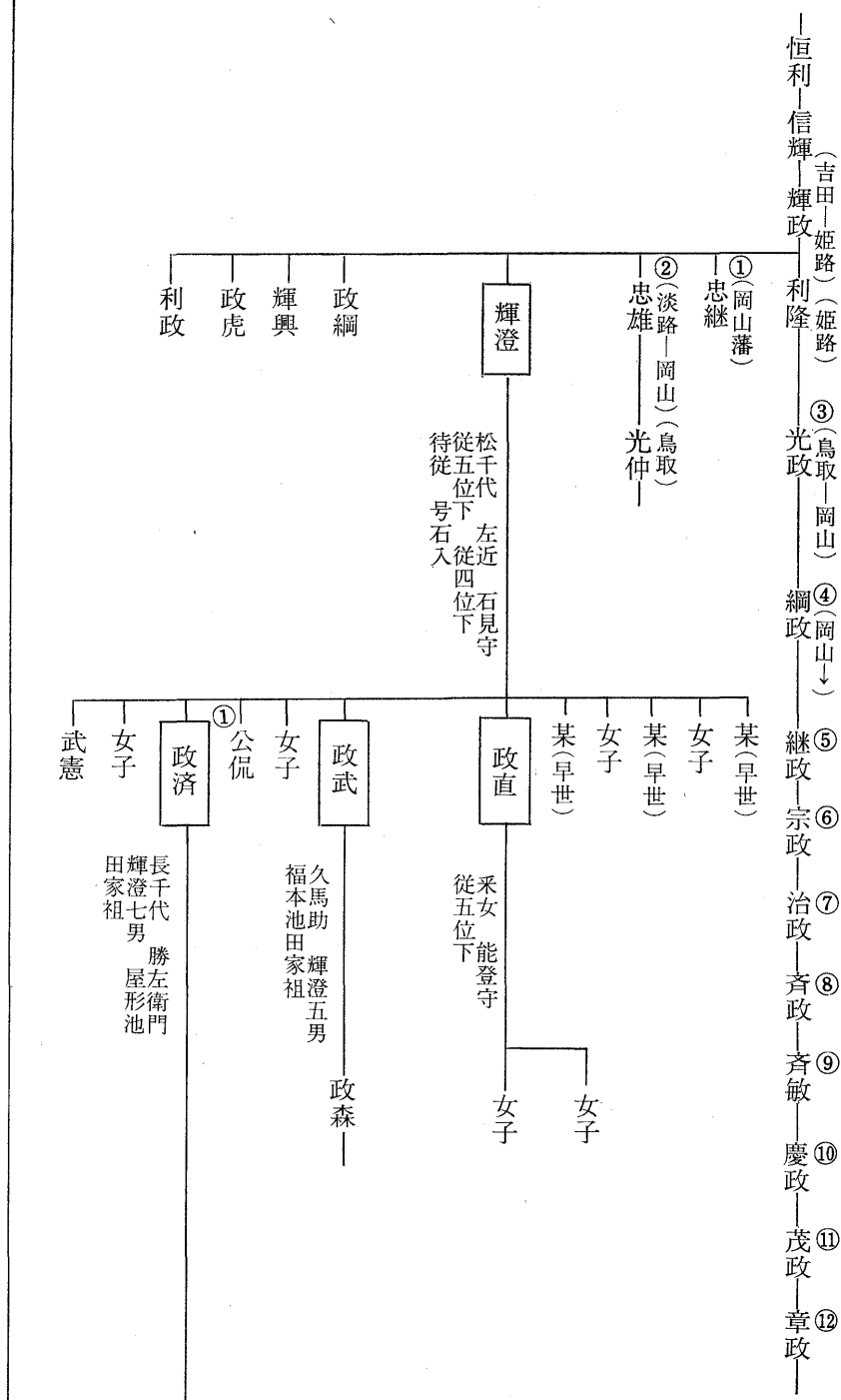


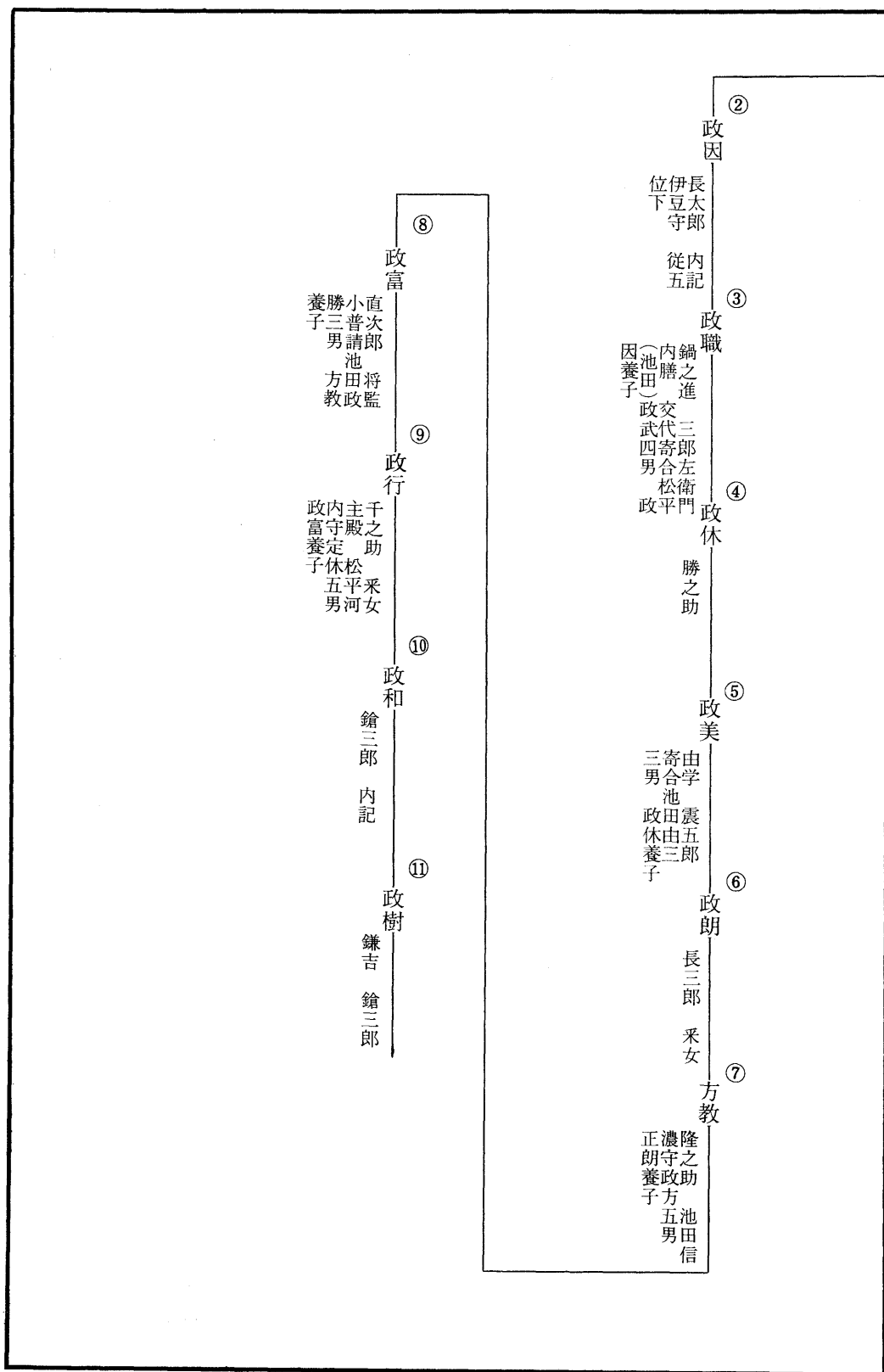
旗本池田氏知行所村高 (天保 4 年)

郡	村 名	本 田	古 新 田	改 新 田	計	(有高)	林
神東郡	屋形村	438.053	18.046	0.69649	456.79549	424.01649	4
神西郡	小室村	241.011	7.449	—	248.460	240.933	0
	千原村	242.127	5.958	0.627	248.712	233.1567	1
	谷村	569.771	8.021	0.181	578.973	571.406	5
	田中村	143.415	8.067	—	151.482	135.072	0
	今井村	267.018	40.988	—	308.006	307.2655	1
	霧居村	355.047	140.046	0.227	495.320	483.3548	2
	下沢村	571.639	6.160	0.277	578.076	555.68443	1
	美佐村	32.367	2.642	—	35.009	33.893	0
野村	野村	139.552	3.522	0.721	143.795	111.8565	1
	計	石 3,000.000	石 240.899	石 2.72949	石 3,243.62849	石 3,094.63842	所 15

(注) 美佐村は松平彈正領分 (441石461) と相給。

〔池田氏略系図〕





播磨国屋形旗本池田家領主（地頭）一覽

歴代	領主（地頭）名	続柄	在任期間	幕府勤仕	官位	知行高	江戸屋敷地
1	政済 勝左衛門	池田輝澄 七男	寛文六年三月 元禄十年十一月	寛文六年三月兄政直遺領の内播磨国三千石分知、 寄合、御目見、元禄十年十二月歿		三千石 （播磨国）	本所 ↓麴町三丁目
2	政因 伊豆守	政済惣領	元禄十年十二月 宝永二年閏四月	元禄五年御目見、同十年十二月遺跡継、寄合、同 十三年小姓、同十五年從五位下伊豆守叙任、宝永 二年閏四月歿	從五位下 伊豆守	同	↓麴町三丁目 （桜田）
3	政職 内膳	養子、池田 政武四男	宝永二年七月 享保十七年七月	宝永二年養子、同年七月遺跡継、寄合、御目見、 享保十七年七月歿		同	↓永田町
4	政休 勝之助	政職惣領	享保十七年十月 寛保一年十月	享保十七年十月遺跡継、寄合、（病氣御目見欠）、 寛保一年十月歿		同	同
5	政美 震五郎	養子、池田 由道三男	寛保一年十二月 宝曆六年九月	元文一年養子、同四年御目見、寛保一年十二月遺 跡継、寄合、延享三年火事場見廻、宝曆四年御使 番、布衣、同六年九月歿	（布衣）	同	同
6	政朗 采女	政美惣領	宝曆六年閏十一月 天明二年四月	宝曆六年閏十一月遺跡継、寄合、同十二年御目見、 安永八年火事場見廻、天明二年四月歿		同	同
7	方教 隆之助	養子、池田 政方五男	天明二年七月 宝政三年九月	天明二年養子、同七月遺跡継、寄合、同八年御目 見、寛政三年九月歿		同	同
8	政富 将監	養子、池田 政勝三男	寛政三年十二月 文化四年七月	養子入、安政三年十二遺跡継、寄合、御目見、文 化四年七月隠居、同九年八月歿		同	同

11		10	9
弟池田銀吉名代(寛) 弟池田栄吉名代	政樹	政和	政行
	鎗三郎	内記	主殿
	政和二男	政行惣領	養子、松平 定休五男
	安政六年三月 明治二年十月	文政二年五月 安政六年三月	文化四年七月 文政二年三月
同 同年十二月禄米百二十石下賜、土族、同三年在所 屋形陣屋住居、生野県貫属、同四年家臣一統岡山 藩へ復籍		安政六年三月家督繼、寄合、文久一年御目見、同 三年御使番、元治一年常州變動見廻役、慶応一年 將軍家茂大坂進發御供、同二年十二月退役 明治一年五月朝臣、本領安堵、下大夫席、在所屋 形帰邑、本家池田備前守付属、同二年版籍奉還、 同年三月西京移住、同年十月病歿	文化一年八月養子、同二年御目見、同四年七月家 督繼、寄合、同七年火事場見廻、同十年寄合肝煎 同十四年免、文政二年三月歿
〔土族〕		〔布衣〕	
	同	同	同
	同	↓小川町 ↓表四番町	同

文書の配列と概要

本文書の配列は、領知、法令、池田家、勤仕、知行所支配の五大項目に分け、それぞれのなかをさらに適宜の項目別に配列してある。

『領知』 知行所とその支配関係の基本的史料である知行所絵図、郷村高帳、知行所人数帳、郡村仮名附帳を一括して、一応『領知』の項目名を附した。後掲『知行所支配』の項目の初出部分と重出関係にある。

「知行所絵図」では幕末期の知行所鳥瞰図と慶応二年の陣屋・在所家中屋敷絵図があり、さらに幕末期の在所家中屋敷絵図の各人別精細図が一〇鋪ある。これらの絵図によって、旗本池田氏知行所関係の概貌を知ることができる。ただし、江戸屋敷絵図ないし江戸家中屋敷絵図はこれを欠いている。後掲「池田家法」のなかの「御意之趣相認覚」に江戸家中長屋に関する規定がみえる。

「御村高帳」、「知行所人数帳」は知行所の村高と人口の実態を知りうる史料である。「郷村高帳」には「有高」記載がみえる。「郡村仮名附帳」は享和三年池田将監より幕府勘定所宛の書上帳である。

『法令』 旗本池田家法、幕府触書、明治布告を『法令』の項目で一括した。

「池田家法」は旗本家法としては出色の史料として注目されるものである。すなわち、「政美公御条目」・「被仰渡書」は主として家臣団の勤仕奉公に関するもの、「御意之趣相認覚」は主として家臣団の恩給保護に関するもので、特に後者はすぐれた異色の史料である。「御政道書」は領内村々への触書類である。ただし、公事方関係の家法はこれを欠いている。

『池田家』 旗本池田家に関する系譜、同族系譜、相続、縁組、御目見・献上・拝領、家禄、諸家書状、諸家宛書状、屋敷普請、御道具、葬祭、信仰、寺社を一括して『池田家』とした。

「系譜」は屋形池田家の系譜を示すものであるが、このうち明治四年当主池田鎗三郎書上の「先祖書」が最も整ったもので基本史料とな

る。これに「家系」、「系図写」などが補助的役割を果たす。「同族系譜」のなかでは「池田家統集」(七冊)が池田家の本家・分業にわたる最も整ったものである。

「相続」では跡目願、病氣先養子願、急智養子願、智養子願があり、「縁組」では婚姻届、縁組願、親類書、遠類書がある。「御目見」では病氣に付御目見延期願、「家禄」では明治初年の家禄伺書、家禄請取書、家禄渡留、家禄奉還留などがある。なお、「相続」については「池田家法」のうちの「御意之趣相認覚」に相続規定がみえる。「献上」は八朔御太刀献上、「拝領」は亥猪御祝頂戴がある程度である。

諸家よりの池田家当主宛書状を「諸家書状」とし、当主よりの諸家宛書状を「諸家宛書状」として一括した。前者の差出人は在所代官・地方役人ないし大名方である。後者は河原信可ら宛の年頭祝詞程度のものである。

「屋敷普請」では江戸屋敷修復関係の注文仕法帳、諸入用請払勘定帳、諸職人等勘定請取書などがある。「御道具」では刀、衣類、書籍類があり、「信仰」では仏教、神道関係の由来書、経文、祝詞、行儀修法、護符、洗来、神道幣切形などがある。

『勤 仕』 この項は旗本池田氏の対幕府勤仕関係史料を一括したもので、そのなかを勤役、武術調練、寄合組、御用状、御役金に分類した。

「勤役」は池田氏の対幕府勤役に關する史料で、火事場見廻、火口番、御門番関係の勤方記、心得留、註進状案、註進状留などをはじめ、甲府巡見記・駿府巡見記、さらに大坂御進発御供関係などの文書がある。

「武術調練」では講武所関係の武術調練、野試合などの文書がある。「寄合組」では、池田氏が歴代にわたり非役の「寄合」に属することが多く、寄合肝煎を勤めたこともあるので、寄合一紙証文などの関係文書がある。

「御用状」では池田氏宛の御用召状、火事場見廻辞令、御門番辞令などがある。御使番池田内記宛の御城江出仕令状などもみえる。

「御役金」は小普請金請取書(池田氏宛)、旗本寄合役金に付達、同免除関係文書があり注目される。

『知行所支配』 この項は旗本池田氏の知行所支配関係文書を収録した。すなわち、前掲『領知』と重出関係にある知行所絵図、郷村高帳、知行所人数帳、郡村仮名附帳をはじめ、陣屋役所関係の代官達、御用留、日記、御用状、人別関係の宗門改、財政関係の收納請払、公

儀御貸附金、その他である。

「陣屋」は明治初年の陣屋内不用建物取調帳だけであり、その構造の詳細を知りえないが、陣屋Ⅱ御殿の見取図的なものは上掲「知行所絵図」にみえる。

「代官達」は在役代官から領分村々名主・年寄宛に出されたもので、領内百姓の村方払、追放、人柄善悪之者申出、若者寄合酒取締、家中昇格などに関する達である。「在所御用留」は慶応年間の御用書、廻状留、旅中日記留などを収録。

「在役所日記」は寛政十二年より明治四年にいたる間の十カ年分の知行所御役所（御用場、御用所）日記である。記載内容は特に精密ではないが、知行所の代官・地方役人の領内支配の実態、領村民ないし江戸役所・領主（地頭）との諸関係などが記録されており貴重な史料である。「在所御用状」は主として江戸の家老、用人、役人らから知行所の代官、地方役人宛に出された書状類であり、前記の「日記」とともに重要である。

「宗門改」では「宗門御改人別覚」がある。領内十カ村の宗門改の総人数部分を村別に記したもので、「大庄屋」扱いで、役人宛に報告している。宗門改帳などはこれを欠いている。別掲の「知行所人数帳」が参照されよう。

「収納請払」は知行所の年貢収納ないし請払勘定などを主としたものである。このうち、明治二年「五ケ年平均一ケ年収納高取調帳」、「高反別取米帳」と弘化四年「御領分御下ケ札帳」は領内十カ村の年貢収納関係の基本史料であり、旗本知行所収納の実態を一応知りうる。また「御元方請払勘定帳」は安政三年は五月分、同四年は正月分のそれぞれ一カ月分のものであるが、旗本財政の一端をうかがうに足る史料である。なお、「御用物請取書」に「飾万津港御蔵元中嶋源蔵」がみえる。

「公儀御貸附金」は文政五年と天保十四年の両年度に旗本寄合池田氏が近隣所在の天領生野代官所の御貸附方役所宛に出した公儀御貸附金の拝借証文である。そのために、領内千原村の年貢分を引当としており、同村では御貸附金に対する「村方引請証文」と「引当村方収納高書付」を御貸附方役所宛に差出している。ただし、文政三年の拝借証文もあるが、村方引当証文が欠けている。

「酒造米」には知行所下沢村・谷村両村の酒造家二人分の天保八年「播磨国酒造米高帳」と「酒造書上帳」とがあるが、前者は酒造米高を寄合池田氏から幕府御勘所宛に差出したものであり、後者はこの両酒造家からそれぞれ酒造米高を在所役人宛に差出したものである。

「助郷免除願」は慶応二年池田氏知行所七カ村役人から在所地方役人ないし御奉行所宛に出した明石駅助郷免除願関係文書である。「土

地出入絵図」は質地一件、田地開添一件などの関係絵図である。

〔付 記〕

本文書の整理および目録の作成・編集には鈴木寿が当った。作成・編集に当っては、多くの関係者の方々から御教示、御協力を得た。記して深甚の謝意を表する。

三河国 深溝村 八田家文書目録解題

文書の伝来と特色

文書の伝来

本文書は、昭和一〇年前後に、八田家の所蔵であつたものが同家の手を離れたものと推定され、その後、書店等を経由して、昭和二三年度に当館の所蔵に帰したものである。

本文書には、八田家個有の史料と推定されるものも含まれているが、その大部分は、もともと、八田家が旗本板倉氏の知行所である深溝陣屋の地役人として作成あるいは保管して来た史料で、これが筆頭地役人八田家に襲蔵されて来たものと推定される。なお、八田家の嫡系は、東京都世田谷区南烏山五—三〇—一二 八田篤子氏であり、明治以降に建築された現地の旧宅は無住のままである。

また、本文書中には、領主板倉家作成・襲蔵にかかるものと推定される史料が数点、含まれているが、この事情はいまわからない。板倉家の嫡系の方は、東京都杉並区阿佐谷南一—一四—一八 板倉利七氏である。

板倉家と支配所

旗本板倉家は、同苗重昌の二男で寛文中、老中を勤めた重矩の弟重直が、寛永一六年（一六三九）六月、山城国綴喜郡、三河国額田・幡豆郡および下総国葛飾郡において五千石を分知された時をもって興り、重直は、御側衆から御書院番頭を勤め、寛文四年（一六六四）六月、下総国葛飾郡において三千石を加増されて都合八千石を知行するに至った。ついで重行のとき、元禄十一年（一六九八）六月、下総国葛飾郡の采地を、常陸国新治郡、下野国河内・都賀郡、下総国海上・匝瑳郡に移され、この知行所構成が、ほぼこの状態で幕末まで続いて行く。幕末期の同氏の知行所構成を示せば、次のとおりである。

幕末期旗本板倉氏知行所の構成（下総国以下は『旧高旧領取調帳』による。）

（三河国）

額田郡深溝村*	（現、愛知県額田郡幸田町）	一、六四〇・三四四四
幡豆郡江原村	（現、愛知県西尾市）	一、一〇五・五七三一
駒場村	（" "）	五二九・六九一〇

岡嶋村

(")

四一〇・四一一〇

(山城国)

綴喜郡奈嶋村

(城、京都府
陽市)

三三六・一三四〇

(下総国)

海上郡高田村

三八六・九〇九九七

芦崎村

三一六・五〇二四〇

辺田村

〇・七八九〇

匝瑳郡高野村

二一三・六三五四

(常陸国)

新治郡小幡村

一、六一六・一九三〇

下林村

三四三・七一五四

上大堤村

一四・八五〇〇

(下野国)

都賀郡上田村

七三二・三〇六〇

下石川村

三一三・六一九二

柴村

五二二・九二一〇

中宿村

一七五・五一四〇

半田村

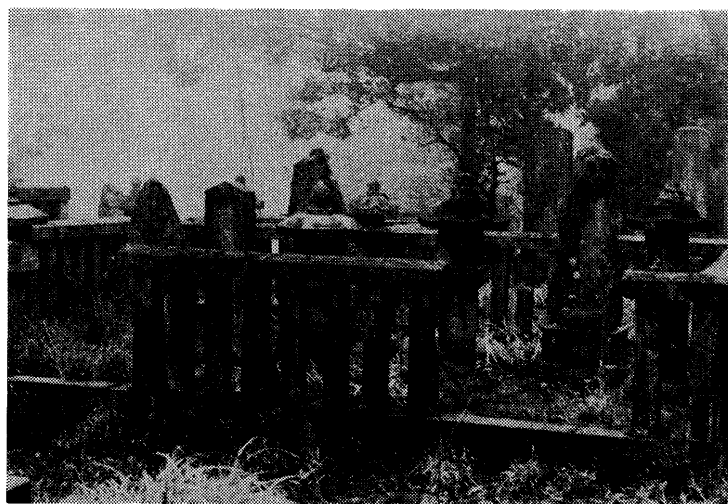
二二九・七八三九

河内郡上三川村

五一五・七七〇〇

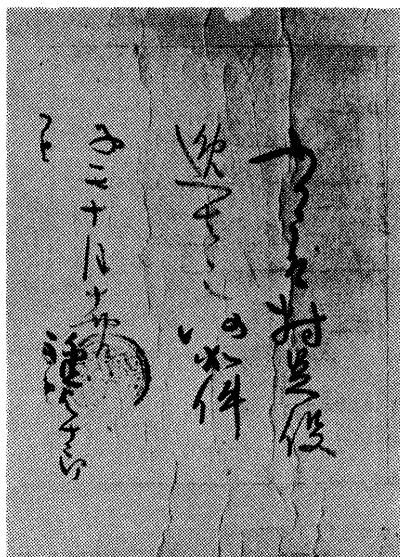
(*) 市場、里、海谷の三組に分かれ、それぞれ、肝煎が置かれた。

但し、右の合計八千石はもちろん拝領高であり、幕末期の事実と推定される史料334の2には、「拝領高八千石 一、知行高九千七百貳石 貳斗三升八合七勺四才 但込高小物成改出新田共 火消役板倉左近」とあって、この内訳は、三河・山城両国合計四、三四〇石九三九八(内

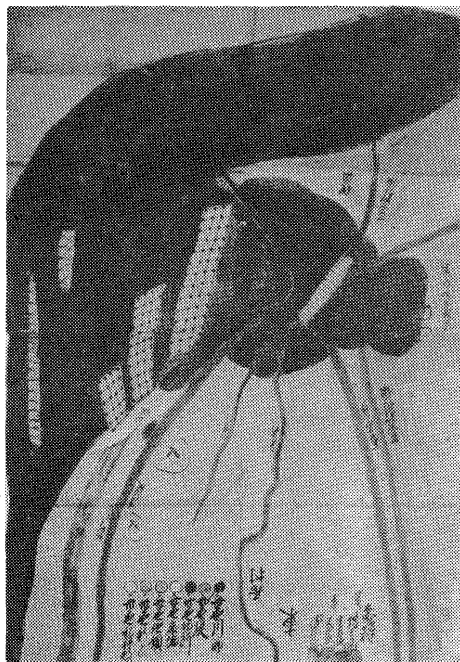


板倉家墓所(西尾市 長円寺境内)

徳川家康足役免許状（幸田町 池野茂次氏蔵）



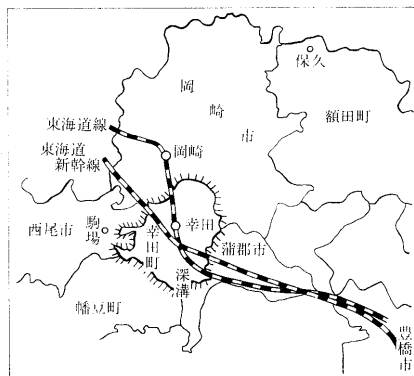
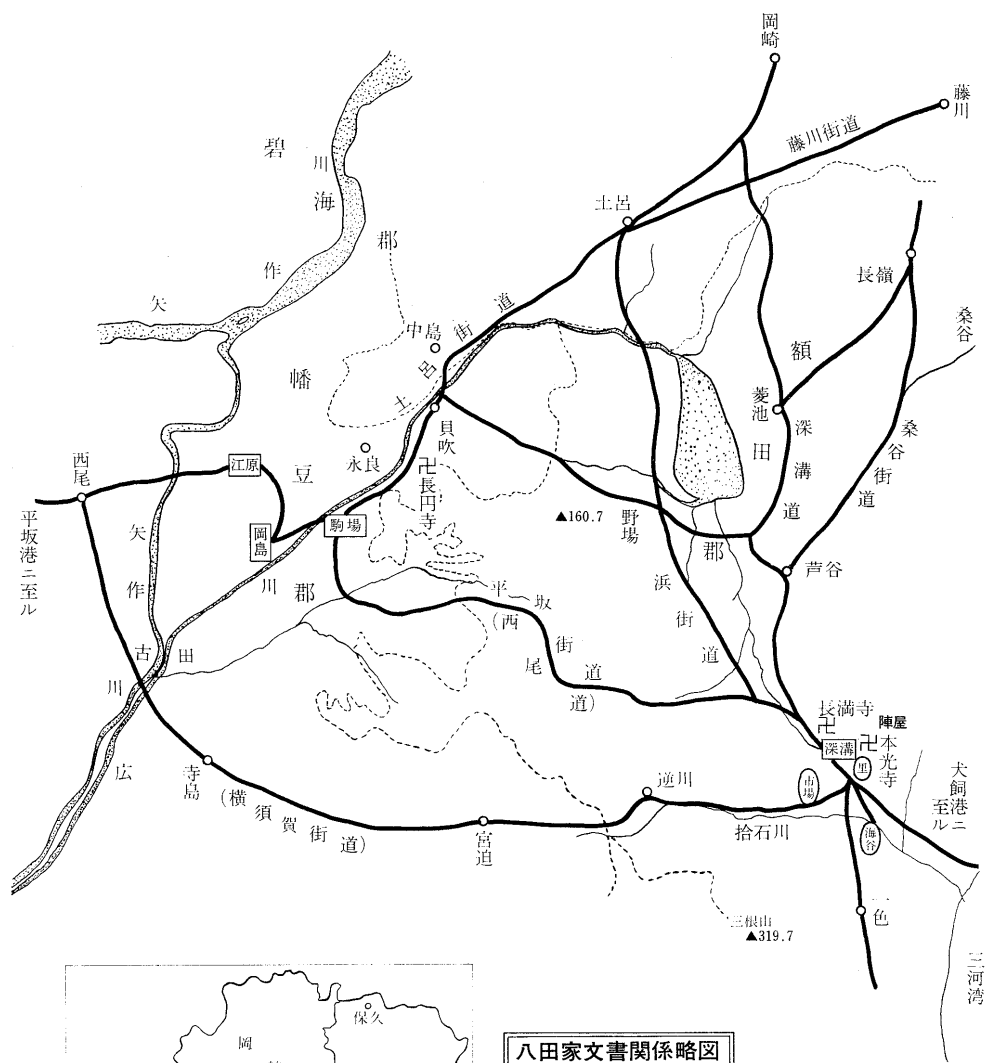
奈嶋村絵図（八田家文書 四四〇）



奈嶋村四〇三石五三二九、下総・常陸・下野三国合計五、三六一石二九八九四（内小物成高二三石三四三九、改出新田高四石一六六六）とな
っており、込高は右の小物成高を含めて一、六九八石〇七二〇八となる。

本文書は、このうち、三河国四カ村と山城国一カ村を支配した深溝陣屋に関する史料を中心とするものである。なお、元禄一四年「諸国
郷帳之内 三河国」（一冊。当館所蔵）によれば、深溝村は、長福寺・本光寺・三光院および天王社、江原村は妙喜寺・神明社、駒場村は
東向寺領のそれぞれ朱印地を含み（岡嶋村は一給）、奈嶋村は、元禄一三年「郷帳之内 山城国」によれば、板倉領のほか、天領が含まれ
ている。参考として板倉家略系図と関係略図を付した。

なお、前記史料334の2によれば、幕末期における板倉家の江戸屋敷は、本郷於茶水に御役屋敷が、浅草福富町二丁目に本屋敷がある
が、陣屋は三河国深溝一カ所のみであり、関東村々は陣屋支配がなされなかつたものとも思われるものの、現段階では推定の域を出ない
（後述）。ここに、ついでながら、江戸屋敷役方の組織と規模を知る参考として、別表を掲げる。



八田家文書関係略図

〔板倉氏略系図〕

1.

甚太郎
板倉重昌二男、筑後守、御側衆
重直
（元和六―貞享元・五・二六）
寛永六・五・一五分知
貞享元・二・一〇 隠居
隱居号 安身
閑幽院安身源祥

2.

正吉・主税
高木主水正正盛三男、筑後守、大番頭
重行
（寛文八・四・二二―享保九・四・一七）
天和三・二・二二 家督
天良院通山源達

3.

重元、勝友、甚太郎、帶刀
重行惣領、筑後守 西城御書院番頭
勝音
（元禄三・二・二一―延享四・六・一四）
享保九・五・二五 家督
長得院柏巖源隆
正恒（高木主永正正陳方養子）

4.

帶刀
勝音惣領
勝香
（享保一四・一・二九―宝暦八・五・二二）
延享四・九・四 家督
宝暦五・四・一〇 隠居
大鏡院智善源周

5. 勝延 久五郎、主税
勝音四男、定火消

(元文三・二・二五—安永元・二・二二)
宝曆五・一〇 家督
透玄院関翁源雄

6. 勝喜、甚太郎、主税
勝延惣領

勝官 (明和五・六・一六—文化四・二・一一)
安永二・三・七 家督
梅溪院香山源麁

7.

勝昇 筑後守
板倉勝政三男、火消役

(寛政九・二・二—天保一・二・二四)
文化四・一二・二六 家督
大溪院雄峯源仙

勝陳 安政七・三・一五
甚太郎 寄合より中川番

(—万延元・七・二九)
洞嶽院龍山源雲

勝寿 右金吾

(—明治三・一〇・二七)
齡祥院勝安源寿

勝運 慶応元閏五・一五
場見廻 寄合より寄合火事
小次郎

(—明治一三・八・一五)
神性院天祚院源運

勝行

ちま

利七

凡例

- 一、当主右肩の数字は便宜上の代数、—は実子、||は養子を示す。
- 二、アラビア数字は便宜上の代数を示す。
- 三、名乗右下は、続柄、官職名、通称、幼名等を、左下は、左へ順に(生年—没年)家督、隠居等年代、法号を示す。
- 四、本系図は「寛政重修諸家譜」、「柳営補任」、板倉家所蔵「板倉系図」、長円寺「過去帳」等によって作成した。

板倉家江戸家敷詰家中の構成 (嘉永四年「要用秘鑑」。史料3.による)

高130石	御家老	伊藤良左衛門
60石	年寄席入	生形文治
80石	御用人大目付	鳥山保衛
9石2人扶持	御用人奥支役	林和兵衛
9石2.5人扶持	御用人 ^(?)	野沢貫一
10石2人扶持	大目付御家老御知行 支配御用人席	伊藤士須馬
以上四人御用人席		
10石2人扶持	御用達	生形新八
50石	御隠居様御附 御用達役	河野熊之衛
6石2人扶持	御用達席 御吟味役	伊藤角兵衛
此三人御用達席		
8石2人扶持	大目付席 御取次	大目付席 伊藤安之進
70石	御取次役	藤井十太夫
50石	給人席 御取次勤	山田五郎左衛門
此三人御取次勤		
10石2人扶持	御供頭 御納戸御守役	龜山藤市
6石2人扶持	御供頭 御納戸	手嶋徳造
6石2人扶持	御近習御弓役 音之助次席 ^(?)	山崎要人
銀5枚1人扶持	御近習席	林伊藤萬司
同上	同上	和兵衛悻 士須馬弟 別段被召出 萬司次席 大治悻
銀5枚式斗扶持	御近習	生形音之助
6石2人扶持	御近習 御祐筆	大塚高之進
是迄藤市より七人平日 御次御近習勤也		
北御殿御附之衆		
4両3分2斗扶持	両御納戸表 御祐筆	安之進悻
4両3分2斗扶持	北御殿御納戸 表之席同上	良左衛門悻
銀5枚1人扶持	北御殿御近習	角兵衛悻
高50石	北御殿御近習	十太夫悻
銀2枚1人扶持	同上	
高6石2人扶持	奥 御附	伊藤藤善
同上	同上	伊藤藤鍵
此兩人御次別席		伊藤藤左
高6石2人扶持	御吟味役 御中小姓上席	藤井辺善
高6石2人扶持	御供組頭格 御仲小姓勤	渡野要
同上	同上	岡
金5両2人扶持	同上	佐久間元之進
高10石2人扶持	御子様方御側 御近習末席	庵原順道
金5両2人扶持	同上	惠西嘉兵衛
半席之者	同上	高松井岩吉
金4両1人扶持	御供目付	平川録藏
御助扶持(2人略)		高西宗藏

八田氏と深溝陣屋

八田氏の祖は、八田篤子氏所蔵「八田系図」によれば、源義朝の子、左衛門尉從五位下筑後守知家であり、子知重常陸国守護に任じて以来、支族多く東国に栄え、この四代後の治久の時足利氏に仕え、その孫長久の時、主家大内氏衰微の後三河国深溝村に住して八田氏を称したという(八田氏祖流および支族の考証については、『姓氏家系大辞典』其の項、『水戸市史』上巻などに譲る)。長久以後の略系は、九四〜九五頁に示すとおりである。

これによれば、同家ははじめ深溝を知行した板倉重昌、松平忠利等に従って、後に「御当家」すなわち重道家分知後にこの知行所支配に当るべく深溝陣屋に勤仕し、その地役人として幕末に至ったものと思われる。但し、八田家所蔵「系図」に、知行（清兵衛・弥一左衛門）が、はじめ重矩に仕え、ついで重直近習となった慶安元年（一六四八）ごろ「御両家役人申合領地支配」とあれば、重直の分知直後の深溝陣屋の支配機構未だ整わず、本家の役人が兼ねてその支配に関与した時期があったと思われる、八田氏はこの時期後間もなく深溝陣屋の支配に関与したものと推定される。

左に参考として掲げた万治四年五月七日付「起請文」は起請人岡田喜右衛門・高倉忠助・名倉弥太夫、および八田清兵衛の名を以て差上げられたものであり、文中の「両御領分」は本・分家の両板倉家を指すものと思われる。（本目録『知行所支配』『収納』『米積払』の項末尾の二史料によれば、八田を除く三名は「板倉内膳正三州中嶋屋敷」所属の者である）。

一、御役儀弥心之及程情を出シ相動、殿様御為第一ニ奉存、御後闇儀一切

仕間敷事

一、両御領分百姓共へ御法度其外被仰付趣折々念之入為申聞、万事正路ニ申付非分少^茂仕間敷候、并私を以依怙最眞堅仕間敷事

一、御勘定無解意御定之通り可相勤事

一、両御領分百姓共へ御恩借之金銀米麦情之限念之入正路ニ仕、委細帳ニ付置紛無之様ニいたし御勘定無相違可仕事

一、両御領分寺社町人江毛頭非分仕間敷事

一、両御領分折々見廻り堤川除諸普請前方修履申付、御山林其外村々竹木不荒様可申仕事

一、御金銀銭御米麦并竹木等ニ至迄自分として為取候儀ハ勿論、借候儀も

前記「系図」によれば、同家の当主は、しばしば若年時に出府して江戸屋敷において主家の近習役等を勤め、一定の勤仕期間後に深溝陣屋に帰つて地役人の勤務に当たつたようであるが、「日記」等によれば、必ずしもそれは慣例ではなかつたようであり、例えば文政年間の内蔵允（知克）の日記等では、若年のときは手習等に明け暮れながら、次第に地役人見習勤務につき、やがて本役となつて行つてゐる例が見られる。

堅仕間敷事

一、両殿様御威光を以少^茂邪道仕間敷事

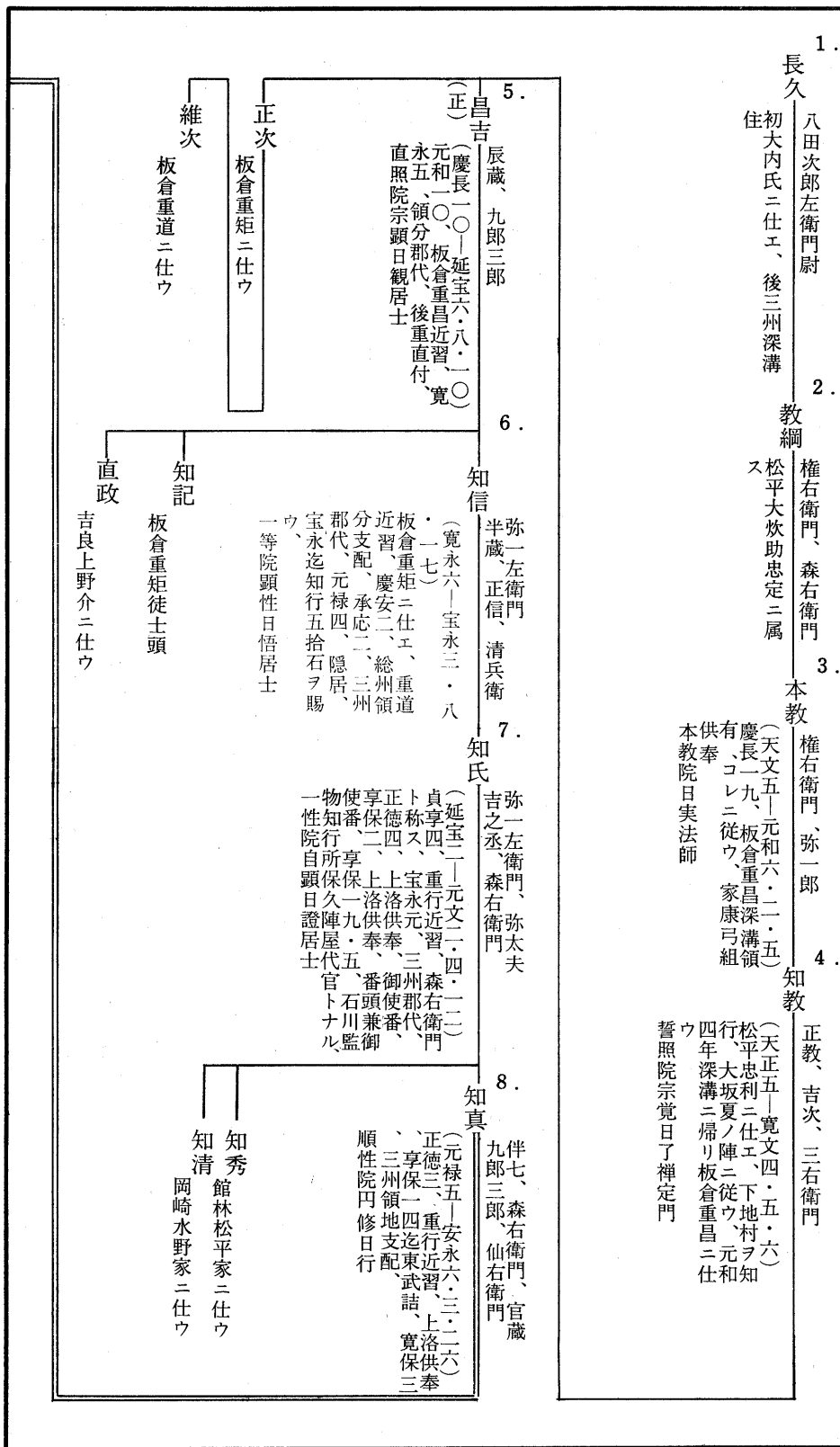
一、両御家中并両御領分百姓へ薪松葉伐候砌、随分念之入指引仕、少も非分無之正路ニ可仕事

一、近き親類縁者并筋目在之者之外、両^{（御脱カ）}領分寺社町人江金銀米銭諸道具衣類竹木菓子肴如何様之少き物ニても一切請取申間敷候、尤此方^ル所望茂仕間敷候、惣而少ニ而も取間敷物と存候分ハ堅取申間敷事

一、両御領分百姓共身持能致、作等念之入少も不修様ニ切々為申聞、惣而非分成儀ニ而痛不申候ニ常ニ心を掛可申事

一、四人切之寄合両領分之儀心之及程心底不残致相談、万事正路ニ可仕事（以下、切支丹穿鑿、山廻り、博奕禁止の項三ヵ条略。句点は引用者が付した。以下同じ。）

〔八田氏略系図〕



9. 伴七(郎)、森右衛門
宮地権六男

知武

(?—天明四・三・一)
板倉家勤仕
一心院知三日親居士

知徹

官藏、九郎三郎
(宝曆三?)—天明四・七・四)
有故、諏訪内膳永良陣屋勤仕、
知行所支配
慈眼院淨円日視

10. 知足

多門介、猶右衛門

11. 知雄

伴七、森右衛門
知武四男、

12. 知房

弥市
知足二男、

(明和五—文化六・一一・二七)
天明七、板倉勝義、東武浅草
屋敷勤仕、
還妙院義山日全居士

(?—文化一四・某月・二七)
実兄知足病死ニ付、准養子
文化七ヨリ板倉家勤仕
隆源院忠山日慎居士

(?—文政五・某月・八)
伯父病死ニ付、准養子
板倉家ニ雇ワレ領地支配
還静院了山日惠居士
(江戸卒)

13. 知克

内藏吉、右衛門次郎
実父知雄、

14. 知禮

鎗之助、内藏允

(文政七?)—明治三・一〇・
二九)
知房病死ニ付、准養子、文政
一三、板倉家ニ雇ワレ、知行
所支配
嶺松院琴風顯妙日達居士

(天保三—
維新後深溝住、士族編
入、明治七・三、第十
大区五小区長、八年免
村会議員。

15. 郁太郎

知一(亡)

寿子(亡)

茂々代

篤子

凡 例

- 一、代々当主名右下は、幼名、通称、続柄等を示す。
- 二、アラビア数字は、便宜上の代数を、IIは養子を示す。
- 三、左下は左へ順に(生年—没年)、略歴、法号等を示す。
- 四、本系図は、八田篤子氏所藏「八田氏系図」「過去帳」等をもとに作成した。

地役人は、通例三乃至四名その名が見えるが、八田氏以外では、普通、三州の知行所四カ村の庄屋役を勤めたものの中から人材を登用してこれに宛てたようである。その氏名等は、各史料についてできるかぎり姓名を表記したので、これに依っていただくことにするが、八田家がその家柄(板倉氏との関係)から言って、特別な事情のときを途いて、ほぼ全時代を通して筆頭地役人の地位にあったとみてよいようである。

深溝陣屋は、三河国額田郡深溝村(現愛知県額田郡幸田町深溝)に置かれたが、その位置は、現幸田町大字深溝字丸の内の旧深溝城址と推定される(別掲絵図参照)。しかし、規模・構成など詳細は不明であり、陣屋と八田私宅との関係も明らかでない。地役人は数名の陣屋詰仲間、定使を抱え、村々庄屋(および配下の肝煎以下の村役人)を指揮して、収納を中心とする知行所の支配に当った。宝暦二年ごろ、地役人は、八田森右衛門が扶持・役料共一三石六二六、外に味噌大豆五斗代〇石四五七五、斎藤領助が同七石六二二六、金子又左衛門(池野与八共。池野氏については後述)が同四石八〇〇を給与され(負担は奈嶋村を除く四カ村)、庄屋は、深溝村、江原村、駒場・岡嶋村の順に六石から一石三斗までの庄屋給をうけている。これらの給与額は年度によって若干の異同が生じているようである。深溝陣屋は三河国四カ村の外に、山城国奈嶋村の支配にも当たったが、八田氏がその年の収納時期前後などにしばしば現地に出張していることが史料にも見えている。ところで、八田氏は、深溝陣屋において三州四カ村、城州一カ村の知行所支配に当ったほかに、すでに触れたような経由をもって本家板倉氏の知行所支配にも兼ねて当っている。本文書では、三河国幡豆郡貝吹村(四六九石五〇一)一カ村の史料がこれに当る。若干の年貢収納関係史料によれば、その終期は正徳四年であるが、詳細の検討は省く。

一方、手留類(『陣屋』『記録・日記』『八田氏手留』史料²―³)によれば、前出知信の子知氏(弥太夫)の代、享保一九年(一七三四)七月のこととして、

今度知行所為支配代官八田弥太夫差遣候、尤梅村左兵衛近藤弥助并陣屋付手代墨江勘右衛門下知請、諸事無作法無之様(下略)

(石川総共カ)

監物

領分三二カ村

庄屋肝煎・惣百姓共

とあり、弥太夫は、同五月一四日(在江戸)付で、代官起請文を差上げ、拾人扶持給人格となっている。「日記」の項所収、享保一九年日

記にも、出府時におけるこの前後のことの詳細な記事が見える。この件は、領主石川総共(カ)の先々代に保久村百姓から取立てられた陣屋勘定役梅村奎兵衛退役一件(詳細は²⁵⁰参照)とも関連があるように思われるが、これをもってすれば、知氏は享保一九年五月をもって旗本石川監物知行所(四、〇〇〇石)三二カ村の保久陣屋(現額田郡額田町保久)詰代官に就任しており、一方では板倉家知行所村々廻村記事も「日記」に見えるので、板倉・石川両家の在所支配を兼ねて行なったものと思われる。尤も前出史料所収の差出「親類書」に「一、悴八田森右衛門 板倉帯刀様ニ御扶持被下、在所深溝罷在候 一、二男八田儀左衛門 兄森右衛門一所罷在候」とある上に、享保一九年以降の知氏在世中日記には、ほとんど石川知行所支配に関する記事しか見当らないことからすれば、この時期は専ら子知真(森右衛門)が板倉氏の深溝陣屋詰地役人の職務執行に当たったものであるうか。知真代の日記には、すでに保久陣屋関係の記事が消滅しているので、終期は不明であるが、石川氏とは知氏一代限りの主従関係であったものかとも推定されるものの、これも確証はない。

*知行所村の構成は次のとおりである。(当館所蔵「郷帳」(元禄十四年)による。)ここでは、三二カ村しかみえない。

幡豆郡 高川原村

額田郡 大林村・保久村・富尾村・赤田和村・笠井村・竹沢□村・柳田村

賀茂郡 加納村・御船村・石畳村・上川口村・下川口村・菅生村・大地沢村・阿蔵村・梨野村・宇連野村・高野村・野原村・保殿村・吉平村・羽布村・

大見村・栃立村・大桑村・神殿村・梶村・蘭村・小松野村・和合村

なお、前掲「略系図」にも見るごとく代々当主の弟は、多く他の大名や旗本家に出仕しており、前出「親類書」にも、従弟齋藤貞七(板倉甲斐守、百石、馬廻り)、同武田造酒右衛門(松平家、御用人)、同岡田伴太夫(諏訪若狭守、三州知行所支配)、甥山上清右衛門(土岐丹後守、百石、者頭役)、三男弥七(水野監物、中小姓)等他家奉公のことが見えていて、徳川幕藩制下における同家および一族の社会的地位の一端をうかがうことができると同時に、既述のように、幕藩制前期以来、八田家が必ずしも板倉家との譜代的な関係を維持し続けていない事実も、また看過できないであろう。

文書の特徴と関連史料

既述のように、本文書の本質は、知行高八千石の旗本知行所支配に当たった地役人の作成・襲蔵文書であるが、その特色の第一は、貞享年間から万延年間に及ぶ百数十冊の陣屋日記(部分的に私的内容も含む)に代表されるような、旗本陣屋の政治的・社会的機能(機構や権限も含めて)が具体的かつかなり系統的に捉えられる史料を多く含むことであり、第二に、とくにその知行所支配機能の中で、年々の収納業務の具体的内容を示す史料が、比較的にまとまって存在することであろう。

〔八田氏および深溝陣屋印章〕（八田家文書による）

（享保一六年）



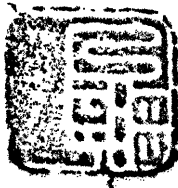
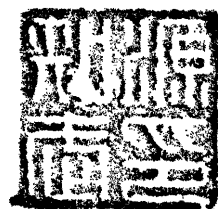
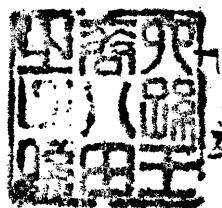
（天明六年）



（寛政三年・知足）



（寛政七年）



（文化九年・知雄）



（文化九年）



加えて、既述のごとく、本文書は、とくに幕藩制前期における旗本陣屋成立の事情、あるいは陣屋元地役人・代官の社会的系譜や社会的・歴史的地位を考察する場合にも、看過できない好史料を含んでいるのではあるまいか。八田家個有の史料（土地経営や相続関係等）の発見がなされれば、こうした課題が次第に明らかにされるものと思われる。

但し、遺憾ながら、現地八田氏旧邸において、この関係史料は未だ発見されておらず、現八田家には、系図類三巻・過去帳一帖の外、これを徴すべき史料が所蔵されていない。旧知行所の村方史料も、まとまったものが発見されていない。また旧地役人の辻村（江原村）、本田（駒場村）、鳥居（岡嶋村）各家にも、陣屋支配文書に属する史料は、ほとんど見当たらないという（西尾市史編さん室のご教示による）。これらについては、旧奈嶋村の京都府城陽市を含めて、なお今後、若干の調査の余地があろう。

なお、領主板倉家は、系譜（「寛政譜」を若干補完できるもの）二冊が保存されているのみであり、菩提寺長円寺（西尾市貝吹町）にも同家個有の関連史料は見当たらない。

史料の配列と概要

史料は、全体を『深溝陣屋』、『知行所支配』、『八田家』および『板倉家』の四つに大別し、配列した。以下、その方針と史料の概要について略記する。（文中ゴチック活字『』内は大項目、『』内は中項目、『』内は小項目を示す。なお、つぎの「旗本船越氏和州御用場文書」についても同様である）。

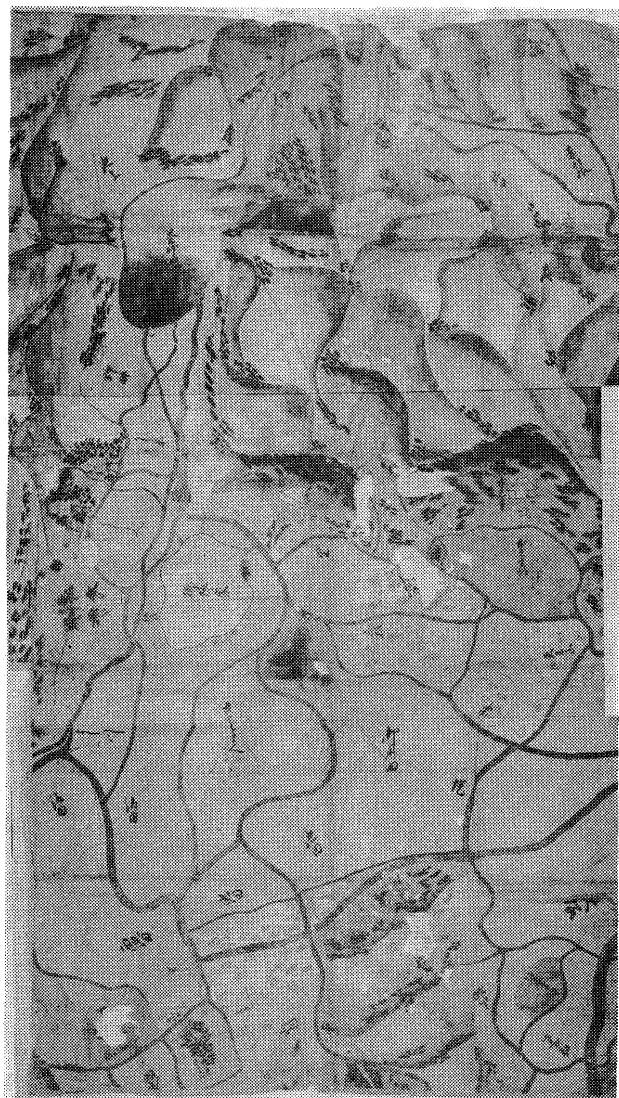
深溝陣屋

この項は、大略、深溝陣屋の機構・機能などを概観できる史料を配列した。

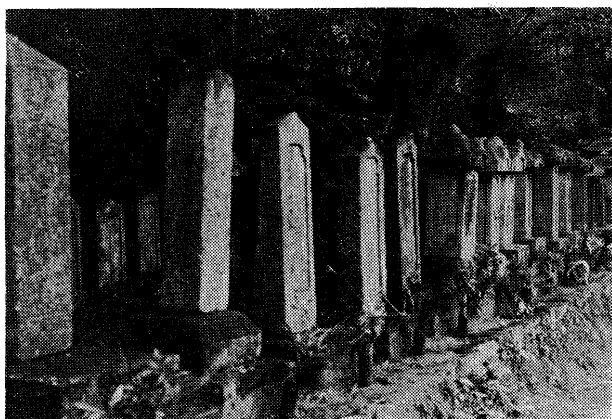
『地役人』『任免』の項、史料は先述のように両板倉家への両家陣屋地役人の起請文である。「御勝手向」、「陣屋入用」は、本来史料成立上の流れとしては、後の『知行所支配』収納の項に入るべきものであるが、ここでは、関東三カ国知行所村々（史料では「三関」と称している）を含む村方「御賄」関係史料や領主側の御達等も含んでいたりと、陣屋入用独自の史料もあるので、この項に置いたが、当然、『収納』のうちとくに「米積払」、「陣屋請払」の史料と内容上関連して利用されるべきものである。幕末期の領主財政が、陣屋あるいは村賄に転化していく史料が含まれている。

「判物預り一件」は、深溝村池野家宛の伝家康黒印状を、池野家当主幼少につき陣屋で一時預った際の証文である。現在、同家にこの黒

深溝村絵図（八田家文書 四三六）



八田家墓所（幸田町 長満寺境内）



印状が所蔵されており（八八頁写真参照）、史料227に見える宝蔵が同家宅地内に現存する。

『記録・日記』の項、「八田氏手留」は、板倉家やその家臣団、出入人、知行所等に関する陣屋役人としての手留類で、これらの概要を把握するさいに便利なものである。末尾の史料227-1は、本文書中、八田家が旗本石川監物知行所額田郡保久陣屋の代官を勤めたことを証する唯一の独立した史料である。「日記」のうち、享保一九、同二一兩年のものが、この時の代官日記である（先述）。

「日記」は、大体年代順に配列した。表紙削落のものでも内容から年代を推定できるものはその位置に置いたが、不明のもの、判定の手がかりの少ないもの等は、後に一括して後考に待つことにした。大体陣屋役人としての役向日記であるが、私的な記事も少なくない。表紙に、「私用 御用ハ別帳ニ記ス」（160）とあったり、逆に、「陣屋」と明記してあるものでも、内容上とくに目立った差があるわけではなく、「八田氏」（あるいは特定の人名）とあることも少なくない。初期のものほど記載内容は微細、豊富にわたるが、後期のものは簡単になり、その分だけ簿冊も薄くなつて来る。文政期の内蔵吉日記等は、連日「手習ニ行ク」記事が目立っている。なお、本日記は、ある時期に表紙を付け替えたと思われるものが少なくない（例 148）。

ここで、次に陣屋職務の一端をうかがい、かつ本文書との対応関係を知る手がかりとして、引継目録を引用しておく。

「文化十三年

（表紙）
旧来御預り之御用物請取帳

子

」（史料6）

老番 一文化辰五年宗門帳	五ヶ村分 奈嶋村共	六番 一文化三寅年宗門帳	深溝村五冊 五人組帳共
貳番 一同八末年宗門帳	三州四ヶ村分	一同年宗門帳	岡嶋 同断村
三番 一同七年年同断	五ヶ村分 奈嶋村共	七番 一寛政十貳申年宗門帳	深溝村貳冊
四番 一同四卯年同断	三州四ヶ村	一文化九申年宗門帳	奈嶋村貳冊 五人組帳共
五番 一文化六巳年宗門帳	五ヶ村分 奈嶋村共	八番 一文化五検見帳七冊	同村

九番	一諸附立帳一縊リ	六拾沓冊	十七番	一江原村反別帳写	六冊
十番	一金米帳御用狀	十三冊	十八番	一御收納御勘定帳 其外 沓冊	七冊
其外			外横帳		
外三拾八通絵図沓袋	文化五辰傳木書 袋入		十九番	一文化五辰年深溝村下免定	沓冊
一御用狀案紙	一縊		式拾番	一文化五同七同拾郷帳	三冊
其外拾冊四通御普請一件袋			式拾沓番	一文化十奈嶋村檢見帳	沓冊
一御用狀案紙	一縊		一享和江原村五人組帳		沓冊
來狀 五拾八冊			外式通		
横帳三冊沓枚			一文化六株中印形帳奈嶋村	沓冊	
十三番	一來紙御触書其外書狀	沓縊	一焼印	沓本	
九拾六通沓冊			右之分八田方ニ而中根次兵衛当村道寿兵助勝右衛門立合見分ケ候、子九 月廿七日当村三人八田弥市郎、斎藤富右衛門辻村教馬江請取之		
十四番	一文化年中御陣屋御書物	沓縊			
一御書出					
文化辰年 八通	沓包		(沓番脱カ)	一前々宗門帳式百冊	十縊
同 巳年 式通			一前々濟口印形帳其外式百拾五冊	沓縊	
一 同	享和 戊年 式通	沓包	三番	一古書物百七拾四通	
寛政十式年 式通			四番	一奈嶋反別帳檢見帳、五冊	沓
文化元子年 四通			五番	一永代壳渡証文留式冊	沓
一被仰渡書		五枚		年賦金留帳 沓冊	沓
一御印紙					
御消印藤井十兵衛殿(差上ル					
右					
十六番(註、十五番見エズ)		深溝村分			
一文化十三子年博奕請書		三冊			

鉄炮御改帳 壹冊

六番
一二条大坂御番之節奈嶋用

書物

一前々宗門帳百六拾三冊

煙方

一附立帳并山手帳九冊

右之通請取申候

子九月廿七日

是夕十月二日請取申候

一寛永年中郷帳

一慶安年中同

一承応年中同

一明曆年中同

一万治年中同

一寛文年中同

一延宝年中同

一天和年中同

一貞享年中同

一元禄年中同

一宝永年中同

一正徳年中同

一享保年中同

武番

壹 經

八 〆リ

壹 〆

貳 冊 九郎三郎

三 冊

六 冊 九郎三郎

三 冊 清兵衛

貳 冊 九郎三郎

拾七冊 弥一左衛門

九 冊 同人

三 冊 弥一左衛門

四 冊 弥一左衛門

拾九冊 弥一左衛門

八 冊 弥一左衛門

五 冊 森右衛門

貳十冊

一元文年中同

一延享年中同

一宝曆年中同

一明和年中同

一安永年中同

一寛延年中同

一天明年中同

一寛政年中同

一天明年中同

一寛政年中同

一御旧地郷帳

一文化六九十

一年号不知郷帳

三番
一前々御勘定帳

四番
一米金帳

五
一宗門帳

一深溝村小絵図

六
一永代田畑手形帳

一金銀請払帳

七
一前々御勘定帳

八
一諸帳面 但横帳

五 冊

五 冊 森右衛門

拾三冊

七 冊

七 冊

三 冊

七 冊

壹 冊

七 冊

壹 冊

壹 冊

三 冊

壹 冊

四拾六冊

貳拾八冊

貳 冊

壹 枚

貳 冊

五 冊

貳 冊

貳拾壹冊

五拾冊

九	一同断	同断	五拾冊	但 元金貳百兩分 利金 百兩分
拾	一同断	同断	五拾五冊	貳拾老 一江原畑方檢地帳
十老	一万治郷帳	合帳 三冊	貳拾式 一深溝村田方同断	貳拾冊
	武州葛西檢地帳 慶安	老冊		
	城州奈烏村郷帳 元禄	老冊		
十貳	一諸帳面 立帳入込	拾八冊	從是十月三日請取分 貳拾三 一諸帳面	七冊
十三	一國役御普請書物	老袋	貳拾四 一御用狀來帋	四冊
十四	一諸帳面入組	拾冊	一同案紙	貳冊
十五	一下免定	拾三本老縊	廿五 一諸帳帳	拾貳冊
十六	一國役手形 四拾八通 一其外書付	老 〆	貳拾六 一江原村一件	老袋
十七	一古証文品々もの 一 〆 一いし一件 一 〆	老縊	一堅紙書物 一御下知書	七拾七通 老通
十八	一御用狀 貳通	老 〆	一江原いし一件	老 〆
	案紙 老冊		一奈烏書物	老通
十九	一海野与五右衛門請取帳 (カ) 一西ノ御勘定下	老冊	一御陣家絵図	老袋
	一亥年笠松請取書貳通	老冊	一掛硯	老枚
	貳拾番	老包	一明荷	老ツ
			一御鉄炮	拾五挺
			一同飭台	箱入

右書面之通前々御預リ之御鉄炮并諸帳御書物其外此度相改請取申所相

違無御座候、為其仍而如件

文化十三丙子年

十月四日

八田弥一郎殿

辻村 数馬 ㊤

斎藤富右衛門 ㊤

『御用状』のうち、「江戸御用状留」と「江戸奈嶋御用留」の分割は便宜上のものであり、併用されることが望ましい。他の三項は、ほぼ宛名人の年代順に配列した。内容上、他の複数の項目を含むのでその該当事項の各項にふり分けることができなかった。多様な内容を含むので、関係項目を参照されたい。

本項は、知行所村方支配に関するものを収めた。

『知行所支配』

『支配』は、主として村方を対象として領主・陣屋側の支配・統治関係の包括的な史料を収め、個別的な主題のものは、これを除いた。法令・申渡等とその「請印帳」もここに配し、村役人への「扶持米渡手形」もここに置いた。村役人の年間の個別的な役向の傾向を一応さぐるための手がかりとなるためであるが、史料成立の過程からいえば、『収納』の一過程であり、内容的にもその項の史料と関連を持つので、この項目を全体として『収納』に参照項目として置いた。なお、以下、史料を村順に配列したときの順序は、とくに断わりのないかぎり、すべて、貝吹村↓深溝村↓江原村↓駒場村↓岡嶋村↓奈嶋村とする。貝吹村も一緒にしたのは、この史料が極少量である上に、当初は、深溝・中嶋両陣屋の支配が一体化していて、分離する必然性がないことにもよっている。

『土地・戸口』の「高反別」は新田のみで、史料 304-3 の性格は不明である。「朱印地書上」は、性質上、『寺社』の項に項目として重出するものとした。「地改」の三史料は、本文中、最も古い年代に成立したもので特別な位置づけが必要と考え、「高反別」とは別立てとした。「五人組帳」は、史料 258, 249 のみ持高記載がある。「宗門改帳」は村順とし、この中を年代↓書上寺院ごとに分けた。いずれも、持高記載はない。「欠落」の大部分は中間欠落に関するものと、斎藤権右衛門出奔に関わるものである。前者については、「中間奉公」も参照されたい。「出稼願」は、幕府のいわゆる天保改革における「人返令」に関わるものと推定される。天保一四年の陣屋日記が欠落しているので、手がかりとして唯一のものといえよう。

『収納』の項の諸史料は、本文中において「日記」と並んで最もまとまって、かつ系統的な利用可能な史料群である。冒頭に「検見」の史料を配し、つぎに年貢取立下帳としての「物成取付・郷帳」を村別に置いた。「取付帳」といい、「郷帳」といっても、いずれも「当年

御取箇付之儀、検見之上吟味仕差上申候」と末尾にあり、ほぼ同種の性質を持つものと理解できる。差上帳簿に対して「免定」が下付された。(前出「引継目録」に見える。)
「年貢米金請取小手形」は、米金両方に關わるものとして表記のごとくし、「納米差引手形」は、中間、商人その他への扶持・給米等と思われるものを配列した。前出『支配』『扶持米渡手形』が、検見・宗門改・米納・水見分・川除等臨時の出張に対するものであるのに対して、これらは定例のものとして扱ったものであるが、年々の差引としては同種のものであるから、参照項目としてそれを掲げてある。

「蔵米切手」は、一連番号が付されたもので、裏に、「阿らきへ出」、「惣左衛門伊左衛門平吉へ出申候」等とあり、表書の日付以後の日付があるもので、蔵出切手として扱った。この年度の収納関係史料が少ないので貴重なものといえよう。「米積払」は断片史料であるが、蔵米流通の一端を窺わしめるものである。後半の寛文九年の史料は、先述の通り、板倉本家の中嶋陣屋に關するものである。「皆済済口差上証文」は、本文書では天保末―嘉永期に集中しているが、幕末期の年貢割付―納入をめぐる村庄屋と村民との紛争を背景にして、村方の連印として差上げられてくるものと推定される。「村々請払」と「陣屋勘定」とは、相互に關連しており、前者は村方から陣屋への勘定仕訳、後者はこれらを集計、整理した、陣屋からの江戸役所勘定所への差出(控)として分類して配列した。「請取」はいわゆる皆済目録に相当するものであり、「御用金」は一応臨時のものとして推定されるものを収めたが、次の「借上」と共に収納関係帳簿の内容検討の際に参照すべきものである。

「中間奉公」については、先述した。「助郷」、「朝鮮使等御用」も断片的なもの、「判物預り一件」は、項目としてここに重出した。

『拝借』は「公金貸付」(借用)と「拝借金請取小手形」(返済)とに分けて対応させた。この項では化政・天保期のみの史料であるが、他の収納関係や日記・手留類によれば、公金拝借は享保期にはすでに行なわれている。「一身田門跡祠堂金拝借」は、借用証文とその別紙(引当証文)が対になっている。なお、これらの三項は、いずれも年代順配列とした。数カ村連名の例が多いためである。

『講』も年代順配列としたが、「頼母子講金貸付」と「長榮講」を分けたのは、長榮講関係史料がまとまっているという理由のみによるものである。なおこの項には、八田家の私的な性質のものも含まれているかもしれないが、いま判別の余裕がないので、ここに収めた。

『災害・御救』の中では、矢作川の南側に位置し、広田川と矢作古川に挟まれた江原村の洪水・地震関係史料がまとまったものである。なお、この項の若干の史料は、次の『御普請』とも対応する。

『出入・訴訟』の「庄屋不帰依」、「彦助博奕一件」、「車屋出訴一件」および「肴商一件」は、化政期と嘉永期にそれぞれの時期の村落社会の変化に対応して展開した、内容・経過の複雑なものであり、その上、その関与者も含めて、内容上それぞれ相互に関わり合う事件として展開して行くので、各項目は一応のめやすとして掲げたものであるから留意されたい。一応、事件ごとに経過を追えるように配列してあるが、この時期の陣屋日記や収納関係史料が極少か内容が稀薄であるため、解明の余地が大きいものと言える史料群である。『寺院』の一部の項は、『土地・戸口』の「朱印地」、「板倉家」の項とも重なり会う。

『八田家』

本項は、可能なかぎり八田家に関わる個有の内容を持つ史料を収めたが、先述のように、陣屋日記をはじめとする『深溝陣屋』の諸史料と分ちがたい史料もあるので、相互に参照されたい。『書状』は宛名人別に、それぞれを年月日順に配列した。消息が多いが、本目録冒頭に置いた御用状類と関連利用すべき役向に関する内容も含まれている。しかし、本来、文書中に、書状類に一括して保存されていたもので、一応ここに置いた。弥一左衛門、守右衛門宛に現われる中嶋与五郎は、渥美郡大崎に六百石の采地を持つ旗本で、祖与五郎重好の母が板倉勝重に再嫁していることから、八田氏と交流があったものと思われるが、詳細は不明である。弥太夫宛書状の数通は、「中嶋与五郎_ら被下御状」綴に一括されていたもので、差出人の全部について詳細も未だ解明していない。梅村全兵衛（前述）書状も、内容上、一応ここに置いた。

『板倉家』

『家系・勤仕』と『菩提寺』に分けたが、前者には、史料の体裁、内容から判断して、本来板倉家作成―襲蔵にかかるものと推定される史料が含まれるが、一応本文書に収めたものである。先述のように、このことの事情も、いま解明する手がかりを欠く。

〔付記〕

本文書の整理および目録の作成・編集には、鎌田永吉が当った。関係史料の調査等に当たっては、多くの方々のご指導、ご高配にあずかったが、とくに左の方々には、たいへんお世話になった。末尾ながら、ここに芳名を記して深甚の謝意に代える。（順不同・敬称略）

八田篤子・板倉利七・愛知県額田郡幸田町・幸田町史編さん委員会・愛知県西尾市史編さん室・西尾市貝吹町 長円寺・徳川林政史研究所 所三男

旗本
船越氏

和州御用場文書目録解題

文書の特性と船越氏

特性と関連史料

本文書は、昭和四五年度に、書店を通じて当館の所蔵に帰したものである。原蔵者は、いまのところ判明しない。史料に表われた若干の事実を総合して推定すれば、大和国宇智郡にあった旗本船越氏知行所村内に居住した陣屋役人高嶋氏（高嶋丈太郎の手扣が多く散見される）の襲蔵にかかるものかと思われるが、確証はない。

本文書の総点数は四〇冊・四八通と少量であり、内容上も、旗本船越氏知行所（知行高総計五、五七〇石）のうち、多くは幕末期の大和国宇智郡内の領地五カ村（いずれも、現在奈良県五条市内）を支配した陣屋（「陣屋」の呼称例は、公式には見当たらないようで、ここでは一応「和州御用場」と称する。なお後述）の御用留・日記類と若干の村支配関係史料のほか、天保一弘化末に発生した神宮寺領紛争一件史料だけの、偏りをもった文書であるが、今回、表題のように命名して本集に収めることにした。

本文書の本体に当るべき史料群の所在、あるいは散逸状況なども不明で、すべて今後の調査に待ちたい。現地の村方史料が奈良県内にあ
るが、断片的なものである。一方、領主船越氏に關しても、子孫の船越ふみ氏（東京都文京区本郷五ノ二〇ノ一）方に明治後作成の過去帳（一帖）、同分家筋の船越景二氏（東京都板橋区南常盤台二一八）方に、船越景道宛徳川家康御内書（一通）（一一三頁写真参照）および分家系図（二卷）が所蔵されているのみである。また、国立公文書館内閣文庫所蔵記録御用所本「（古文書）」（函架番号一五九一三九三）に、寛永年間の写であるが、太閤衆であった船越景道（あるいは景倫も）宛の、天正年間以降の領地宛行状、書状等が数通が収められている。

船越氏と大和の領地

船越氏の祖は駿河国船越に起り、正治二年（一二〇〇）ごろ、源頼家から淡路国慶野庄倭文（しどり）の地を与えられて勃興したと伝えられ、細川・三好家を経て景倫の時に秀吉に従い、子景直は摂津・丹波・近江に領地を与えられて秀吉に仕え四、〇二〇石を領し、同四年摂・河両国のうち四、六四〇石を宛行われたが、関が原の役に徳川方に属して同六年五月大和国宇智郡の内一、五〇〇石を加えられて六、一四〇石を知行し、のち駿河に勤仕した。寛永二年七月、子の永景のとき新田を合して六、

二六〇石となったが、その孫為景のとき、寛文一〇年一二月遺跡を継ぐと同時に五、五七〇石を知行し、七〇〇石を叔父景通に分知して、両家とも以後代々徳川家に仕えたものである（前掲略系図参照）。なお、同家代々当主のうち五郎右衛門景直は、千利休、古田織部らの茶人と交遊のあったことで知られており、子永景も茶人として名があった。（「寛政重修諸家譜」巻八百八十八、高柳光寿「茶人旗本景直」等による）。本文書所収史料は、このうち本家船越氏の大和国内五カ村の領地（一、五〇〇石）の支配に関するものである。左にこの領地の構成を示し、略図を掲げて参照に便ならしめた。

	文 禄	寛 永	元 禄 一 五 年	宝 暦	明 治 維 新
滝 村		※ 三〇九・四二二 船越三郎四郎 石	三〇九・四二〇 船越左門 石	三〇九・四四〇 船越左門 九・一五七 藤堂和泉領	三〇九・四二〇 船越鎌之助 石
車 谷 村	一九七・三三〇 石	九〇・三三〇 村越左馬介 二五・一四九 船越三郎四郎	一〇六・四八二 直 領 二五・一三〇 船越左門	一〇六・四八二 直 領 二五・一三〇 船越左門	一〇六・四八二 五条代官 二五・一三〇 船越鎌之助
島 野 村		三〇五・四〇〇 船越三郎四郎	三〇五・四〇〇 船越左門	三〇五・四〇〇 船越左門	三〇五・四〇〇 船越鎌之助
靈 安 寺 村		六四〇・二七〇 船越三郎四郎	六四〇・二七六 船越左門	六四〇・二七六 船越左門	六四七・三三六 船越鎌之助
御 山 村	三九・三八〇	二一九・七三二 船越三郎四郎 三九・三八〇 本多内記	二一九・七一二 船越左門 四九・二二五 直 領	二二四・八八四 船越左門 四九・二二五 直 領	二二四・八八四 船越鎌之助 四九・二二五 五条代官

（『五条市史』上巻四三八〜四三九頁の表をもとに作成。（一部補訂）。※印は、本文書史料1には、「御料大桑清右衛門御代官所分郷」とある。）

〔船越氏略系図〕

1.

景綸

属細川氏

2.

景直

五郎右衛門
景綸惣領

3.

永景

伊予守、作事奉行
孫市
景直惣領

4.

正景

又十郎 三郎四郎
永景惣領

(一慶長)六・三・一七
豐臣氏ニ仕ウ
晴雲院殿笑翁宗觀居士

(一寛文一〇・九・一)
慶長一六家督
慶元院殿寂光白円大居士

景通

嚴有院殿ニ仕エ、寛文一〇・
一二・一〇遺跡ヲ分カツ
(七〇〇石)

5.

為景

定火消
左太郎 左門
正景惣領

6.

景次

駿河守、御書院番頭
竹五郎、五郎右衛門、左衛門
松平相摸守家臣菅舎人男

7.

景忠

御持筒頭
百助、求馬、左衛門、五郎右衛門、
船越景通二男

(一元禄一五・正・一四)
寛文一〇・一・一〇家督
通玄院殿脱体了解居士

(一元文五・八・一六)
元禄一五・三・一九家督
天了院殿一得道清居士

(一宝曆一三・七・二〇)
元文五・一・一・二家督
寛量院殿慈広儀谷居士

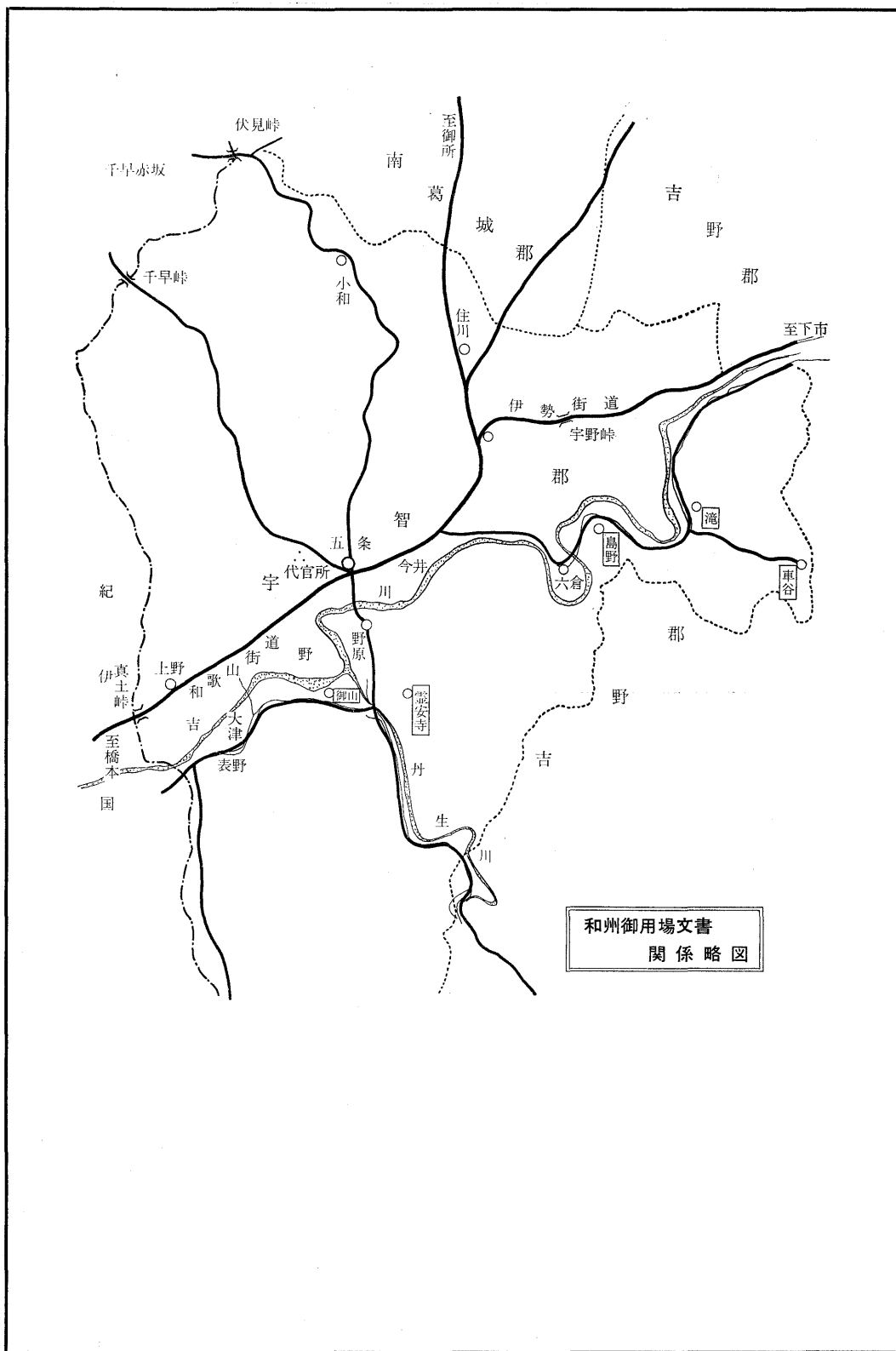
8. 景順 (一享和元・五・一二)
岩松式部
景次四男、
宝曆一二・五・一三
齊徳院厚嶽宗敦居士
9. 景範 (一文政二・二・九)
駿河守、中奥小姓、小普請組
三次郎
酒井遠江守忠興三男
天明四・四・二九
貞観院殿遊翁泰心居士
10. 景有 (一天保二二・二・六)
伊子守
常三郎
景順二男
常田院殿宗直令鑑大居士

11. 景之 駿河守
酒井雅楽頭忠実四男
(一安政五・五・九)
雄心院殿義山宗英大居士
12. 景致 左門
景之男
(一万延元・八・一八)
大光院殿普嶽常照大居士
13. 景郷 (一昭和二三・一・六)
14. 景永 (一昭和二三・八・九)
ふみ

女子
景之五女満智子
〈本家景郷ヨリ分家、後、
廃家〉

凡 例

- 一、当主名右下は、左へ順次に続柄、通称、幼名、官名、職名等を示す。
- 二、アラビア数字は便宜上の代数を、Ⅱは養子を示す。
- 三、左下(一)は没年、法号等を示す。
- 四、この系図は「寛政重修諸家譜」、「船越家先祖代々過去帳」(船越ふみ氏所蔵)によって作成した。





徳川家康御内書（東京 船越景二氏蔵）

文書の配列と概要

配列の方針

利用の便宜のために、本目録に分類項目をたてて史料を配列した。ただし史料の点数や在り方の特性に鑑みて、全体を、『御用場』、『知行所支配』および『神宮寺一件』の三大項目に分けるとどめ、中項目は示さず直接小項目によって区分の大概を示した。（本解題表記上の事項は、前出「八田家文書」のそれにならうこととする。）

『御用場』

この項には、御用場の機能・機構を一応把握できる史料を配列した。「御用状」は、和州御用場から大坂蔵屋敷や摂州（知行所は川辺・豊島二郡内）・河州（同交野郡内）両御用場、江戸御勝手方宛ての用状扣で、差出人の多くは高島丈太郎・北厚治である。宛名の大坂蔵屋敷は、安政年間には五名前後の「詰合」役人の名が見え、江戸屋敷用人は岩田・金子等四名前後が登場する。内容の大部分は、御勝手賄、仕送りに関するもので、農村統治の具体的事情も若干知りうる。なお、和州方御用場の位置については、史料に、天保一五年のこととして「大坂表る御当地江御役所被為御引替在之」とあるが、具体的事情は判然としない。

「日記」は、本文書の中で、御用場による知行所村々支配の具体的様相が、最も良く知られる史料である。冒頭の史料 15 は、

主として借財問題等処理のために出府し江戸屋敷に滞在した時の記録である。御用場の規模や機能を概括的に示す史料は見当たらない。左に、御用場引継目録を示して、その一端をうかがう手がかりに供する。

(表紙) 「安政四巳六月十八日

御用場之内御引渡目録

北厚治(史料26)

覚

一和州五ヶ村基盤絵図

一日記

一触書文通留

一御用書草稿

一家出其外帳外留

一江戸奉公人給米并人別帳

一印判押切
封印

一飛脚通

一五ヶ村宗旨帳

一両掛ヶ老荷

一御紋附提灯

一同断小田原

一手鎖

一十手

一捕縄

一御状塗
白木三

五枚四袋付

灵安寺村溜囃絵図共

嘉永四亥年々当巳年迄

迄

天保十四卯年々当巳年迄

迄

嘉永五子二月迄当年迄

迄

去辰年分 式冊

式ツ

式冊

昨今 両年分

桐油油筒□台棒共

但弓張二張

式張

五挺鎗共

式本房共

式筋

式四ツ

一木刀 大小
脇差

一足怪火事具

一小者火事笠

一同断法被

一紺簾半合羽

一浅黄袷同断

一袷長看板

一赤袖桐油

式拾四点

右者何時御入用共難相斗御品ニ付御引渡申候、御改御請取可被下候
巳六月十八日

高嶋丈太郎殿

十月廿日

一御用小簾筒

一御免状形板

一灵安寺村御林松木入札一件書類

一屯倉掛ヶ銀書上ヶ帳

一関羽掛ヶ物

一十手房

一手錠

式七点

式三本

陣笠
法被

式笠

式ツ

式枚

一枚

一枚

式枚

北厚治 印

式本

式枚

式袋

五村分

一幅

式ツ

六挺

御引渡申上候

『知行所支配』の史料はいずれも断片的なものである。

『神宮寺一件』

この関係史料は、領主船越氏の祈願寺の一つとなっている観応院神宮寺の寺領（除地内社木、寺領田徳）および祈禱料の帰属をめぐる、無住神宮寺の兼帯住職である靈安寺村地藏寺（真言宗）竜然の弟子観教と、村方および御靈宮大明人藤井豊前との紛争があり、結局弘化四年にいたって和解が成立するまでの、「観教申立書」を中心とした地頭役所への差出書類である。事件は、高野山や奈良奉行所も巻添えにして展開するが、結局地頭役所段階で收拾がはかられた模様である。本文書には、他に関係記事はほとんど見当らない。

〔追記〕

本文書の整理および目録の作成・編集は、鎌田永吉が担当した。関係史料の調査等に当っては、とくにつぎの方々に大変お世話になった。ここに、芳名を付記して謝意に代えたい。（順不同・敬称略）

船越ふみ・船越景一・船越景二・宮地伸一・養源寺・平井良朋・安彦勘吾・五条市教育委員会・福井 保

上野国
東小保方村

萩原家文書目録解題

文書の伝来と名称

本文書は、昭和三七年、当館が書店を通して入手したものであるが、どのような経路で書店に流入したか不明である。ところで群馬県佐波郡東村の現在の萩原家には、本館所蔵の萩原家文書の数倍の量のものが、東村文化財に指定されて良好に保存されている。昭和四八年に本館が行なった萩原家所蔵文書の調査によれば、両方の史料ともに、ほぼ同種の内容の史料から成立しており、本館所蔵分は、もともと現萩原家の所蔵分の一部であったと推定されるのである。

ところで、本館所蔵分の文書は、目録本文からも解るように、単なる一家の文書によって構成されているのではなく、(一)旗本久永家の文書、(二)陣屋役所の文書、(三)萩原家の家内に關する文書の三つの部分から成り立つのである。このうち(一)旗本久永家の文書は、たとえば久永親子の間の『往返用状』80、(アラビア数字は史料番号を示す、以下同じ)のように、個々の文書自体は、もともと久永氏の文書であり、これがどのようにして萩原家に保存されるようになったのか、一考する必要があると思われる。まず(一)久永家の文書、(二)陣屋役所の文書の双方の年代的な現われ方を検討してみると、(一)・(二)ともかなり年代的に偏った現れ方を示しているのである。(一)の久永家の文書は、屋敷に關する数通の一連の史料88、103、とその他の若干のものを除けば、ほとんどが寛政七、九年、享和元年、文化三年に集中しているのであり、一方、(二)の陣屋役所の文書は、ほぼ文化・文政・天保に分布していることが解るのである。そして、このような史料のあり方は、東村萩原家歴代墓地の俊蔵保定墓石に記されている俊蔵の事蹟とほとんど一致しているのである。すなわち、俊蔵は、近世萩原家の中心人物と窺えるのであるが、寛政九年二月に江戸久永家に出仕して用人に任ぜられているのである。そして一時病の故に郷里に帰ったのち、再び享和二年に久永源兵衛勝信が駿府城番として赴いた際に駿府と江戸に仕え、文化三年に至ると最終的に帰郷して陣屋役人として勤仕し、病いを得て、家督と陣屋元役を長男の要右衛門に譲って文政一一年に没したのである。この俊蔵の久永家への出仕(寛政九年、文化三年)と、郷里での陣屋役人としての活躍ならびに要右衛門の陣屋元役継承(文化以後)の事実は、前述した(一)久永家の文書(寛政末年、文化三年)と、

(二)陣屋役所の文書(文化・文政・天保)の年代的な残存状況と全く合致しているのである。従って、(一)久永家の文書は、後代に、萩原家文書の中に久永家文書が譲渡等によって偶発的に挿入された性質のものではなく、当時において、萩原俊蔵の活動とともに、活動そのものに由来して萩原家に伝来されたと考えられるのである。すなわち、(一)久永家文書は、萩原家文書とは別個の文書群としてあるべきものではなく、文書の伝来のままに、萩原家の歴史の一部を表現するものであり、従って、萩原家文書の一部を構成するものと解されるべきであろう。本文書の全体を一括して、萩原家文書と呼称する所以である。

(萩原俊蔵保定の墓誌については、井田晃作氏のご指摘を頂いた)

文書の概要と特色

本館所蔵分の文書約六〇〇点は、ほとんどが一枚文書であり、冊子型の史料は数少いのであるが、これは、東村の萩原家所蔵の史料においても同様である。

文書の時期的な現れ方は、すでに述べたように、各項の文書群によって異なるのであるが、総じて、最も時代の遡るものは、元文三年104.であり、以後明治に及んでいる。そして文書の現われる時期的な中心は、おおむね寛政末年以後文久までである。

内容は、東村の萩原家文書の一部と推定されるように、まとまった一件の文書群が少ないのであるが、久永源兵衛勝信と久永源左衛門勝明・内匠信敏の親子の間の『往返用状』は、政治・社会・風俗等の詳細にわたっているものであり、江戸の久永家中から小保方村陣屋への多数の『用状』・『御用状』は、当時の旗本家の勝手方や家来支配・知行所支配の実態を端的に表現するものであらう。

旗本久永氏について

久永氏は、『寛政重修諸家譜』によれば、はじめ石見国石見庄に住して大内家に属し、重吉の時に三河国額田郡に移住して徳川氏につかえたとされている。初代源兵衛重勝は、慶長八年に武蔵国児玉郡・上野国佐位郡・同新田郡、常陸国信太郡・同河内郡において五千二百石を賜わり、内二千石は騎馬同心・足輕分とし、三千二百石を知行したのであって、これがほぼ近世久永家知行地の原形である(なお、代数は『久永家過去帳』の呼称に従った。以下同じ)。その後、三代源兵衛政勝は、内五百石を弟源六郎に分知したが、四代源兵衛重行が天和

〔久永氏系図〕

重吉 源六

(?) 享知三・三
園戲院遊林居士

信重 源左衛門
重吉惣領

(?) 天正一三・六
享祿三・三家督
久園院釈敬閑居士

1 重勝 先手弓頭
源五・源六・源兵衛
信重惣領

(天正廿二) 寛永六・八
永昌院釈經心居

2 重知 先手弓頭・御書院
内記・半之丞・源兵衛
重勝惣領

(慶長四) 寛永一四・八
寛永六・八家督
寒林院釈任誓

3 政勝 御小性組
半之丞・源兵衛
重知惣領

(?) 天保三・七
慶長一四・一一家督
釈浄哲力

4 重行 御番衆・先手鉄砲頭・持筒頭
源六・源兵衛
重知二男

(?) 元祿四・八
正保三・一一家督
親照院釈浄信力

5 勝晴 御小性組・御使番・伊勢山田奉行
金十郎・半之丞・源兵衛
重行惣領・丹波守・重高

(明曆二) 享保一七・三
元祿四・一一家督
恭寥院釈圓休

6 勝興 源兵衛
重形・織部・源八郎
勝晴惣領

(貞享一) 元文元・三
享保五・五家督
高全院釈慈周

7 勝純 八三郎・源五郎・
勝興惣領

(享保元) 寛保一・正
元文元・六家督
恭敬院自嘆

8
勝易
寄合火事場見廻
伊織
勝興惣領
(元文元・二・明和四・一〇)
寛保二・四家督
勝過院积数光

9
勝信
弓頭・駿府御定番
寄合火事場見廻・先手
松五郎・源兵衛
勝易惣領
(宝曆七・九・文政四・七)
明和四・一二家督
深入院殿积浄院居士

10
勝明
八三郎・源左衛門
勝信惣領
(安永六・四・弘化二・正)
天保七・家督カ
乗華院殿积法受居士カ

11
勝愛
源兵衛
(?・文久三・七)
以德院殿积受樂居士

12
勝也
寄合火事場見廻
源六・伊織・鉦太郎
(?・明治六・五)
至誠院殿积義圓居士

13
勝成
14
信一

凡例

- 一、代々当主名、右下ハ右へ順ニ続柄・通称・役職・右肩ハ『久永家過去帳』ノ代数。
- 二、左下ハ生年月―没年月、家督相続年月法号。
- 三、系図ハ、『寛政重修諸家譜』・『柳営補任』・『昇栄武鑑』・『西丸御先手久永源兵衛系譜』(萩原信之氏蔵)・『久永家過去帳』(久永功氏蔵)ニヨル。

二年に再び上野国邑楽郡・下野国安蘇郡において、その五百石分を加えられたのである。ここにおいて近世の久永家知行地の領域が確定したようである。すなわち、久永家知行高は、三代目政勝の一時期を除いては、幕末まで変化はないのである。

久永家の役職や事蹟について、『寛政重修諸家譜』の伝えるところによれば、初代源兵衛重勝は、長篠の戦、小田原の陣、文禄の役の名護屋陣、上杉征伐、関が原の戦、大坂の役等に参加し先手弓頭に就いたとされている。後代は、先手弓頭をはじめ、系図に示したように、書院番頭、番衆、先手鉄砲頭、持筒頭、小姓組、使番、伊勢山田奉行、駿府城番、新番組頭、火事場見廻、浦賀奉行、仙洞付等の種々の役職に補任されている。しかしながら、九代源兵衛勝信が、文化三年三月に駿府城番を辞職した後は、十代源左衛門勝明、十一代源兵衛勝愛ともに無役の寄合衆であり、十二代鉾太郎伊織が慶応二年から寄合火事場見廻りに補任されているのみである。これを本文書との関連から見れば、久永家の史料は、すでに述べたように寛政と文化に集中している故に、九代目源兵衛勝信と十代目源左衛門勝明が中心で、しかも、とりわけ萩原俊蔵が出仕した源兵衛勝信の駿府定番勤役中に文書が多いのであって、それは、あたかも久永家が以後無役となる転換期に当たるものと言えるのである。

久永家知行高は、先に述べたように三代源兵衛政勝の一時期を除いて、三千二百石で幕末まで変化はないのである。その内訳は、現在の萩原家所蔵の文政六年『田方割付帳扣』、文政七年『御勘定帳扣』（井上定幸氏「旗本領における貢租米の地払い形態」『群馬文化』一〇〇号所収）、文政八年『常州三ヶ村御物成米永・先納元利指引凡調帳』によれば、

上野国佐位郡東小保方村八ヶ組・木嶋村	千二百石
同国新田郡西鹿田村	五百石
同国邑楽郡西岡村	七拾石
下野国安蘇郡赤見村	三百七拾一石四斗四升四合
同郡田沼村	五拾八石五斗五升六合
武蔵国児玉郡根本村	五百石
常陸国河内郡駒馬村	百石
同国信太郡村田村	二百拾石

同郡阿見村……………百拾石

である。その総計の高は三千百二拾石であり、知行高三千二百石とされているものと比較して八拾石分不足しているのである。

なお、木村礎氏編『旧高田領取調帳 関東編』を照合してみると、明治初年においては、右の知行地のうち、上野国の東小保方村八ヶ組、木嶋村、西鹿田村、西岡村の全村と常陸国信太郡村田村が他の支配所、知行地となっており、残る各村の高付も相当に出入があり、そこから判明する限りでは、計千二百八拾一石二斗九升三合分が存在しているにすぎない。

また、本文書では、久永氏は屋敷が江戸小日向中ノ橋に在った故に、萩原家などから単に「小日向」とも称されている。

萩原家について

萩原家の家系については、東村の現萩原家の所蔵になる『萩原家系図』によれば、次の通りである。

系図のなかで、本文書に主に現われる人名は、萩原要蔵・萩原俊蔵・萩原要右衛門・長谷川藤次郎・萩原周助などであり、系図上の初代萩原六之丞などは全く史料に見ることができない。また、とりわけ顕著に現われるのは、すでに記したように、萩原俊蔵・萩原要右衛門である。

今、萩原俊蔵保定墓誌・『萩原家系図』と本文書の『久永家御役・扶持・高仰付』の項目他によって久永家と萩原家の関係を見てゆくと、次の通りである。

寛政三年七月	要蔵	中小姓仰付 (28—8)
(寛政六年)三月	要蔵	近習格仰付 (29—1)
寛政九年二月	俊蔵	久永御目見 (墓誌)
同年 九月	俊蔵	用人仰付 (〃)
享和三年三月	俊蔵	用人上席仰付 (〃)
文化三年三月	俊蔵	陣屋元役仰付 (〃)
文化五年閏六月	要蔵	卒 (系図)

〔萩原氏系図〕

萩原六之丞

宝永三・一一卒
萩原院

長男新五右衛門

二男 要 藏

東屋敷第一分家
文化五・閏六卒
萩華院

長男 俊藏

文政一一・九卒
萩昌院

長男 要右衛門

家督相統
慶応四・五卒
仁徳院

二男 藤次郎

江戸出府
長谷川家繼承
別籍江戸住居

三男 周助

弥惣次跡再興

養子 富三郎

家督後数年
ニシテ離縁

養子 喜三郎

早世
藤次郎長男

養子 為四郎

家督相統
藤次郎三男
改名俊藏

凡 例

一、右下ハ没年・左下ハ法名

二、『萩原家系図』(萩原信之

氏藏)ニヨル

文政一〇年 要右衛門 家督（『田畑名寄帳訳書』萩原家蔵）

文政一一年五月 俊蔵 卒（墓誌）（系図二ハ九月ト記アリ）

文政一二年四月 要右衛門 給米三〇俵・耆人扶持（59—4）

天保六年九月 要右衛門 給米四〇俵（59—6）

弘化三年 要右衛門 久永源兵衛勝愛年寄ト『昇栄武鑑』ニアリ

嘉永二年 要右衛門 戸田伊豆守内ニアリ

（嘉永四年） 長谷川藤次郎 御作事下奉行仰付カ（『武鑑』）

右の弘化三年の要右衛門の年寄就任は、記載されている位置から言えば、家来筆頭、家老である。また、この他、文政十二年四月には、要右衛門の母が「古俊蔵骨折相勤候儀ニ付其方（要右衛門）母江為手当差遣候者也」として男扶持耆人を与えられている。

東小保方村陣屋について

久永氏陣屋は、東村東小保方新町（旧東小保方村新町組）に所在していたのであるが、維新後は、一時小学校とされた後、村内各地の神社が集められて大東神社と称され今日に至っているのである。現在は、門の礎石（切石）、旧林の大本の数本、そして旧堀がそのまま「陣屋沼」と称されて残存しているのである。

東小保方村陣屋の支配範囲は、この陣屋役人の萩原家へ宛てた『用状』・『御用状』に「其方去冬常州収納取調、儀右衛門江申付候節之訳、承度候」（105—5）、「根木村受免願、俵数存寄ニ叶ヒ不申候間、許容難致候」（105—36）、「西岡新田村救之義」（105—36）等々の記載が在り、原則としては久永知行地の全域に及んでいたように推測されるが、村方からの差出願書の類に、上州・武州・野州のものが存在するのに、常州のものが見当たらないので、この点は本文書のみでは明確ではないのである。

陣屋元役人の系譜は、寛政以前については本文書に全く記されておらず、それ以降についてもまとまった記録は見当たらない。しかし、『陣屋元』の項の久永家中から陣屋宛の『用状』・『御用状』、あるいは、地方宛の陣屋差下文書、陣屋宛の地方差出文書などに陣屋元の人名が記されているので、寛政～天保にかけての大方の動向は知ることができる。それを年号が明らかな史料に限って表に示したのが「陣



東小保方村陣屋跡

陣屋元史料に現われる役人表

寛政	8	(清水富次郎)	13
"	9	萩原俊蔵・(清水富次郎)	137 / 1
"	10	萩原俊蔵・(清水三郎次・清水富次郎)	170
"	12	萩原要蔵・弥作	93
享和	3	萩原俊蔵	54
文化	2	萩原俊蔵・弥作・(川瀬文右衛門・高橋伴助)	4 191
"	7	萩原俊蔵	105 / 24
"	13	萩原俊蔵・(赤石半蔵・清水三郎次)	14
文政	4	萩原俊蔵・(清水三郎次)	137 / 6
"	6	萩原俊蔵	105 / 100
"	7	萩原俊蔵	105 / 96
"	8	萩原俊蔵・要右衛門	105 / 5
天保	3	萩原要右衛門・周助	105 / 59 126 / 2
"	4	萩原要右衛門・周助	105 / 102

() 内は併記された萩原家以外の人物
右端は依拠した史料番号

屋元史料に現われる人名表」である。なお、この人名について付言すれば、俊蔵・要右衛門に宛てた久永源左衛門書状に、「俊蔵病氣罷在候而も、都而用向書状名前除候事無之候間、名前認メ遣候」(105—28)と記されているように、『用状』・『御用状』の宛名は、個々の差出人の恣意によって記されたものではなく、相当に制度的なものであることが解る。

年号が明らかな史料に限定して作られた表を見れば、第一に、俊蔵の出仕中は、親の要蔵が勤めており、俊蔵の晩年の病中には、長男の要右衛門が補佐し、俊蔵死後には長男要右衛門と三男の周助がともに勤めたことが解るのである。すなわち陣屋元は、凡そ、要蔵—俊蔵—俊蔵・要右衛門—要右衛門・周助の順に継承されるのであり、第二に、清水富次郎や清水三郎次という、後に家老清水六郎右衛門を出す清水家がここに現われているように、陣屋元役人は、必ずしも萩原家の独占ではなかったことが判明する。清水六郎右衛門が久永家の家老を勤めていたことは『昇栄武鑑』嘉永六年・安政三年(史料館所蔵)から解るが、清水三郎次も文化・文政頃に江戸へ出仕していた事は、江戸役人から陣屋宛の一連の『御用状』に差出人として名を記していることから明らかである。また、文政七年『御勘定帳扣』では、清水三郎次は根本村から給米五拾俵を受取っており、これは、萩原俊蔵が小保方村八ヶ組・木嶋村から受取る給米と同額である。

また、文久元年の史料と推定される『一昨四日被仰進候御答』^二には、安政六年に清水六郎右衛門が死去した後に、「養子周作、常々思召ニ不相叶候得共、格別之御勘弁ヲ以、跡目・跡役御陣屋詰被仰付候之処」と、安政六年以後の清水周作の陣屋詰を想定させる文言がある。さらに、東村の陣屋跡には、小泉組神明宮の元治元年四月の年号の入った手洗鉢が移置されており、それには、「陣屋元 清水氏」と刻まれているのである。

久永家役人について

久永家の家老、用人級の役人は、東小保方村陣屋元の萩原氏に宛てて多数の『御用状』を書き送っているのである。この久永家役人についても、『御用状』の差出人としての記載以外に、これを明らかにする史料をほとんど見ないのであるが、今、『御用状』によって、陣屋元萩原氏の各代について久永家役人を列記すれば、次の通りである。なお、差出人のうち、三名連名のものは、『昇栄武鑑』その他によって、ほぼ用人と推定されるので三名連名には右肩に水印を付しておいた。また、史料の現われた年代の明らかなものは、それを()の中に注記しておいた。

要藏時代……萩原俊藏・玉井武太夫・井上勘太夫*

俊藏時代……小宮沢右衛門（文化二）・川瀬文右衛門（文化二）・長谷川要人（文化二）・石川仙右衛門（文化二）・赤石半藏（文化七・一一・一三・文政一〇）・角田勝右衛門（文化七）・清水三郎次（文化一三・文政六・七・一〇）

俊藏・要右衛門時代……清水三郎次

要右衛門・周助時代……大野郡藏・清水六郎右衛門（天保三・四）・松藤啓太夫（天保三・四）・内山録兵衛（天保三）・井上義十郎（天保四）*

右の人物のうちで、本文書と『昇榮武鑑』によってさしあたり役職の明らかなものは、次の通りである。

赤石半藏……「御勝手之御用」105—4

清水三郎次……「江戸表ニ而勝手引受」105—28

井上義十郎……「御勝手老人勤」105—31、「御用役助」105—60、「用人」（『昇榮武鑑』弘化三・嘉永六・安政三・元治元）

大野郡藏……「御勝手見習相勤」105—34、「御勝手相勤」105—60

清水六郎右衛門……「御用人見習」105—60、「用人」（『昇榮武鑑』弘化三）、「家老」（『昇榮武鑑』嘉永六・安政三・元治元）

なお、清水六郎右衛門は、『昇榮武鑑』元治元年には、「家老」と記されているのであるが、東小保方村陣屋の項で述べたように、六郎右衛門は、安政六年に死去していると推定されるのであつて、この点くい違いが存在しているのである。

また、久永家の役人については、文政九年と推定される史料で、久永源左衛門勝明が、次のように述べていることでも解るように、ちょうど俊藏の晩年に当る時期には、全く一変されたようである。

用人共新参、其上此度次兵衛退散、旁人氣動キ一致不致様子、人々我儘ニ相成候哉と見受申候、時運致方なく存候、余り敵敷致候得は荒立、猶差支候事と被察候、先穩ニあしらひ置申候、其方耳ニも色々ひびき候事も可有之、心得方あしく候而は大ニ事ヲ誤候義出来可申、何分堅固ニ戲候存寄無之心得居呉候様存候、扱々何事も相談致し用向取斗候人屋敷ニ無之、申付遣候事も直ニ相成、入用事ハ甚差支、申付度事も扣候事ニ而、心痛致候、能々勘考致呉候様存候、生涯此節之如キ心痛は無之、寢食不安存候、一覽後火投可致候也 105—14

文書の配列と各項の概要

本文書のなかで、幕府作成文書の特殊な表題については、おおむね『史料館所蔵史料目録』第一五集の方法に従ったので、第一五集『土屋家文書目録』解題の「文書の表題について」を参照していただきたい。

配列の方針

文書は、全体を三つの大項目（本文では一〇ポイント活字で示した）に分け、それぞれに中項目（九ポイントゴチック活字で示した）および小項目を置き、必要に応じて小項目にさらに細項目をたてた場合もある。

分類の基準は、原則として史料の内容にそうように、いわゆる「内容分類」に従うこととした。

大項目は、『久永家』・『陣屋元』・『萩原家』の順に配列したが、これは、本文書の残存の中心が、萩原家の、売買貸借証文・奉公人請状等々の狭義の「萩原家」の文書にあるのではなく、久永家あるいは陣屋元への勤仕というような公的な性格の史料にあるために、このような配列の順序に従うこととしたのである。すなわち、ここでは、文書の公的な性格に留意して、萩原家を、近世の社会的な支配の關係に位置づけられたものとして構成されるように配慮した。

配列が内容分類であるからして、かつ又、すでに「史料の伝来と名称」で述べたように、「久永家文書」が萩原家の活動の一環として萩原家に伝来したと考えられる故に、「久永家文書」の全ては必ず『久永家』に分類されているのではないのである。本来久永家の文書であっても、それが萩原家の陣屋元勤方の一環として萩原家に伝来したと考えられるもの、例えば、『百姓騒立一件』に分類した久永氏と勘定奉行との間で往返された書状の如きは、『陣屋元』に分類した。また、幕閣御役替、幕府の諸御申渡、江戸表風聞の書付のような、広義の風聞に類するものは、もともと久永家のものか、萩原家のものかすでに厳密な分類が不可能であるために一応『萩原家』に分類した。

また、『陣屋元』の項目に分類したものの中には、萩原氏が陣屋元へ勤仕中のものではなく、江戸久永家屋敷に出仕をしている際に受けた『用状』等が僅かではあるが明らかに含まれているのであるが、これも、ほとんど江戸におけるものか、陣屋におけるものかいずれであるのか確かに断定し得ないものであるので便宜的に『陣屋元』の項へ分類した。従って、『陣屋元』の項は、厳密には、萩原氏の陣屋元勤仕を中心とする久永家への出仕をも含むものである。

久永家 久永家の史料の年代的な分布は、すでに、「文書の伝来と名称」で述べたように、寛政末から文化初年に集中しているのであ

る。まとまったものとしては、久永源兵衛勝信が、享和二年十一月十三日から文化三年三月七日に至るまで（『柳宮補任』）駿府城番勤仕中の『往返用状』20がある。これには一枚のみ分離している次のような表紙がある。

「文化二乙丑年正月

往返用状

源左殿 駿府
内匠殿

（24×17cm）

この史料群を『往返用状』と呼称する由縁であるが、記事から、それぞれの往返用状の綴込がすべて文化二年であるかどうかは断定できない。駿府は、駿府定番勤仕中の九代久永源兵衛勝信であり、源左は勝信長男の一〇代久永源左衛門勝明、内匠は三男久永内匠信敏である。両名は、『往返用状』本文中では、「兩人衆」と自称することもあり、源兵衛勝信出役中の江戸留守居なのである。

この『往返用状』は、控本ではなく、二種の異った字体で書かれた自筆用状であり、『往返用状』自体が、「此帳紙是切二候間、其方ニて足し返事可被差越候事」20—37と記されているように次々に帳紙が綴込まれて、駿府と江戸の間を往復したのである。また、用状本文の文言の始めには、必ず

廿一日出御定便、同廿四日夕着、御書拝見、翌廿五日御受相認、即日差出申候 20—4

のように受取・差出の日付を明らかにしているのである。この『往返用状』は、残存が途中でしばしば途切れているので、右の「定便」の日付を前書文言から書き出してみると（定便と明記されているものに限る）

一日付定便……………一通

二日付定便……………二通

十日付定便……………十通

廿日付定便……………八通

廿一日付定便……………三通

廿九日付定便……………五通

晦日付定便……………五通

右のように、「定便」はほぼ原則として十日、廿日、晦日の月三回、十日おきに往返されているのであるが、その他に「間便」と称されるものもあり、少くとも三綴以上の複数の綴込が、同時に往返されていたと思われる。なお、末尾に『日野屋請状』187. 等の飛脚史料を置いたように用状綴は「日野屋便」で遣り取りされたようである。記載の内容は、多くの簡条書き形式であり、目録本文に内容の題目のみを摘記し、続けて簡条の数を掲げておいたが、最も多いのは、久永家の勝手方関係であって、次いで知行所支配関係、久永家家内の縁組の類の雑件、久永氏の趣味・風俗等々の記事である。用状を受つ取た側は簡条の一々に朱書で返言を認め、その上で改めて返状を綴り込んでいくのである。

陣屋元

陣屋元史料の年代的な分布については、すでに述べたように、文化・文政・天保に多くが集まっているのである。配列については、陣屋の支配体系に従って、陣屋元から江戸久永家への送金等の『御勝手御用』、ついで、江戸久永家中から陣屋元への種々の指示を含む『用状』・『御用状』を置き、その後に、陣屋の知行地支配関係の年貢収納・公事出入を置いた。

まとまったものとしては、『用状』・『御用状』と『百姓騒立一件』の『阿見村一件』が在る。

『用状』・『御用状』は、江戸からの指示が簡条書で記されているのであるが、本解題の久永家役人の項に差出人についての若干の解説を加え、目録本文に、内容を摘記し、続けて簡条書の件数を記してあるので参照していただきたい。内容は、久永家勝手方御用と知行所支配関係の指示が最も多い。

『阿見村一件』は、「久永源兵衛知行所常陸国信太郡阿見村百姓権右衛門と申者、同国同郡牛久宿人馬助郷之義二付、近郷村々百ヶ村余徒党、当月（十月）廿二日昼、組頭権左衛門居宅小家共打崩シ竹木等迄荒し申候」と記されているように、文化元年九月に水戸街道牛久宿助郷をめぐる百姓一揆で阿見村助郷をめぐる百姓一揆が起り、阿見村久永領の組頭権左衛門の本宅と河岸場小家が打壊された時の関連史料であり、取締りに当っての久永氏と幕府勘定奉行の打合せ書状が主なものである。

萩原家

萩原家の史料については、すでに述べた『久永家御役・扶持・高』以外に特にまとまった史料はないのであるが、『戸田家』の項にあるように、萩原氏は、少くとも嘉永以後には、戸田氏にも奉公したのであり、これは、『諸家諸状』の養子に出た長谷川藤次郎の書状にも「浦賀表網次郎方へ奉公大切ニ相勤候様可申遣候段難在、度々便り有之、殊之外伊豆殿氣二入、殊ニ祐筆相勤候儀二付」

と記されている。

なお、現萩原家所蔵文書のうち、『寛政三年七月 分限帳』の紙背文書には、『天明八年 質之通』と記された質店経営を推定させる帳簿が窺え、文政十年の萩原俊蔵から要右衛門譲分の『田畑名寄帳訳書』には、田畑惣々拾壹町七反壹畝拾三步半也と記されている。

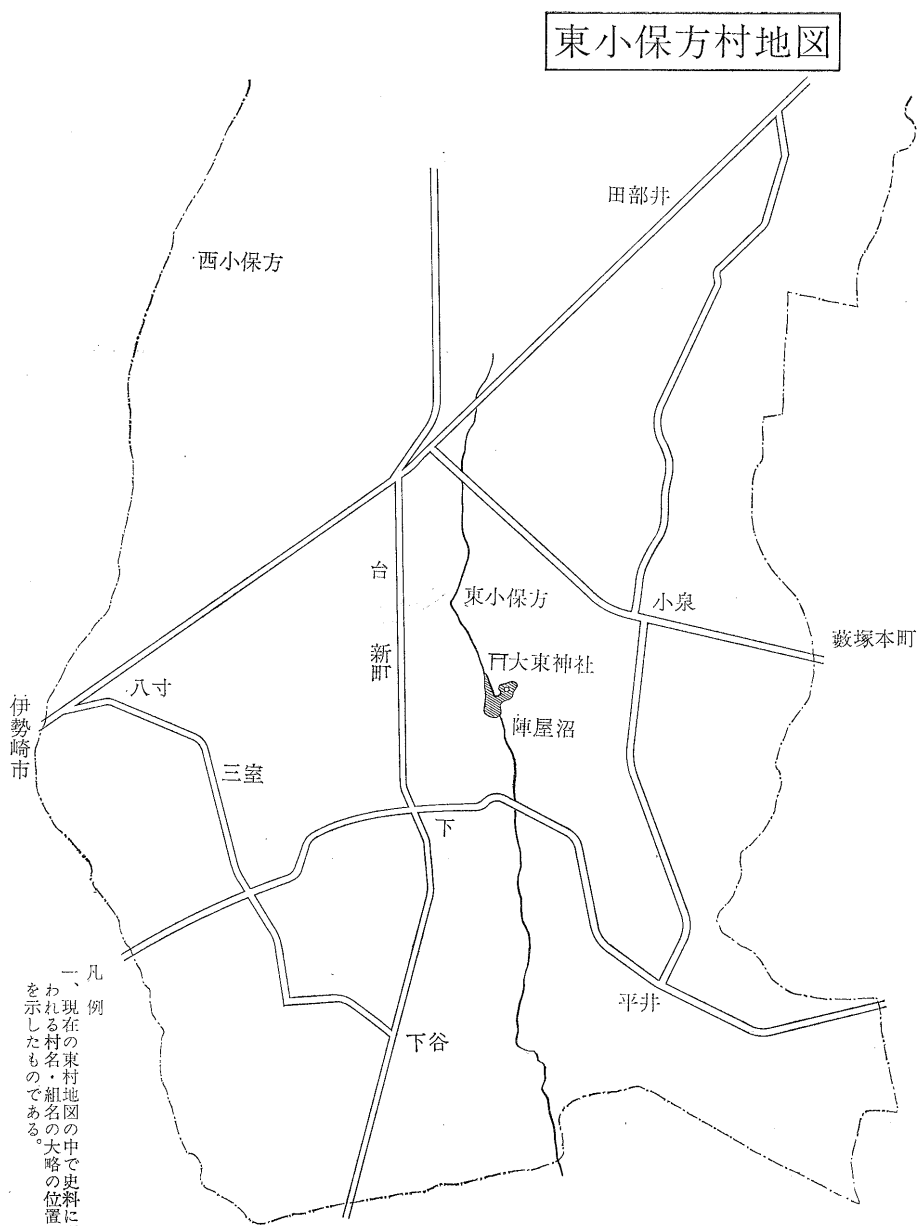
関連史料

東村の現在の萩原家所蔵史料については、すでに述べたように東村文化財として同家に保存されている。久永家の現在の当主は久永功氏で静岡県焼津市大村新田にお住いであるが、文書は、今時の戦災によってなくされてしまったとのことである。この他、群馬県新田郡西岡村には区有文書が在り、埼玉県児玉郡根本村、茨城県新治郡阿見町にも文書が保存されている由である。

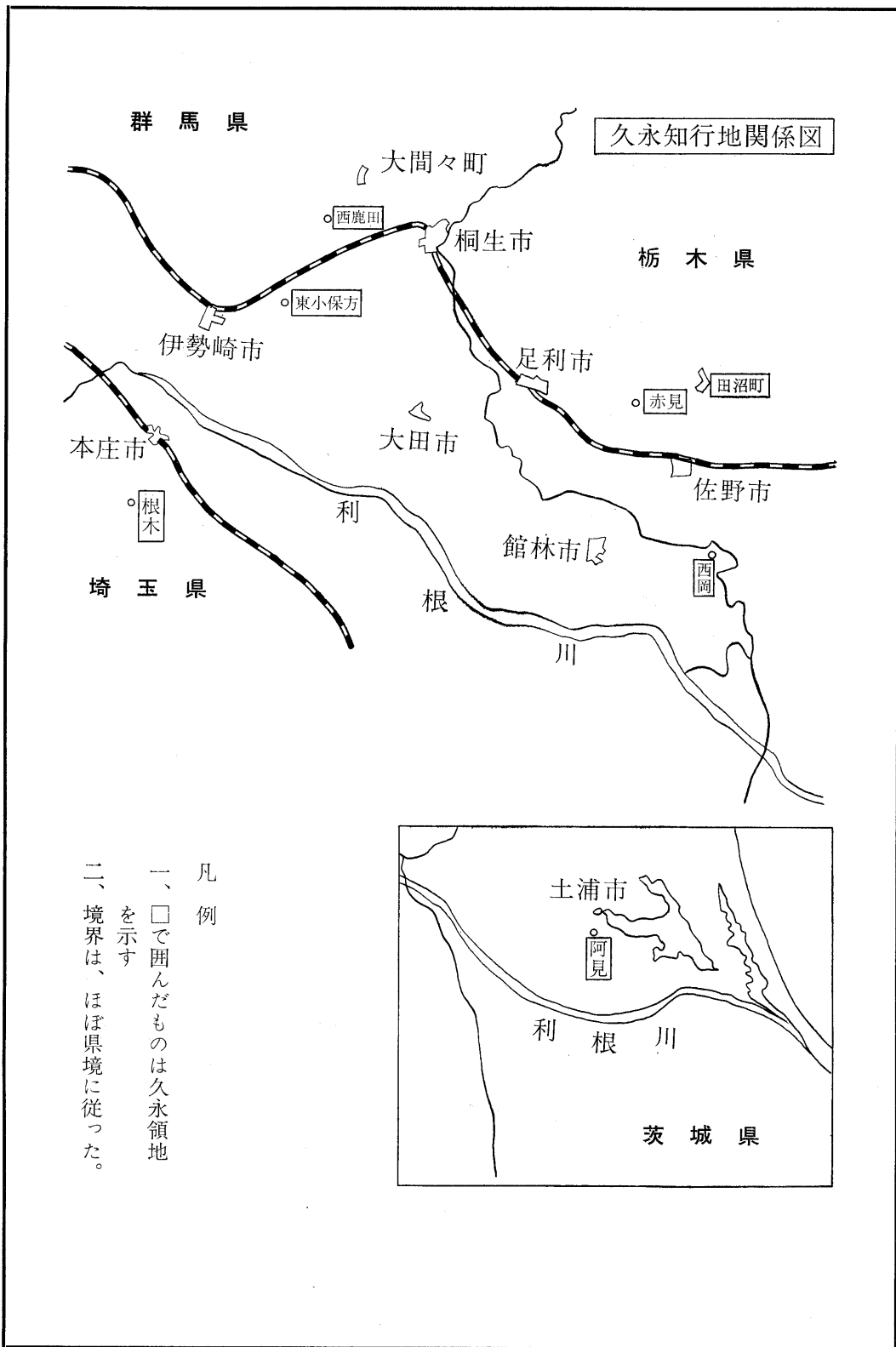
〔付記〕 本目録の作成・編集には井上勝生が当たった。作成に当っては、多くの関係者の方々からご教示とご協力を賜ったが、とくに左記の方々にたいへんお世話になった。末尾ながら、ここに芳名を記して深甚の謝意を表わさせていただきたい。

(順不同・敬称略)

萩原信之 井田晃作 井上定幸 東村教育委員会 東村村誌刊行事務局 高橋 実



凡例
一、現在の東村地図の中で史料に現
われる村名・組名の大略の位置
を示したものである。



史料館所藏史料目錄 第二十二集
昭和四十八年三月三十日印刷發行

東京都品川区豊町一丁目十六番十号
国文学研究資料館内
編集者 国立史料館
発行者

東京都千代田区神田佐久間町三ノ三七
印刷所 株式会社 文唱堂